斐伊川放水路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書XII

蟹谷遺跡
上沢III遺跡
古志本郷遺跡III

2001年3月

中国地方整備局出雲工事事務所
県教育委員会

斐伊川放水路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書XII

蟹谷遺跡
上沢Ⅲ遺跡
古志本郷遺跡Ⅲ

2001年3月

国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所
島根県教育委員会

瓦質土器（古志本郷遺跡Ⅰ区SD02）

土師式土器一群（古志本郷遺跡Ⅰ区SD02）

序

国土交通省出雲工事事務所では、斐伊川・神戸川流域の抜本的な治水対策として斐伊川放水路事業を推進しています。

事業の実施に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分注意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない埋蔵文化財については、事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当事務所では放水路の早期完成を目指し、平成３年度から島根県教育委員会の御協力のもとに調査を行っています。今回の調査箇所からは古墳時代前期の溝や、奈良時代の鍛冶工房などが発見されました。

国土交通省出雲工事事務所といたしましては、今後も同教育委員会と調整を図りつつ、貴重な埋蔵文化財の記録保存するため調査を円滑に進めてまいりたいと考えており、本報告書が、埋蔵文化財に対するより一層の関心と御理解を得るための資料としてお役立ていただければ幸いに思います。

最後に今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、御指導いただいた島根県教育委員会並びに関係各位に対し、心から厚くお礼申し上げます。

平成13年３月

国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所
所長　五　道　仁　実

序

島根県教育委員会は、建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）からの委託を受けて、平成３年から斐伊川放水路建設予定地内遺跡の発掘調査を行ってきました。本書は平成９・10・11年度に発掘調査を実施した遺跡のうち、蟹谷遺跡、上沢Ⅲ遺跡、古志本郷遺跡についてまとめたものです。

斐伊川・神戸川の二大河川が形成した肥沃な出雲平野は、古くから人々の生活が営まれ数多くの歴史的文化遺産が残されているところです。この度の調査では集落をとりまいていたと考えられる古墳時代の溝や奈良時代の鍛冶工房が発見されました。これらの遺跡はこの地方の歴史を解明していく上で貴重な資料となりました。

本書を通して埋蔵文化財への理解がすすみ、地域の歴史学習に役立てば望外のよろこびです。

なお、発掘調査にあたりましては地元の皆様をはじめ国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所・出雲市教育委員会等、各方面から多くの御支援、御協力をいただきましたことに厚くお礼申し上げます。

平成13年３月

島根県教育委員会
教育長　山　崎　悠　雄

例　言

1．本書は建設省（現 国土交通省中国地方整備局）の委託を受けて、島根県教育委員会が平成9・10・11年に実施した斐伊川放水路建設予定地内の蟹谷遺跡、上沢Ⅲ遺跡、古志本郷遺跡Ⅰ区の発掘調査報告書である。

2．事務局は、平成9・10年は島根県教育庁文化財課（勝部昭文化財課長）、平成11年は島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（宍道正年所長）におき、発掘調査は埋蔵文化財調査センターが行った。

3．調査指導は次の諸先生方から承った。（順不同、敬称略）

穴澤義功（たたら研究会）、下條信行（愛媛大学）、安井幸彦（島根医科大学）、尾崎葉子（有田町歴史民俗資料館）、大橋康二（佐賀県教育委員会）、椙山林継（国学院大学）、長谷川博史（広島大学）、古賀信幸（山口市教育委員会）、田中義昭（島根県文化財保護審議委員）、藤岡法暲（島根県文化財保護審議委員）、藤田憲司（大阪府埋蔵文化財協会）、佐古和枝（関西外国語大学）、高橋美久二（滋賀県立大学）、木本雅康（長崎外国語短期大学）、亀田修一（岡山理科大学）、家田淳一（佐賀県立九州陶磁文化館）、岡口広次（青山学院大学）、黒崎直（奈良国立文化財研究所）、牛嶋茂（奈良国立文化財研究所）、三谷拓実（奈良国立文化財研究所）、西本豊弘（国立歴史民俗博物館）、中村唯史（三瓶自然館）、渡邊正巳（島根大学汽水域研究センター）、渡邊貞幸（島根大学）、大口方克己（島根大学）、平川南（国立歴史民俗博物館）

4．発掘調査にあたっては次の方々や関係機関から御協力をいただいた。（順不同、敬称略）

川上稔、岸道三、米田美江子、石原隆文、渡邊真二、野々村安浩、酒寄雅志、関和彦、平石充、守岡利栄、勝部智明、秦雅人、伊藤智、瀧音能之、平野卓治、荒井秀規、菊池照夫、久保田一郎、小林覚、千家和比古、田中史生、山崎修、武広亮平、森田喜久男、千田剛道、松山智弘、出雲市教育委員会、益田市歴史民俗資料館

5．発掘作業の一部（発掘作業員の雇用、測量発注など）については、社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

6．挿図中の方位は測量法による第三座標系の軸方位である。

7．出土遺物、実測図、写真は埋蔵文化財調査センターで保管している。

8．調査員として、埋蔵文化財調査センター職員の宮沢明久、内田律雄、阿部清志、高塚久司、柴崎香織、黒谷達典、野津清、勝部幸治、岩崎裕介があたった。

平成9年　蟹谷遺跡　調査員：宮沢明久、阿部清志、柴崎香織

平成10年　上沢Ⅲ遺跡、古志本郷遺跡Ⅰ区　調査員：内田律雄、高塚久司、黒谷達典、野津　清

平成11年　古志本郷遺跡Ⅰ区　調査員：内田律雄、勝部幸治、岩崎裕介

9．遺物の整理復元には次の方々の協力を得た。

三島幸子、金坂恵美子、井上美由紀、岸美佐子、石橋直子、門脇卓子、横山千鶴、仁島ゆかり、原美樹

10．本書の文責は目次に示し、編集は内田律雄が行った。

11．カラー図版は牛嶋茂氏撮影。

目　次

Ⅰ　調査に至る経緯……内田　1
Ⅱ　遺跡の歴史的環境……内田　2
Ⅲ　蟹谷遺跡……宮沢　8
Ⅳ　上沢Ⅲ遺跡……内田　13
Ⅴ　古志本郷遺跡Ⅰ区……内田　30
Ⅵ　出雲市大津町来原地区の古環境復元
　——「止屋潟」伝承の地質的検討——……中村・渡邊・沢井　67
Ⅶ　出雲・石見・隠岐の朝鮮系土器……亀田　85
Ⅷ　まとめ……内田　110

Ⅰ．調査に至る経緯

斐伊川放水路事業は、斐伊川の計画高水量の一部を中流左岸の出雲市大津町来原付近から新たに放水路を開削して分流し、出雲市上塩冶町半分付近において神戸川に合流させるものである。また、それにより神戸川下流は、神戸川の自己流量と斐伊川からの分流量を合わせ、計画高水量の斐伊川放水路として必要な掘削・築堤工事を行おうとする事業である。その規模は、開削部4.1km、拡幅部9.0kmで、全長13.1kmにも及ぶ。この計画は、斐伊川の流水の一部を早く、しかも安全に日本海に流すことを目的としたもので、島根県が昭和44年に基本構想を発表、同50年に基本計画を策定し、建設省が同50年に確定したものである。ルートの最終決定は54年のことであった。

こうした事業計画の推移・決定のなか、島根県教育委員会は昭和50年度に島根県企画部の依頼を受けて、分流地域の分布調査を実施し、その結果を昭和51年３月に「斐伊川放水路建設予定地域埋蔵文化財分布調査報告」としてまとめた。また、昭和53・54年度には、建設省出雲工事事務所から委託を受けて、上塩冶町を中心とする出雲市全域と簸川郡大社町に所在する遺跡を対象としながら一部発掘調査を含んで分布調査を行い、この結果をもとに、昭和55年３月に『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』を刊行した。

その後、事業地の用地買収が進む一方で、平成元年度より建設省出雲工事事務所、島根県斐伊川神戸川治水対策課、島根県教育庁文化課の三者で協議が進められ、平成３年１月には文化課が再度分布調査を実施した。そして、同年度末には同事務所と文化課との間で協議文書が交わされ、事前に放水路建設予定地内にある埋蔵文化財を発掘調査することが決定し、平成３年４月より発掘調査がスタートすることとなった。

これまでに『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』として刊行された遺跡の報告書は次のとおりである。

1994・3　三田谷Ⅱ遺跡、上沢Ⅰ遺跡
1995・3　上塩冶横穴群第20・21支群
1997・3　大井谷石切場跡、上塩冶横穴群第14・15・16支群
1998・3　上沢Ⅱ遺跡、狐廻谷古墳、大井谷城跡、
　　上塩冶横穴群第７・12・22・23・33・35・36・37支群
1999・3　三田谷Ⅰ遺跡、古志本郷遺跡Ⅰ、上塩冶横穴群第28支群
2000・3　三田谷Ⅰ遺跡Vol.２・Vol.３、三田谷Ⅲ遺跡

Ⅱ．遺跡の歴史的環境

本書で報告する、蟹谷遺跡、上沢Ⅲ遺跡、古志本郷遺跡（Ⅰ区）は、主として古墳時代前期と奈良・平安時代を中心とする遺跡である。ここではこれらの遺跡を取り巻く歴史的環境を二つの時代にしぼり概観することしよう。

中国山地に源を持ち蛇行をくりかえしながら北流し日本海にぬける斐伊川と神戸川は、その下流域に肥沃な出雲平野を形成した。奈良時代に編纂された『出雲国風土記』にはそのころのこの二大河川流域の様子が描写されている。

a．出雲の大川　源は伯耆と出雲と二つの國の堺なる鳥上山より出て、流れて仁多の郡横田の村に出て、即ち横田・三處・三澤・布勢等の四つの郷を經て、大原の郡の堺なる引沼の村に出て、即ち來次・斐伊・屋代・神原等の四つの郷を經て、出雲の郡の堺なる多義の村に出て、河内・出雲の二つの郷を經て、北に流れ、更に折れて西に流れて、即ち伊努・杵築の二つの郷を經て、神門の水海に入る。此は則ち、謂はゆる斐伊の川の下なり。河の兩邊は、或は土體豐沃えて、草木叢れ生ひたり。則ち、年魚・鮭・麻須・伊具比・魴・鱧等の類ありて、潭淵に雙び泳げり。河の口より河上の横田の村に至る間の五つの郡の百姓は、河に便りて居めり。出雲・神門・飯石・仁多・大原の郡なり。孟春より起めて季春に至るまで、材木を校へる船、河中を沿泝れり。（出雲郡条）

b．薗　長さ三里一百歩、廣さ一里二百歩なり。松繁りて多し。即ち、神門の水海より大海に通る潮は、長さ三里、廣さ一百廿歩なり。此は則ち出雲と神門と二つの郡の堺なり。（出雲郡条）

c．神門川　源は飯石の郡琴引山より出て、北に流れ、即ち來嶋・波多・須佐の三つの郷を經て、神門の郡餘戸の里門立の村に出て、即ち神戸・朝山・古志等の郷を經て、西に流れて水海に入る。則ち年魚・鮭・麻須・伊具比あり。（神門郡条）

d．神門の水海　郡家の正西四里五十歩なり。周り卅五里七十四歩なり。裏には則ち、鯔魚・鎭仁・須受枳・鮒・玄蠣あり。即ち、水海と大海との間に山あり。長さ一十二里二百卅四歩、廣さ三里なり。此は意美豆努命の國引きましし時の綱なり。今、俗人號けて薗の松山といふ。地の形體は壤と石と竝びになし。白砂のみ積上りて、即ち松の林茂繁れり。四の風吹く時は、沙、飛び流れて松の林を掩ひ埋む。今も年に埋みて半ば遺れり。恐らくは遂に埋れはてなむか。（神門郡条）

aでは、斐伊川の下流域では土地が豊かに肥え、草木が生い茂っている様子が窺える。川にはアユ、サケ、マス、ウグイ、ウナギがいるとしているので、農耕と共に河川漁が行われていた。斐伊川は今日のように宍道湖に注いでいるのではなく、dの神門の水海でcの神門川と合流していたようだ。神門川（現在の神戸川）にもアユ、サケ、マス、ウグイの記載があり、今日ではほとんどみられなくなったサケ、マスの遡上が注目される。斐伊川と神門川が注ぐdの神門の水海は、今日、神西湖としてそのなごりをとどめているが、風土記の時代には北東側に大きく広がっており周囲が約19㎞もあるラグーン状を呈していた。bにより湖と日本海との位置関係が知られる。この湖ではボラ、チヌ、スズキ、フナ、カキがあるとしている。

1992年に出雲市教育委員会によって、この神門の水海に面していた古代～中世の上長浜貝塚が発

調査された。そこには豊富な魚介類の遺存体や漁具が検出されている。その中の貝類の中には内湾性のマガキが多数同定されている。また、魚類では、スズキ、ハタ、ヘダイ、マダイ、クロダイ、ブリ、イサキ、ボラ、サバ、カツオ、サメ、カサゴ、コチ、フグ、イワシ、ナマズ、コイ、フナ、ウグイなどがある。風土記に記載のあるサケ、マス、アユがみられないのはその骨が遺存しにくいからであろう。

藤原宮出土木簡には、

e．出雲評支豆支里大贄煮魚須々支

と読めるものがある。出雲評支豆支里は風土記時代には出雲郡杵築郷、須々支はスズキである。また、平城京出土木簡には、

f．出雲国煮干年魚御贄

があり、贄として『出雲国風土記』記載のスズキやアユが貢納されていたことが知られる。

斐伊川と神門川は氾濫も幾度かおこしたにちがいないが、その下流域において伊努・杵築（出雲

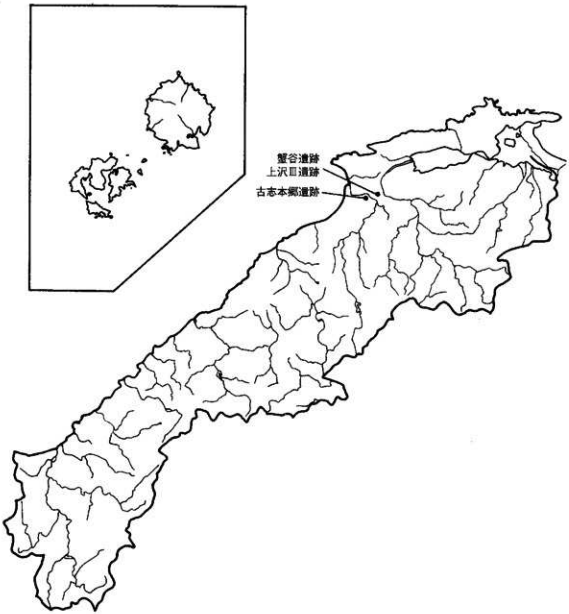


図1　遺跡位置図（1）

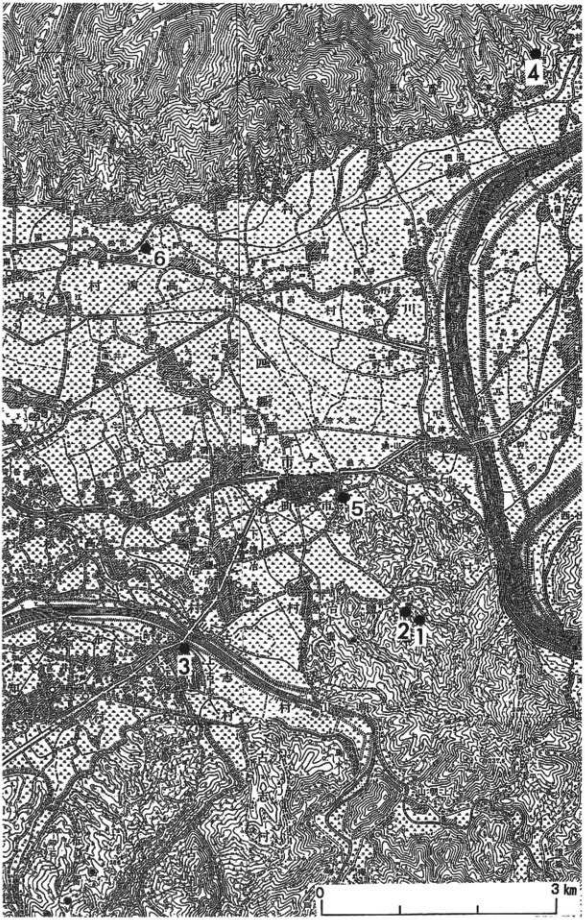


図2　遺跡位置図（2）　1：繁谷　2：上沢Ⅱ　3：古志本郷Ⅰ区　4：大寺古墳　5：大念寺古墳　6：北山持川川岸

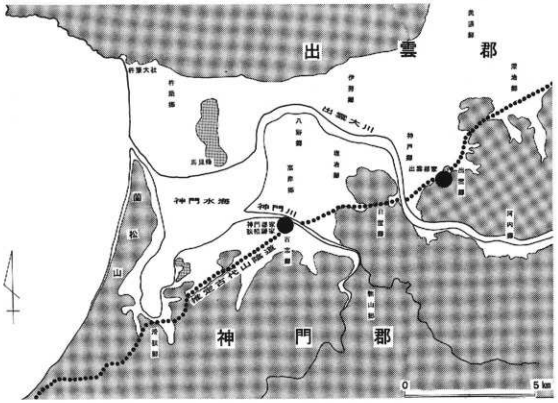


図3　古代神門郡家周辺

郡)、朝山・古志（神門郡）の各郷が編成されていることからもわかるように長い安定期もあった。さらに斐伊川は船が昇り下りし、山間部の郡郷との間に物資が流通する動脈でもあった。

出雲平野は出雲郡と神門郡の主要部分を占め、東西に古代山陰道がはしっていた。駅家と駅家を結ぶ駅路は

g．東の堺より西のかたに去ること廿里一百八十歩にして、野城の驛に至る。又、西のかた廿一里にして、黒田の驛に至り、即ち、分れて二つの道と為る。一つは正西の道、一つは隠岐の國に渡る道なり。隠岐の國の道は、北のかたに去ること卅三里六十歩にして、隠岐の渡なる千酌の驛に至る。又、正西の道は、卅八里にして、宍道の驛に至る。又、西のかた廿六里二百廿九歩にして、狭結の驛に至る。又、西のかた一十九里にして、多伎の驛に至る。又、西のかた一十四里にして、國の西の堺に至る。（巻末記）

とあり、これと重なるかたちで、郡家と郡家を結ぶ伝路があった。

h．〔略〕（出雲）郡家より西のかた二里六十歩にして、郡の西の堺なる出雲の河に至る。渡り五十歩なり。渡船一つあり。又、西のかた七里廿五歩にして、神門の郡家に至る。即ち河あり。渡廿五歩なり。渡船一つあり。郡家より西のかた卅三里にして、國の西の堺に至る。〔略〕（巻末記）

出雲郡家は、簸川郡斐川町出西の後谷Ⅴ遺跡で発見された建物群が出雲郡家に伴う倉庫群と考えられており、遺跡周辺に比定されている。hでは出雲郡家と斐伊川の間が約1.2kmとなり、遺跡の位置とは若干のずれがあるが、近い位置と云える範囲であろう。このあたりは、

i．出雲の郷即ち郡家に屬けり。名を説くこと、國の如し。（出雲郡条）

とする、出雲郡出雲郷であった。

出雲郡と神門郡の郡堺である斐伊川の川幅が現在より狭いのは実際に水が通常流れていた幅を示したものと考えられる。川には渡しがあり渡船が一隻配置されていた。その位置は出雲郡側の剣先と神門郡側の来原の間であろう。

神門郡家は平成10年に島根県教育委員会によって調査された古志本郷遺跡が有力である。ここでは政庁域の一部と考えられる大型の掘立柱建物跡群や円面硯、墨書土器などが発見されている。位置は神戸川の左岸の出雲市古志町にあたる。hの「即ち河あり。」とは、神門郡家が神門川に面していたことの記述であろうか。ここにも渡しがあり、渡船が一隻あった。その位置は現在の古志橋付近であろう。神門郡家は、

j．古志の郷　即ち郡家に属けり。伊弉奈彌命の時、日淵川を以ちて池を築造りき。その時、古志の國人等、到來たりて堤を爲りき。即ち、宿り居し所なり。故、古志といふ。

とあるように古志郷にあった。さらに、

k．狹結の驛　郡家と同じ處なり。古志の國の佐與布といふ人來居みき。故、最邑といふ。神亀三年、字を狹結と改む。其の來居みし所以は、名を説くこと、古志の郷の如し。

とあり、神門郡家と狹結駅が同所にあった。したがって、古志本郷遺跡は狹結駅家の一部でもある可能性がある。gによれば狹結駅から西へ約10.2kmに多伎駅があった。現在、古志橋から南西方向に直線道路があるが、これは明治34年作成の大日本帝国陸地測量部の五万分の一地図にもみられ、もとの古代山陰道を踏襲している可能性がある。

神門郡は、『日本書紀』推古25年（617）条に、

l．二十五年の夏六月に、出雲國言さく、「神戸郡に瓜有り。大きさ缶の如し」とまうす。

とあるのが初見である。神戸郡は神門郡のことであるが、このころ郡制はない。しかし、後の神門郡が、例えば杵築大社（出雲大社）の「神戸」であったことがあるとすれば、そのころ大和王権にそのように認識されていたと考えられよう。『出雲国風土記』神門郡条は、

m．吉栗山　郡家の西南のかた廿八里なり。椹・杪あり。謂はゆる天の下造らしし大神の宮の材を造る山なり。

n．宇比多伎山　郡家の東南のかた五里五十六里なり。大神の御屋なり。

o．稲積山　郡家の東南のかた五里七十六里なり。

大神の稲積なり。

p．陰山　郡家の東南のかた五里八十六里なり。大神の御陰なり。

q．稲山　郡家の東南のかた五里一百一十六里なり。東に樹林あり。三つの方は竝びに磯なり。大神の御稲種なり。

r．梓山　郡家の東南のかた五里二百五十六里なり。南と西とは竝びに樹林あり。東と北とは竝びに磯なり。大神の御梓なり。

s．冠山　郡家の東南のかた五里二百五十六里なり。大神の御冠なり。

として、杵築大社の祭神である天の下造らしし大穴

表1

		出雲国風土記				出雲国郡郷駅名帳			郡内分
郡	郷	里・駅・神戸				郡	里		郷
出雲郡	宍道郷	+	+	+		健部郷	健部里		健部郷
	漆沼郷	+	−	+		漆沼郷	漆沼里	上川里 大上里	漆沼郷
	河内郷	+	−	+		河内郷	伊去里 人長里		河内郷
	出雲郷	+	+	+		出雲郷	郷里 伊知里 伊賀里 多義里		出雲郷
	伊努郷	+	+	+		伊努郷	国造里		伊努郷
	伊野郷	+	+	+					伊野郷
	美談郷	−	+	+					美談郷
	宇賀郷	−	+						宇賀郷
	神戸郷	+	+						
神門郡	朝山郷	+	−	−		朝山郷	加夜里 神原里		朝山郷
	日置郷	+	+	−	+	日置郷	中原里 遠江里 九島里		日置郷
	塩冶郷	+	+	+					塩冶郷
	八野郷	+	+	+	−				八野郷
	古志郷	+	+	+	+				古志郷
	古志駅	−	+	+	+	古志郷	屋敷里 小田里 浦分里		古志郷
	許波郷	−	+			許波郷	波多里 阿蘇里		波多郷
	多伎郷	+	+	+		多伎郷	国引里 山田里		多伎郷
		高戸里				伊秩郷	温水里 堀江里		伊秩郷
		狭結駅							狭結郷
		多伎駅							
		神戸里							

持命の神域（神戸）として神門郡が存在するかのような記述となっている。これらの『日本書紀』や風土記の記述は杵築大社が七世紀初頭には既に存在していたことを推定させる。『出雲国風土記』意宇郡条には、

t．出雲の神戸　郡家の南西のかた二里廿歩なり。伊弉奈枳の麻奈古に坐す熊野加武呂の命と、五百つ鏡の銀猶取り取らして天の下造らしし大穴持命と、二所の大神等に依さし奉る。故、神戸といふ。他郡どもの神戸も是の如し。

とあり、意宇郡、秋鹿郡、楯縫郡、出雲郡、神門郡の五か所に、意宇郡の熊野大社と共有する神戸に分散されるのは、律分制下にいたり国郡（評）制が敷かれたことによると思われる。出雲郡は飛鳥藤原京時代には木簡eによって、出雲評であり、杵築郷は支豆支里であった。

郷里制下の史料である『出雲国風土記』や『出雲国大税賑給歴名帳』によれば神門郡と出雲郡には表1のような郷と里があった。天平5年（733）の『出雲国風土記』は里の存在を記しているが、その里名までは明らかにしていない。それは天平11年（739）の『出雲国大税賑給歴名帳』によってある程度知ることができる。この里名の中には今日も字名として残っているものや風土記記載社と同名のものもある。出雲市半分の三田谷遺跡では「荘原」や「坂本」の9世紀頃の墨書土器が出土しているが、前者は神門郡の日置郷に、後者は伊秩郷に里名としてみられ、郷里制から郡郷制に移行した後も集落地名として存続していたと思われる。また、『出雲国風土記』にみられた餘戸里は『出雲国大税賑給歴名帳』や『和名抄』には記載がないので、天平5年から天平11年の郷里制下において餘戸里から伊秩郷に変ったと考えられている。

以上のような出雲平野の自然景観は、考古学上、古墳時代とか弥生時代と呼ばれている時代にはほぼ出来上がっていたと考えられる。古墳時代後期には、この地方最大規模の前方後円墳で全長90mの墳丘を持つ大念寺古墳（出雲市今市）が神門川と斐伊川に挟まれた位置に築かれている。中期の古墳には、神門の水海の南の丘陵に全長65mの前方後円墳である北光寺古墳（出雲市神西沖）がある。

前期の古墳には、径24mの円墳で筒形銅器を出土した山地古墳（出雲市神西沖）や、全長50mで今のところ出雲地方で最古の前方後円墳である大寺古墳（出雲市東林木）が平野北側の丘陵に築かれている。

また、斐伊川中流域の大原郡加茂町には、景初三年銘三角縁神獣鏡を出土した、29×25mの方墳である神原神社古墳がある。古志本郷遺跡ＳＤ０２出土の土師器群はこの頃の時期を中心としている。このころの住居は竪穴建物が一般的であるが、出雲市西林木町の山持川川岸遺跡では２×４間の掘立柱建物跡が、土器群を廃棄した土壙とともに調査されており、集落構造を考えるときに注目される。

【参考文献】
秋本吉郎『風土記』日本古典文学大系新装版1993以下、風土記の引用はこれによる。
川上稔『上長浜貝塚』出雲市教育委員会1996
宍道年弘『後谷Ⅴ遺跡』斐川町教育委員会1996
『斐伊川放水路発掘物語』PART５島根県教育委員会1999
『日本書紀』岩波日本古典文学大系1993
川上稔『山持川川岸遺跡』出雲市教育委員会1996

Ⅲ　蟹谷遺跡

調査に至る経緯と経過

出雲市上塩冶町の蟹谷と呼ばれる谷部が放水路開削部から生ずる残土を処理するための用地の1つ（放水路事業上はG.S.－A谷と呼称）であるため事前に調査を実施することとなった。事前の踏査で調査予定地とされていた5か所のうち谷奥部のA－5地区は、島根県教育員会が踏査した後、民間開発業者と出雲市教育委員会との調整を経てすでに産業廃棄物処理場となっていた。またA－3地区についても同様の経過ですでに同事業の排水調整池となっており、残りの3か所について調査を進めることとなった。

平成9年6月9日から着手したトレンチ調査の結果、A－2地区において土器が出土し、遺構の存在が想定されたので蟹谷遺跡として引き続き発掘調査を進めることとなった。9月11日にはほぼ調査を終え調査区の空中写真撮影を行った。その後、遺跡の層位確認のため調査区の中心部を縦断するトレンチと横断するトレンチを発掘した。谷の両側の山裾では砂岩質の岩盤面が確認できたが、谷の中央部分では岩盤面は確認できなかった。10月8日に現地調査を終了した。

位置と環境

出雲市上塩冶町の東端の入り組んだ谷あい部に南東から北西に向かって開いている谷が蟹谷であり、斐伊川からは西に山稜を2つ越えた位置になる。遺跡は、この谷の中間付近で西南から東北を向いて開いている小谷の谷間部分の緩やかな傾斜地に所在する。現況は杉の植林地であったが、以前は数段の畑地であったようである。周辺の遺跡としては、蟹谷の入口付近の丘陵に古墓を検出した上沢Ⅲ遺跡があるくらいで他には知られていない。

調査の概要

トレンチ調査の結果を受けて同年7月2日から重機による表土掘削を開始した。掘削が終了した部分から手作業により精査を進めていった。谷を縦断する土層観察用ベルト（畦）は残し、横断する土層観察についてはトレンチ調査時の土層実測図により考察をすることとして発掘を進めた。

調査区の谷奥部では炭化物や焼土も検出されたが、耕作土からのものであった。3層上面では調査区のほぼ全面にわたり15cmから100cmぐらいの不整形プランのピット状のものが多数検出されたが、掘り下げると壁面も底面も明確には確認できなかった。しかし、第3層からも土器が出土したため空中写真の撮影後、さらに第3層を精査したが、遺構は確認できなかった。層位からは、数度となく大きな地滑りか何かによる改変を受けているようであり、地山面の確認はできなかった。ピット状のものは、その後のある時期に第3層上面に形成されたものと考えられるが、人為的なものかどうかの判断は困難であった。

遺物（第6図・第7図、図版①図・②図）

出土した遺物は、第2層と第3層から出土した土師器と須恵器の破片である（図6・7）。土師器では、1～4・7～10・15・18・19・23・24・32・33・36・37・38（図版3～4）が坏で、11・12・34・35は高台付坏、22は坏蓋、27・28～30は甕、39～41・42・43・44・45・47・48は甕である。須恵器は、5・6が坏、13・14は高台付坏、25・26が甕、31が耳付きの壺である。

6・8・10・11・13・17が第3層からの出土で、他は第2層から出土したものである。

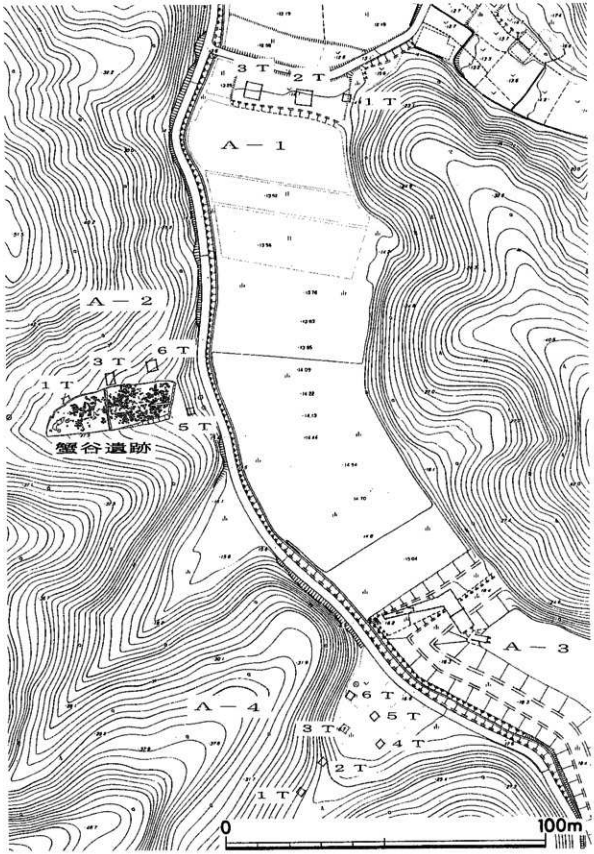


図4　蟹谷遺跡調査区位置図

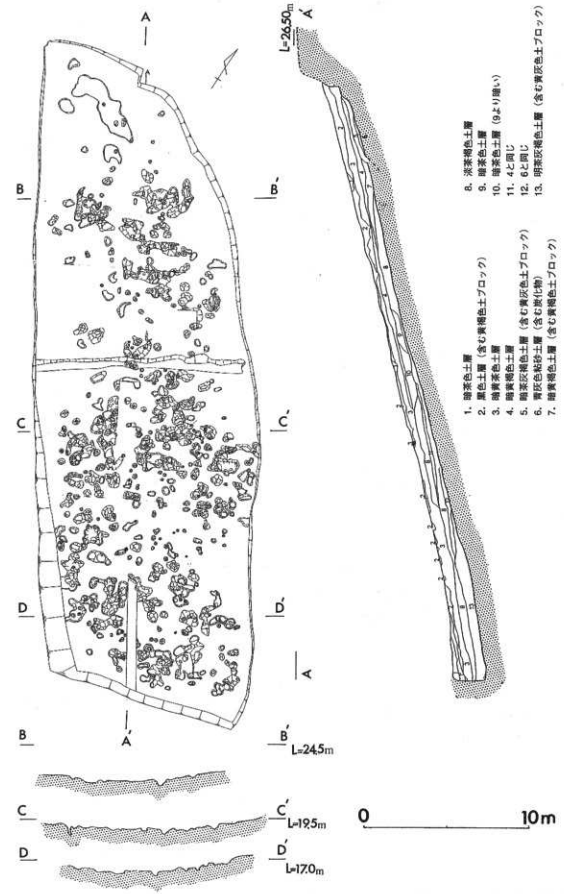

A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
L=24.50m
L=24.5m
L=19.5m
L=17.0m
0
10m
1. 暗茶色土層
2. 黒色土層（含む黄褐色土ブロック）
3. 暗黄茶色土層
4. 暗黄褐色土層
5. 暗茶灰褐色土層（含む黄褐色土ブロック）
6. 青灰色粘砂土層（含む炭化物）
7. 暗黄褐色土層（含む黄褐色土ブロック）
8. 淡茶褐色土層
9. 暗茶色土層
10. 暗茶色土層（9より暗い）
11. 4と同じ
12. 6と同じ
13. 暗茶灰褐色土層（含む黄灰色土ブロック）

図5　聖谷遺跡　遺構図

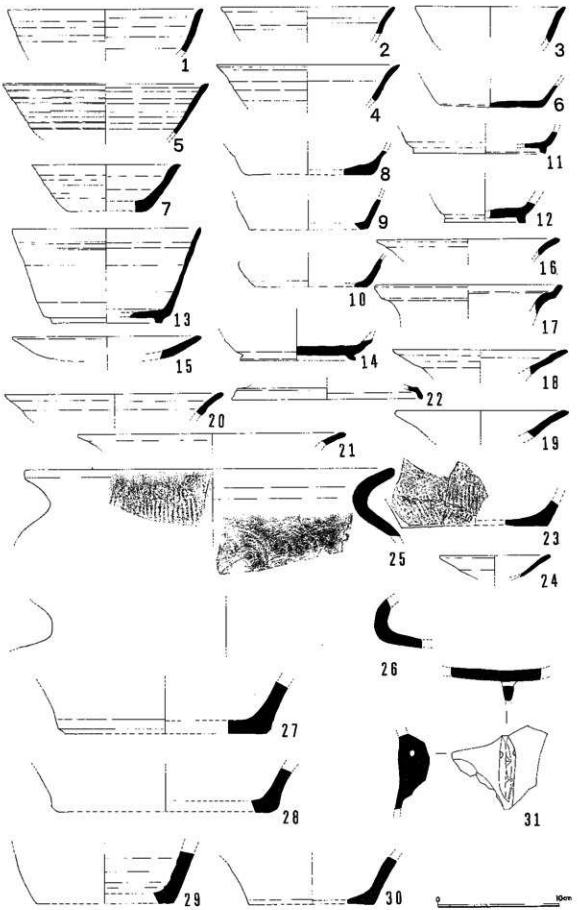


図6　蟹谷遺跡出土遺物（1）

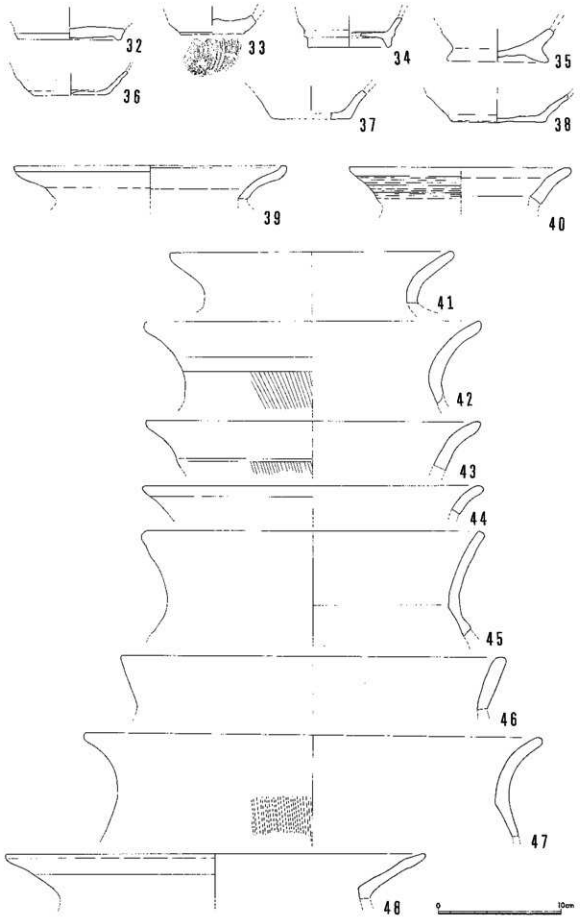


図7　蟹谷遺跡出土遺物（2）

Ⅳ．上沢Ⅲ遺跡

上沢遺跡は出雲平野に向かい北に伸びる標高約30mの低丘陵上のほぼ先端に位置する。この北側斜面から、発掘調査の結果、近世の墳墓群、奈良・平安時代の建物群、中世の穴等を検出した（図８）。

【近世墓】（図９）

〔ＳＫ０１〕1.5×0.9mの長方形の土壙で、床は南側が深さ0.5m、北側が深さ0.7mの二段掘りとなっている。北側は0.8×0.8mの床で、人骨を検出した。人骨は頭部を中央に、足部を南西に向けた状態であったが、複数体埋葬された可能性がある。土層の観察から、方形の棺桶と考えられ、南側の一段高い部分は棺を土壙に埋納するための作業場、あるいは棺外の副葬品をいれる場所であったと思われ、二つの墓壙が複合したものではないと判断した。

〔ＳＫ０３〕平面プランが、1.3×1.1m、深さ0.8mの不正形の土壙である。床が二段になっておりＳＫ０１と同様である。床が方形であるので、棺も方形であったと考えられる。西側の深いところに人骨が検出されたのでこちらが棺壙である。ＳＫ０１のように複数の埋葬の可能性がある（例えば夫婦合葬）。東側の浅い部分には古銭、白磁製の金魚形の焼物（図９－４）、鋼製品（図９－５）等の副葬品があった。

〔ＳＫ１１〕0.9×0.8mの不正円の土壙で深さは0.4mある。人骨は検出されなかったが、径5.7cm、器高0.14cmの小型の土師質土器２枚と、径0.8cmのガラス玉１個が出土した。棺は円形の桶と考えられる。

〔ＳＫ１２〕2.15×1.15mの範囲に、三つの土壙が重複している。このうち、ＳＫ１２－２はＳＫ０１やＳＫ０３と同様で床が方形プランの二段になっている掘り方である。遺物は、白磁紅猪口（図９－６）や小型碗（図９－７）の陶磁器のほか、古銭（図９－８）がある。白磁紅猪口は肥前有田産で17世紀末～18世紀前半に生産されたもので、型押成形である。紋様は楓か。小型碗は茶褐色釉の18世紀頃の関西系陶器である。在地の夫志名焼の可能性がある。古銭は五枚が重なっており文字の判読はできないが寛永通宝と思われる。古銭の五枚という枚数を重視すれば六道銭成立以前の思想の残影ともうけとれる。

【掘立柱建物跡】図10・11

〔ＳＢ０１〕幅50cmのコの字状の溝とその内側の柱状穴群。長さは13.9m、建物跡の北側が斜面のために崩壊しており床幅は４mほど残っている。柱状穴群の内いくらかは柱穴と考えられる。この建物跡の南西隅に鍛冶炉が検出された（図16）。鍛冶炉は一部が攪乱を受けているが、34×35cmの小型のもので、不正形の範囲が強く加熱され、青灰色や赤色に地山が変色している。変色は深さ10cmに達している。土を水洗したところ多量の鍛造剥片が検出された。また、鍛冶炉からは平安時代と考えられる土師器の坏の脚部が出土した（図16）。溝や建物跡からは、須恵器や土師器のほか、鞴の羽口や鍛冶滓が出土した。

〔ＳＢ０２〕構造はＳＢ０１と同様で幅50cmのコの字状の溝とその内側の柱状穴群。ＳＢ０１と比べると柱状穴は少ない。幅は13.2mで規模も近似している。遺物は少なく、鍛冶炉もない。土層からはＳＢ０１との前後関係は不明。しかし、東側の溝がＳＢ０１を覆うように接しているところから、棟を寄せあった構造となっていたかもしれない。これらのことから、ＳＢ０１は鍛冶工房、

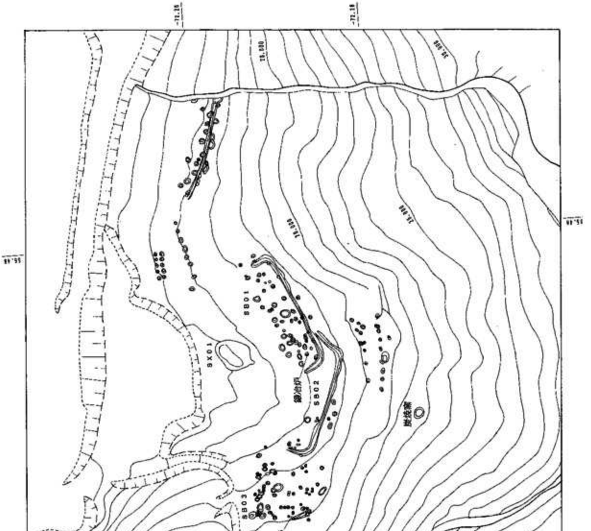


図8　上沢Ⅲ遺跡遺構配置図

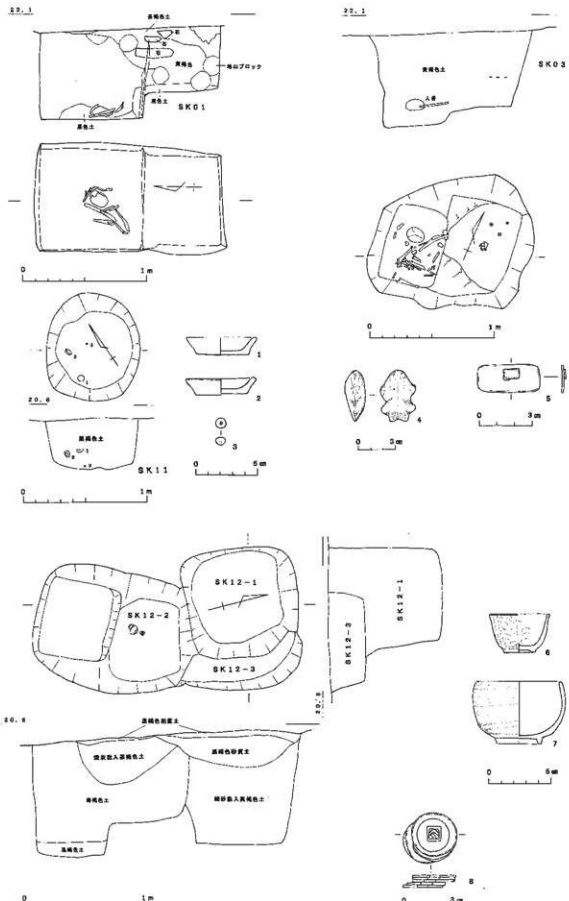


図9　近世墓及び出土遺物実測図

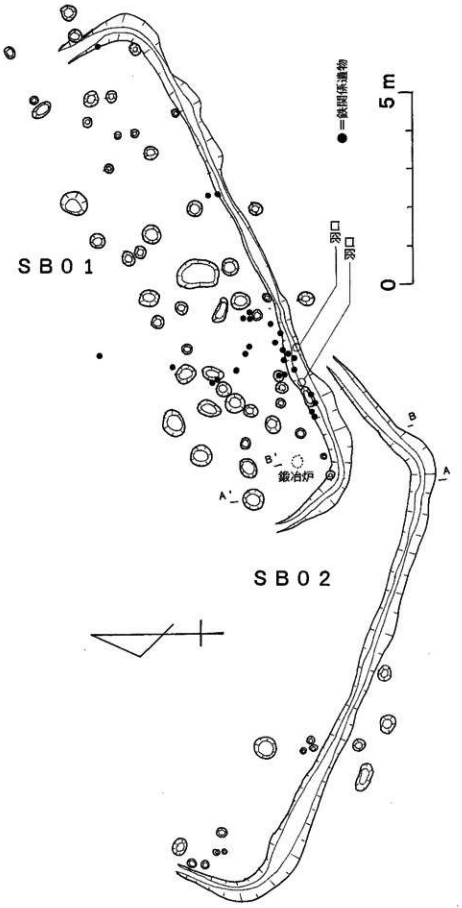


図10　図SB・01・02関係図

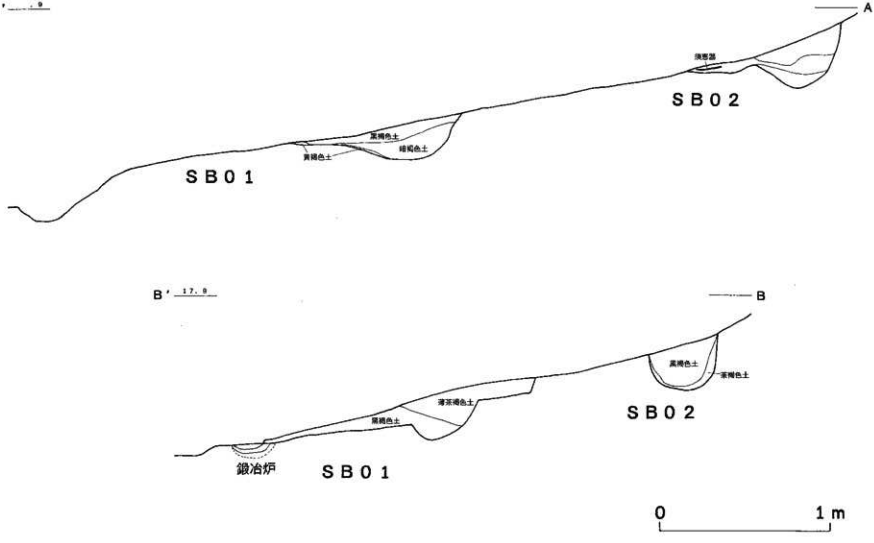
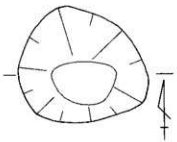


図11 SB01・02間係図 (2)

ＳＢ０２は居住建物ともみられる。

〔ＳＢ０３〕ＳＢ０２の西側の斜面に検出された柱状穴群（図８、図15）。数棟の建物跡が重複していると思われる。このうち、Ｐ５（図12）からは須恵器の蓋が出土した（図13－１）。土層の観察によると径９cmの柱痕が残るので、柱が設置される以前に埋納されたことになる。建物、もしくは柱に対する祭祀行為であろうか。



16.6

【炭焼窯】図17

掘立柱建物跡の南約10mの位置に炭焼窯を検出した。掘立柱建物跡より５m高い位置である。平面形が1.07×1.15mの円形で、炉壁は幅５～10cmで茶褐色に変色している。窯内には崩壊した炉壁が混入し、床は数cmの厚さに炭化物があった。口径14.2cmの土師器が窯内から出土した。ＳＢ０１の鍛冶工房との関係が考えられる。この炭焼窯を断ち割ったところ床下から安山岩製の石鏃が出土した。炭化物は木炭で、やや炭化が甘い。残存しているものの観察では、ミカン割り材と平割り材が混在している。ふせ焼きによる焼成と考えられる。

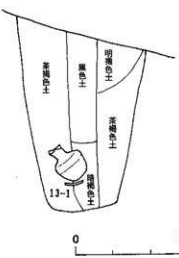


図12　SB・03内柱穴

【ＳＸ０１】図15

ＳＢ０１の北側に検出された径４×５mの不正形な落ちこみ。調査の結果、地下に水脈があるために崩落してできたと判断された。遺物は鉄滓と青磁がある。青磁は口径16.2cmで同部の内外に櫛目紋様のある中国製で12世紀末から13世紀前半にかけてのものである。掘立柱建物群の下限を示す遺物である。

【遺物】図13・14

〔須恵器〕掘立柱建物跡群やその周辺からは、須恵器、土師器が出土した。須恵器には蓋（図13－２～４）、高台付坏（５～10）、無高台坏（11～13）、甕（14～17）がある。坏はいずれも外面底部に回転糸切跡を残す。このうち、図13－４は口径13.2cmの擬宝珠状の摘みをもつ蓋で、内面がよく研磨されている。転用硯である。また、図13－12は、口径15.4cmの皿状の須恵器であるが、内面に黒漆の付着がみられる。ＳＢ０１が鍛冶工房ばかりでなく、漆工房の性格をも持ち合わせていたことが知られる。甕の内面叩痕には、青海波紋（14、15、16）と放射状（17）がある。

〔土師器〕土師器には、甕（図13－18～20）と高台付坏（図14－21～27）、無高台坏（28～40）がある。甕は口径22～29cmで古代に通常みられる煮炊き用のものである。坏は須恵器の器形に近いものと（21～30）、いわゆる土師質土器の器形にちかいもの（31～40）がある。いずれも外面底部に回転糸切跡を残す。28は口径14.6cmの朱塗土器である。

〔製塩土器〕図14－43、44は製塩土器の破片である。薄手の六連式で、奈良・平安時代の官衙・寺院や、それに関係する遺跡で通常みられるものである。

〔土錘〕図14－41、42は管状土錘である。いずれも一部を欠損しているが、径1.5cm、復元すれば長さ５cmほどになる。

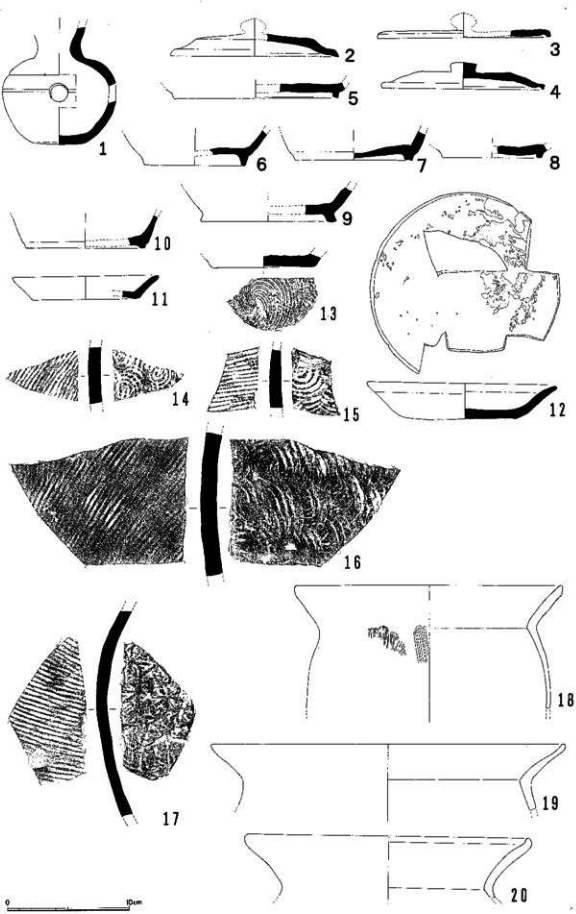


図13　上沢Ⅲ遺跡出土遺物（1）

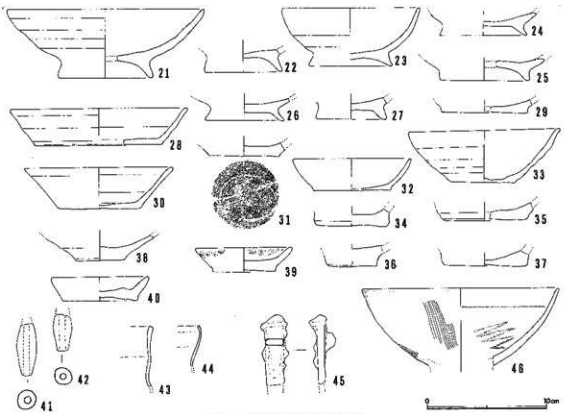


図14　上沢Ⅲ遺跡出土遺物（2）

〔鉄製品〕図14－45は釘状鉄製品である。幅1.5cm、厚さ0.5cmの扁平で頭部が曲がる。長さ５cmを残す。

〔砥石〕図20－51。砂石製の砥石の小破片である。研ぎ方向は長軸方向に一定している。３mm大の打痕が数個所についている。

【鍛冶関係遺物】図15・18～20・観察表（１）～（３）

鍛冶関係遺物には、炉壁、鍛冶滓、鍛造剥片、羽口等がある。これらの遺物は、主としてＳＢ０１に集中して出土した。ＳＸ０１からの出土はＳＢ０１から落ち込んだものと思われる。出土の分布は、ＳＢ０１に鍛冶炉が検出されたことと矛盾しない。

〔炉壁〕図19－１～５。１～３は炉壁の炉底で数度の補修が認められる。いずれも表面にはガラス質の滓が残る。ＳＢ０１からの出土である。このうち、２は銅に関係した炉壁であり、ＳＢ０１は鉄のみならず銅の工房でもあった可能性を示している。５はＳＸ０１からの出土のガラス質の炉壁溶解物である。

〔椀型鍛冶滓〕６～26、35は椀型鍛冶滓である。ＳＢ０１を鍛冶工房と性格づける遺物である。長さ10cm、厚さ５cmを超えるものはほとんどない。多くは表面に木炭痕、下面には炉床土の固着が観察される。このうち、10、23は羽口の一部が付着している。25、26は下面に工具痕がみられる。24、25は二段の椀型鍛冶滓である。１は溶解炉の溶壁炉底の先端部にあたる部分の破片である。溶壁は籾殻入りの土が使用され、二重にかさなっている。表面には黒褐色のガラス質の滓が付着している。頂部は平坦に切りそろえられており、この上に炉体部が積み重ねられていくことになる。

〔鍛冶滓〕27、34は椀型鍛冶滓に比較して鉄分の多い鍛冶滓である。そのため、いずれも錆化している。このうち34は木炭痕があり、表面はコバルト色をしている。

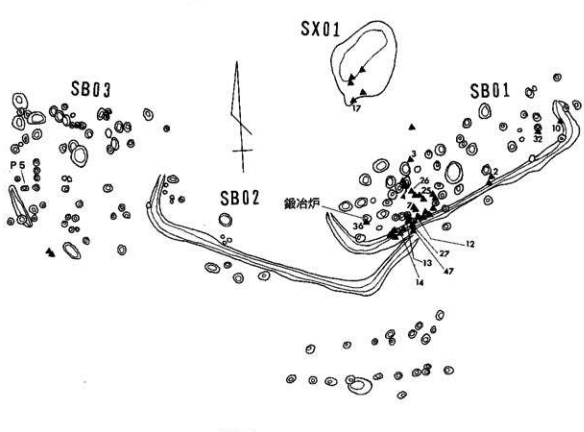


図15　鍛冶関係遺構・遺物配置図

〔羽口〕47～49はフイゴの羽口である。ＳＢ０１から３点（47、49-1、49-2）、ＳＸ０１から１点（48）が出土した。このうち、比較的残存状態が良好な資料は47である。太くしっかりした羽口で、現存する長さは先端部から12.5cm、径10.2×9.4cm、通風孔径は約２cmであり、基部側を失っている。先端部は一部ガラス化し、ひびわれて不規則に欠けたようになり、表面が薄く溶化している。顎部には小さな鍛冶滓が付着している。通風孔部は先端が細くなり、基部側が若干開く。外周部の成形は長軸方向に削り調整している。外周部には斜め方向に亀裂痕がみられる。胎土は、若干のスサを混入した砂質土と粘土を混合したものである。49-1には籾殻の混入もみられる。

〔鍛造剥片・粒状滓〕鍛冶炉（図16）の内容物を洗浄したところ、鍛造剥片や粒状滓、鉄製品の破片を検出した。

〔鉄製品〕36～40。いずれも錆化のすすんだ鉄製品。

【ＳＢ０１の性格】

ＳＢ０１は、建物内部に鍛冶炉を持ち、多量の鍛冶関係遺物を出土していること、付近に炭焼窯が存在していることなどから、鍛冶工房であった。そこでは、鉄製品の製造や修理が行われるとともに、銅製品も製造されていた。さらに、漆工房でもあり、転用硯が出土していることから多面的な性格を持っていたことが知られる。すなわち、単なる集落内の工房ではなく、例えば、神門郡家といった官衙との密接な関係を窺うことができる。

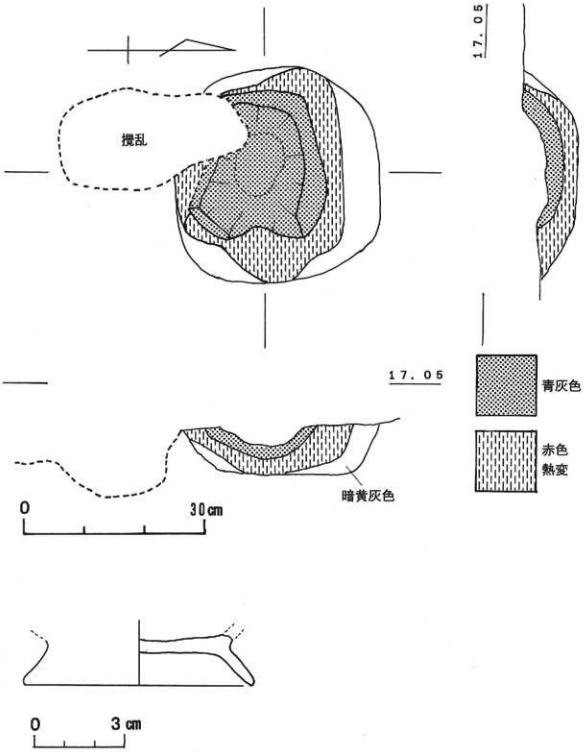


図16　SB01内鍛冶炉及び出土遺物

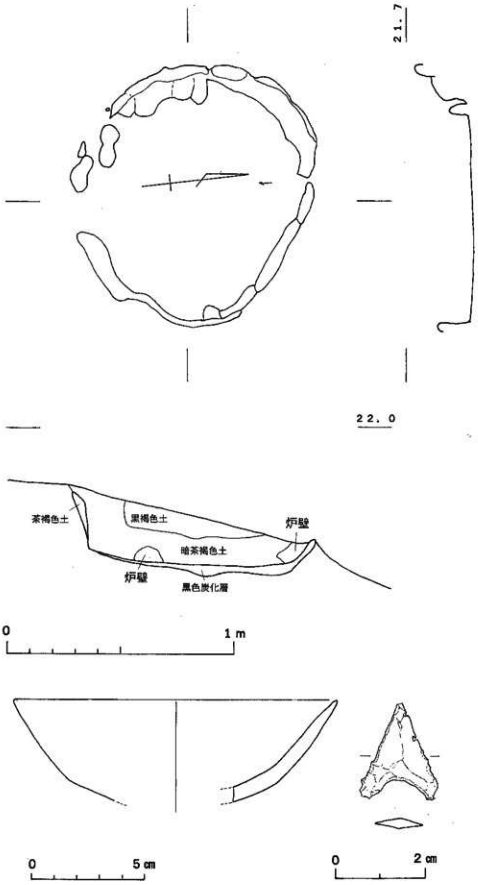


図17　炭焼窯及び出土遺物

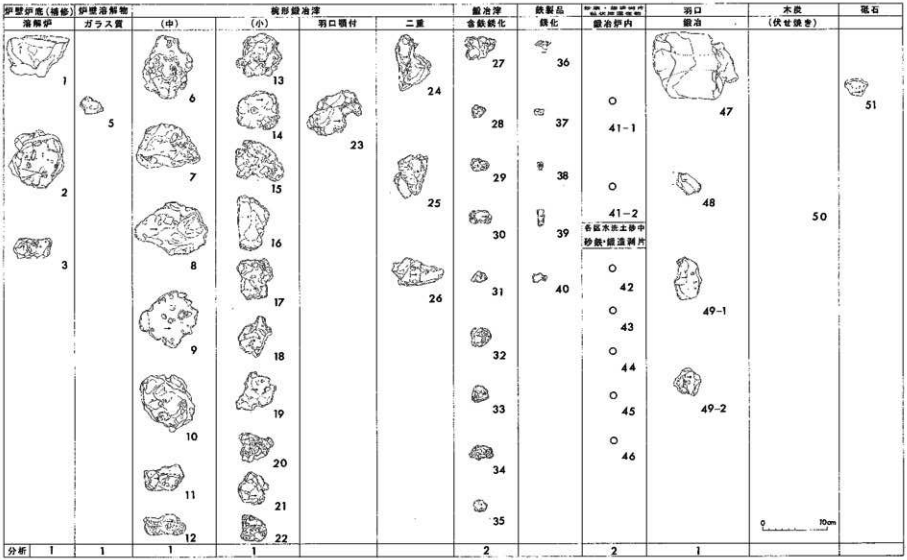


図18　上沢III遺跡鍛冶関係遺物構成図

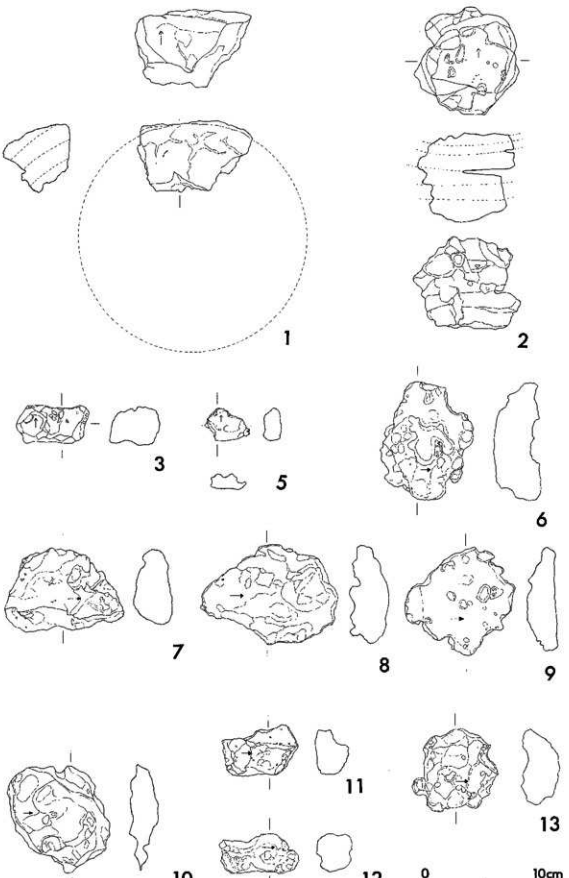


図19　鍛冶関係遺物実測図（1）

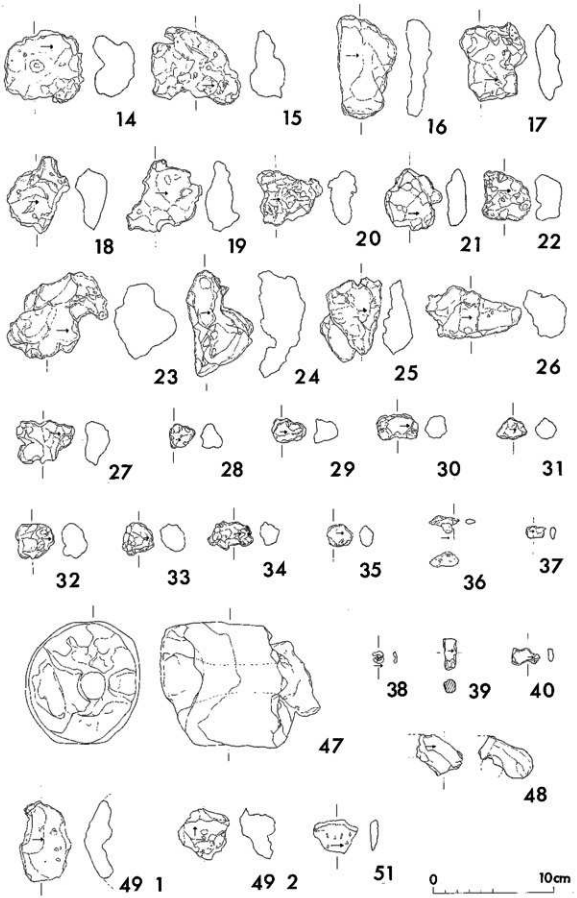


図20　鍛冶関係遺物実測図（2）

上沢Ⅲ遺跡　鍛冶関係遺物観察表（1）

報告NO.	種　別	遺構名	法量 長径(cm)	法量 短径(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重量(g)	磁着度	メタル度	備考・特記事項
1	炉壁炉底（補修）溶解炉	SB-01 NO.42	65	92	53	208.9	3	なし	溶解炉の溶単炉底の頂部にあたる破片。粉殻入りの溶壁土が二重に重なり各表面には黒褐色のガラス質滓が残る。頂部は平坦に切りそろえられ、この上に炉体部が乗ることになる。
2	炉壁炉底（補修）溶解炉	SB-01 NO.487	89	86	70	357.4	2	なし	分析NO.1
3	炉壁炉底（補修）溶解炉	SB-01 NO.547	31	57	28	68.9	2	なし	重複した炉壁炉底の破片。全体に発泡気味で滓色は黒褐色や灰色。さらに半透明のガラス質滓や淡い雲紅色が混在。
4	（欠番）								
5	炉壁溶解物（ガラス質）	SX-01 (SK-39)	27	34	12	10.5	2	なし	分析NO.2
6	碗形鍛冶滓	SB-01	73	92	36	295.1	4	なし	分析NO.3
7	碗形鍛冶滓（中）	SB-01 NO.402	97	66	32	296.4	3	なし	碗形鍛冶滓の1／2破片。やや扁平で底面には木炭痕と鍛冶炉炉床土が固着、混在。緻密。
8	碗形鍛冶滓（中）	SB-01	113	83	32	300.4	3	なし	凹凸の激しい碗形鍛冶滓の1／2ほどの破片。底面の片側は木炭痕。もう一方はきれいな碗型の鍛冶炉の炉床土の張り付いた面。
9	碗形鍛冶滓（中）	SB-01	915	89	25	220.1	3	なし	上下面で表面の質感の大きく異なる碗形鍛冶滓。ほぼ完形。上面は浅い皿形に凹み、木炭痕が散在。さらにちりめん状のしわが前面に広がる。下面は1cm大溶後の木炭痕や木炭のかみ込みが密集。
10	碗形鍛冶滓（中）	SB-01 NO.488	78	87.5	23	203.3	3	なし	肩部の一部が欠けた碗形鍛冶滓。上下面とも木炭痕が目立ち、底面はわずかに炉床土に接する。上面片側の盛り上がりは羽口の顎部のたれか。
11	碗形鍛冶滓（中）	TID東表土	62	37	27.5	98.9	3	なし	碗形鍛冶滓の中核部破片。上面は不規則。下面は皿状で前面に鍛冶炉の炉床面が固着。滓は結晶が発達。
12	碗形鍛冶滓（中）	SB-01 NO.544	64	32	29	78.1	2	なし	碗形鍛冶滓の中核部から肩部破片。上面から側面は不規則な木炭痕。下面にも薄く木炭痕、側部に錆ぶくれ。
13	碗形鍛冶滓（小）	SB-01 NO.545	66	64	31	149.6	3	なし	完形の碗形鍛冶滓。上面中央にこぶ状の滓。下面は9割以上が粉炭痕。ごく一部に鍛冶炉の炉床が残る。
14	碗形鍛冶滓	SB-01 NO.416	67	59	32	158.0	4	なし	13にやや似た資料。ほぼ完形の碗形鍛冶滓。上面は木炭痕が散在し、下面は全体が木炭痕。横断面は独楽状。上面肩部にコバルト色のガラス質滓。
15	碗形鍛冶滓（小）	SB-01	72	55	28	123.6	2	なし	小型の碗形鍛冶滓の半欠品。上下面とも木炭痕が残り、下面の一部に鍛冶炉の一部固着。
16	碗形鍛冶滓（小）	SB-01 NO.417	48	84	19	111.1	3	なし	二面に割れているが接合。小型扁平な碗形鍛冶滓の中核部から肩部の破片。上面は皿状。下面は炉床土の圧痕。
17	碗形鍛冶滓（小）	SX-01 (SK-39) NO.401	55	63	19	82.5	4	なし	やや形状の不安定な碗形鍛冶滓。肩部の二箇所が破面。上面には大きなすき間が点在。下面は不規則な凹凸を持ち全面木炭痕。
18	碗形鍛冶滓（小）	SB-01	49	63	26	67.7	3	なし	碗形鍛冶滓の中核部よりの破片。上面は全体に皿状。下面は木炭痕主体。一部突出するのは工具痕か。
19	碗形鍛冶滓（小）	SB-01	55	59	26	81.1	3	なし	錆ぶくれや放射割れが残る碗形鍛冶滓。表面全体が黄褐色の酸化物に被われている。
20	碗形鍛冶滓（小）	SB-01	50	45	23	53.3	2	なし	不完全な形の碗形鍛冶滓。滓は結晶がキラキラ光る。上下逆の可能性もあり。

上沢Ⅲ遺跡　鍛冶関係遺物観察表（2）

報告NO.	種別	遺構名	法量 長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	磁着度	メタル度	備考・特記事項
21	椀形鍛冶滓（小）	TID東表土	47	45	16	46.5	5	なし	分析NO.4
22	椀形鍛冶滓（小）	SX-01（SK-39）	39	40	21	62.9	5	なし	緻密な光沢のある偏平な椀形鍛冶滓の胴部よりの破片。上下面で質感が異なるのは横成NO.9と同様。滓質も似ている。片面はもりめん状。上下面の可能性もあり。
23	椀形鍛冶滓（羽口アゴ付）	SB-01	69	61	48	140.4	2	なし	羽口先端、脇部を残す。鼻形の椀形鍛冶滓。羽口は粘土質でスサ入り。滓の一部はきれいなこいブルー。鍛冶滓側は若干も木炭痕の凹凸が激しく不定形である。
24	椀形鍛冶滓（二段）	SX-01（SK-39）	50	86	39	126.6	2	なし	変わった形の椀形鍛冶滓の中核部から側都破片。下面に大きな凹み。側面片側立ち上がり状。下面全体が粉炭痕。
25	椀形鍛冶滓（二段）	SB-01 NO.412	46	66	25	84.8	3	なし	二段気味の不完全な形状の椀形鍛冶滓。下面に二条の工具痕流入滓。上半の滓は緻密混在。
26	椀形鍛冶滓	SB-01 NO.403	79	44	34	113.4	3	なし	下面に工具痕に流入した滓を持つ椀形鍛冶滓の下面の破片。工具痕はやや偏平な楕状。
27	鍛冶滓（含鉄錆化）	SB-01 NO.435	48	34	19	33.4	6	△	分析NO.5
28	鍛冶滓（含鉄錆化）	SX-01（SK-39）	21.5	20.5	17	8.7	6	△	小さな含鉄の鍛冶滓片。側部片側に錆ぶくれ。
29	鍛冶滓（含鉄錆化）	SX-01（SK-39）	28.5	20	18	12.4	5	△	不定形な含鉄の鍛冶滓。木炭痕がやや激しく下面に酸化土砂。
30	鍛冶滓（含鉄錆化）	SX-01（SK-39）	34	20	17	20.0	6	△	分析NO.6
31	鍛冶滓（含鉄錆化）	SB-01	24	17.5	17.5	8.0	5	△	ほぼ方形の含鉄の鍛冶滓。 鳥椀形滓の胴都破片に似る。
32	鍛冶滓（含鉄錆化）	SB-01 P.149	32	29	20	16.0	4	△	木炭痕の目立つ凹凸の激しい含鉄の滓。側部片側に酸化土砂。
33	鍛冶滓（含鉄錆化）	SB-01	26	27	19.5	14.7	5	△	薄く酸化土砂に被われた含鉄の鍛冶滓片。 一部に錆ぶくれ。
34	鍛冶滓（含鉄錆化）	SX-01（SK-39）	38	22	15	10.7	2	△	不整な形状をした滓片。各面とも木炭痕が目立つ。右側都木炭痕の表面には明るいコバルト色の羽状な滓。
35	椀形鍛冶滓（小）	SB-01	21	18	11.5	0.7	3	△	酸化土砂が激しく、場合によれば鉄器の錆化物か。
36	鉄製品（錆化）	SB-01 鍛冶炉	19	14	10.5	11.9	4	△	扁平棒状の鉄器片。性格不明。
37	鉄製品（錆化）	SB-01	15	9.5	415	6.0	3	△	ごく薄い表面に木炭痕の残る遺物。黒錆化木炭の可能性もあり。
38	鉄製品（錆化）	SX-01（SK-39）	9.5	10	2.5	0.5	2	△	鉄釘の脚部破片。錆化が激しい。
39	鉄製品（錆化）		10.5	25.5	11	4.7	6	△	横断面方形気味の釘又は工具片。片側はやや狭まる。
40	鉄製品（錆化）		23	14	5	2.6	3	△	扁平の鉄片。放射割れが激しく錆鉄片の可能性もあり。

上沢III遺跡　鍛冶関係遺物観察表（3）

報告NO.	種別	遺構名	法量 長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	磁着度	メタル度	備考・特記事項
41	鍛冶滓 鍛造剥片 粒状滓	SB-01 鍛冶炉				29.3	-	-	分析NO.7　分析NO.8　鍛冶炉の内容物を洗ったもので鍛造剥片や粒状滓の他に極々な大きさの滓片を含む。二袋に分け取り上げられており、重量は同者合わせたものである。
42	砂鉄 鍛造剥片	SB-01 TII-E				1.9	-	-	鍛造剥片は黒褐色で中味が海手主体。数多い。
43	砂鉄 鍛造剥片	SB-01 TI-E				1.7	-	-	わずかに鍛造剥片を含む。
44	砂鉄 鍛造剥片	SB-01 TI-E				1.6	-	-	わずかに鍛造剥片を含む。微細な砂鉄主体。
45	砂鉄 鍛造剥片	SB-01 TI-E				1.8	-	-	ほとんどが微細な砂鉄粒子。
46	砂鉄 鍛造剥片	SB-01 TI-E				1.6	-	-	ほとんどが微細な砂鉄粒子。
47	羽口	SB-01	125	102	94	834.0	3	-	太いしっかりした羽口。体部は残るが基部側端部は欠。先端部はヒビ割れから小規則に欠けたようになり、その表面が著く溶化。鞴部に小さな鍛冶滓が生成。通風孔部は、先端側が細く基部側がやや開く。外周部の形成は長軸方向への割り。外周部の亀裂状はきれいな斜め方向。胎土はわずかにスサを混ぜた砂質土と粘質土の混合。
48	羽口	SX-01 (SK-39)	45	43	22	39.8	2	なし	分析NO.9
49-1	羽口	SB-01	42	66	20	32.5	2	なし	羽口先端部の表面破片。通風孔部は欠落。表面はモザイク状に溶化し、分析資料NO.9と似る。胎土は粉炭とスサを混じえた粘質土と砂質土の混合。乳白色の気泡が目立つ。
49-2	羽口	SB-01 NO.408	41	39	35	33.0	3	なし	スサを混じえたやや砂質の胎土。羽口先端部の小破片。一部コバルト色にガラス化。
50	木炭	炭焼窯				332.1	1	なし	炭化のやや甘い小炭。3～4cm以下の小片となっている。表面の一部が強失気味のものが目立つ。木取りがミカン割りと平割りの混在。材は開孔材と散孔材の雨著あり。ふせ焼きによる焼成か。
51	砥石	SB-01	36.5	27.5	6	4.5	1	なし	砂岩製の砥心の表面破片。砥方向は長軸方向に一定。砥面は屑部にやや傾斜。3mm大の打痕が数か所に点在。

V．古志本郷遺跡Ⅰ区

古志本郷遺跡Ⅰ区は、県道多伎江南出雲線南側（通称：旧国道）を調査対象としている。検出した遺構は、古墳時代前期から近世・近代の、溝、土壙、井戸、柵列、墓地、奈良・掘立柱建物跡等である。

【溝状遺構】図21

〔ＳＤ０１〕調査区の西側に検出された幅約50cm、深さ10cmの南北方向にはしる浅い溝で、これに並行して約１ｍ間隔で径３～５cmの杭列があった。遺物は出土しなかったが近世の溝と考えられる。

〔ＳＤ０２〕調査区の西側に、南東から北西にかけて弧を描きながらはしる、幅約３m、検出面からの深さ50cmの溝状遺構。弥生時代後期から古墳時代前期の土器が多量に出土した。

遺物はすべて土器で（図24～36）、そのほとんどは古墳時代前期のものである。器形は、甕型、壷型、器台、高坏、坩、ミニチュア土器等がある。なお、甕型土器のほとんどと、壷型土器の一部は大きさにかかわらず胴部外面に煤の付着が認められる。

図32－82は弥生時代後期の甕型土器の口縁部で、数個体出土しているのみで少量である。ＳＤ０２の上限を示すものか、あるいはＳＤ０２以前の遺構の存在を示唆するものである。

１～74は、複合口縁部をもつ甕型土器の一部を図示した。多くは胴部の中ほどより上方に最大径があり、やや胴長で、底部はわずかに平底のなごりを残す。外面はいわゆるハケ調整を施すが、頸部から胴部の最大径のある部分にかけては横方向、それより下方はタテ、あるいはナナメ方向を原則としているようだ。胴部の最大径部分より少し上方には、ハケやヘラによる波状紋（４、９、12、47、49、55、55）、沈線（58）、簡略化した綾杉紋等をつけるもの（５）もある。内面は頸部より下方をヨコ、あるいはナナメ方向に削りを施して器壁を薄く仕上げている。ほとんどがヘラ削りのままであるが、稀に下方を外面と同様にハケ調整をしているものもある（５）。全容が復元できるもののうち、５が最大で、器高45.8cmで、頸部より下方での容量は24.6ℓある。１～４は５より一回り大型の甕で、復元すれば30ℓほどの容量になると思われる。43と46はそれぞれ器高が26.3cmと26.0cmあり、通常見られるサイズで、最も固体数が多い。容量は5.5ℓと5.1ℓある。

図32－76～81は、複合口縁部をもたず、口縁部が単純にくの字状に屈折する甕型土器である。このうち、76は外面が黒色で、細かな格子目状の叩き跡の上から横方向に沈線を施した鞆半島製の瓦質土器で、復元した口径は19cm、胴部の最大径30.9cm、器高27.9cmとなる。内面は丁寧にナデ調整され、部分的に指頭圧痕が残る。この資料については Ⅶ章で考察している。78・80・81は、口唇部に特徴がみられ、特に78は内傾に巻き込むかたちとなっている。77・79は単純な口縁部である。

図33－83～85、図34－93～97は複合口縁部をもつ壷型土器である。胴部のハケ目状調整、内面のケズリは甕型土器に同じである。頸部には綾杉紋様を入れるのを原則としているようであるが、95のように無紋様のものもある。83～95は口径が23cm前後で互いに近い法量を示す。96は小型の壷で、紋様は一周しない。退化した紋様とみるより、容器の前後関係を表したものかもしれない。図33－86～91は直口壷である。口径は10cm前後で器形にバラツキはない。92は短頸壷で、綾杉紋様をもち赤色顔料を塗布する。98は脚付の壷、99は丸底壷である。100～103は小型丸底壷、あるいは坩の系譜を引くものとして分類した。104は壷型土器のミニチュアだろう。

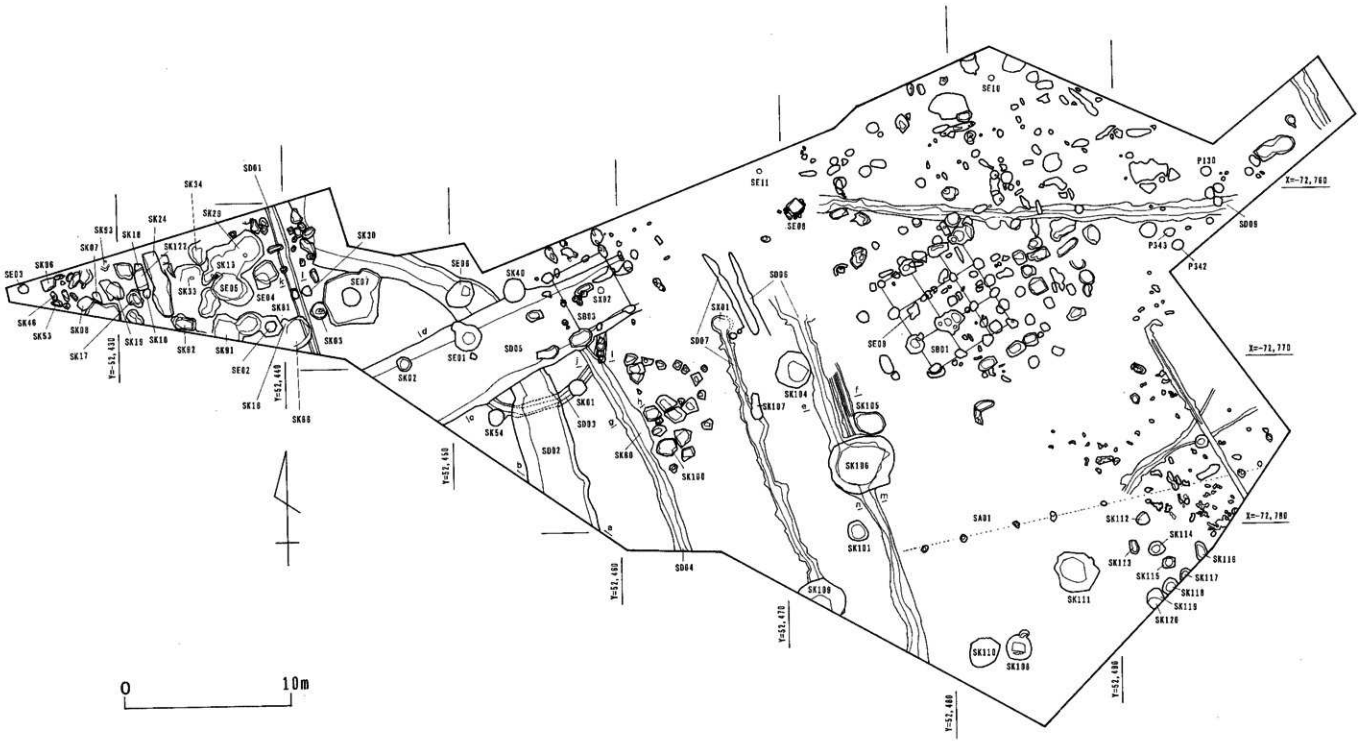

SE03
SK06
SK07
SK53
SK46
SK08
SK17
SK19
SK18
SK24
SK93
SK122
SK33
SK13
SE05
SK34
SK29
SD01
SE04
SK01
SK02
SK91
SE02
SK16
SK66
SK03
SK30
SE07
SE06
SK40
SE01
SK02
SD05
SK02
SD03
SK01
SK54
SD02
SK60
SK100
SD04
SK01
SD07
SD06
SK104
SK107
SK105
SK106
SK101
SK109
SK110
SK108
SK111
SK112
SK113
SK114
SK115
SK116
SK117
SK118
SK119
SK120
SA01
SE08
SE09
SD01
SE10
SE11
P130
P343
P342
SD09
X=-72,760
X=-72,770
X=-72,780
Y=-52,430
Y=52,440
Y=52,450
Y=52,460
Y=52,470
Y=52,480
0
10m

図21　I区遺構配置図

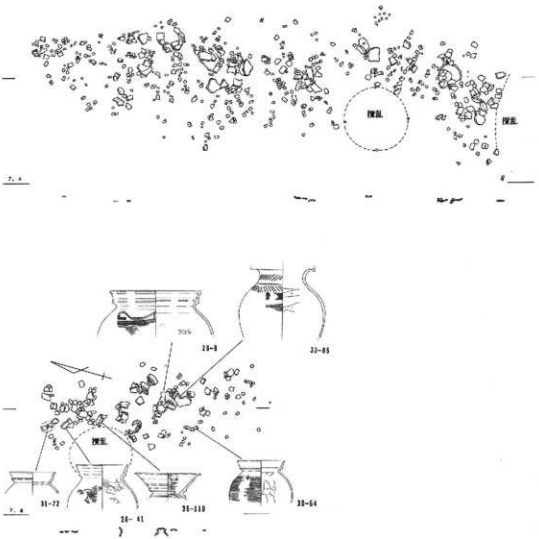


図22　SD・02遺物出土状態

図35は鼓型器台である。全体のわかる35－106は、口径22cm、底径18.4cm、器高12.2cmで、他の資料もこれと大きく異なることはない。このうち、118には脚部に焼成前に穿孔された小孔がある。

図36は脚部を持つ坏である。脚部の形状には三類ある。a類は123、125、138～141の低脚坏で、125を例にとれば口径16.1cm、器高4.9cm、脚部径5.3cmの不安定な形状。b類は130～134でa類とは逆で、坏部の径に比較して脚部径が二倍近い安定した形状のもの。脚部に小円孔がある。c類は120～122、135～137で、a類とb類の中間形態とでもいうべきもの。b類のように脚部に小円孔がある。

〔ＳＤ０３〕調査区のほぼ中央に、幅約50cm、深さ30cmの弧を描く溝状遺構。ＳＤ０２、ＳＤ０４、ＳＤ０５に切られている。古墳時代前期の土器の小破片が出土した。元来、竪穴建物に伴う溝であった可能性がある。

〔ＳＤ０４〕ＳＤ０２の東側に、ほぼ並行してはしる、幅１m、深さ30cmの溝状遺構。古墳時代前期の土器の小破片が出土した。

〔ＳＤ０５〕調査区の西側に南西から北東方向にはしる、幅５m、深さ50cmの溝状遺構。遺物がほとんどなく年代を決めがたいが、古墳時代前期のＳＤ０２、ＳＤ０３、ＳＤ０４を切っていること、

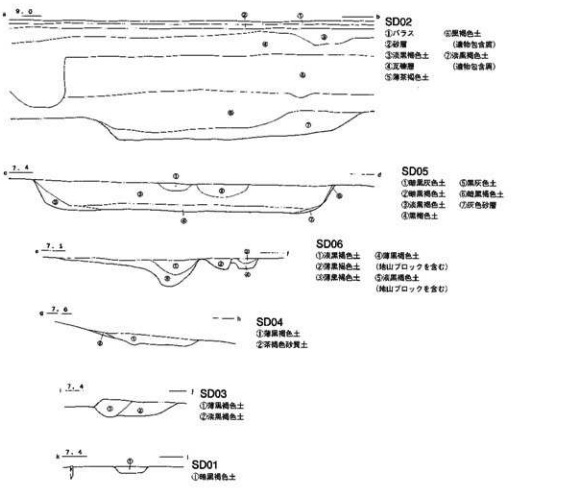


図23　Ⅰ区セクション図

中世や近世の遺構に切られていること、また、奈良・平安時代の掘立柱建物跡と方向が一致していること等から、古代の溝状遺構と考えられる。

〔ＳＤ０６・ＳＤ０７〕調査区のほぼ中央に北北西方向に二条並んではしる幅80㎝、深さ50㎝の溝状遺構。遺物が出土しなく時期を決めがたいが、中世の土壙であるＳＫ106・ＳＫ109に切られているので、中世かそれをさかのぼるであろう。両溝の間隔は６ｍある。道路遺構かもしれない。

【柵列】図21

〔ＳＡ０１〕平成10年度と11年度調査区の図面をつなぎあわせたところ、調査区の南側にほぼ東西方向に柵列状遺構があることがわかった。径20㎝、深さ20㎝の浅い孔が不規則な間隔で一列に並ぶ。この柵列状遺構の南側に近世の墓地があるのでそれを区画する柵列かもしれない。

【土壙】

土壙には、古墳時代、中世、近世の各時代のものがある。中世の土壙には墓と性格の不明なものがあり、近世の土壙には墓と焼失住居の整理用のものがある。近世墓は桶状の棺を使用しており、大型と小型の一群がある。

〔古墳時代の土壙〕ＳＫ88（図38）、120（図44）は、近世の土壙に切られていることと、出土した

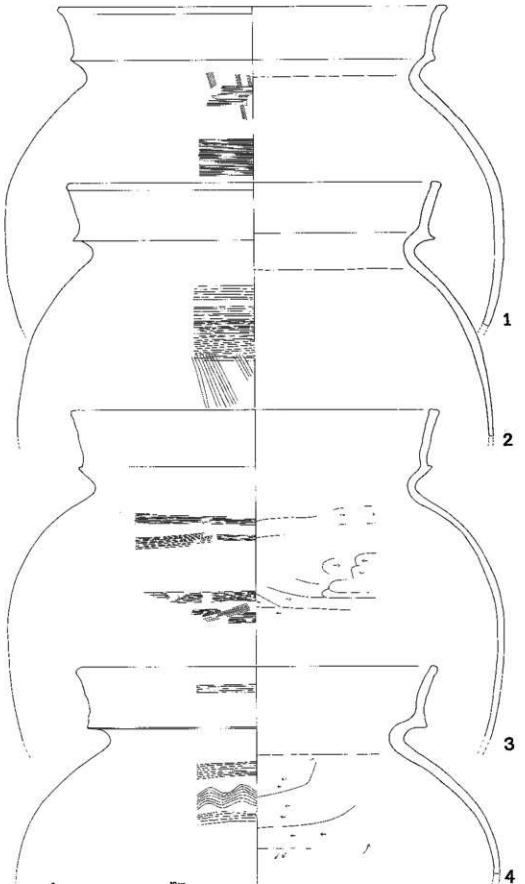


図24　SD・02出土遺物（1）

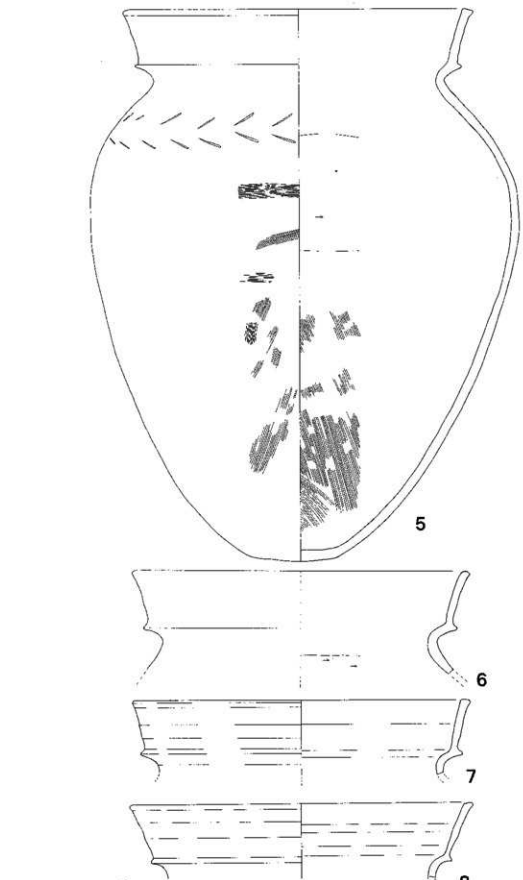


図25　SD・02出土遺物（2）

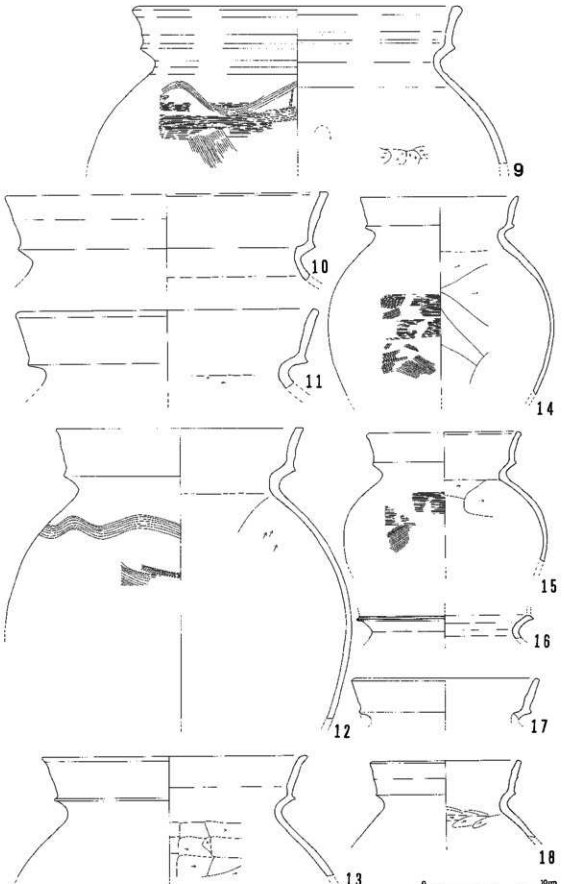


図26　SD・02出土遺物（3）

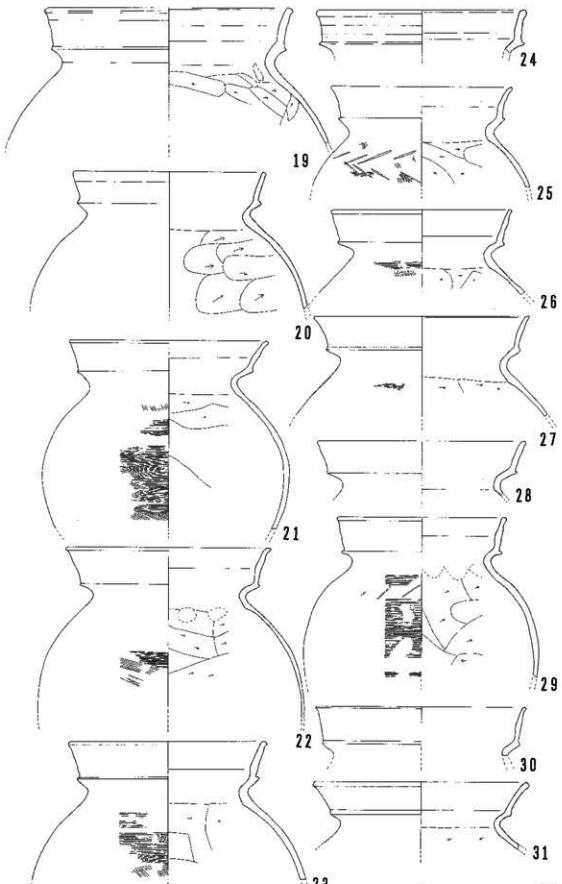


図27　SD・02出土遺物（4）

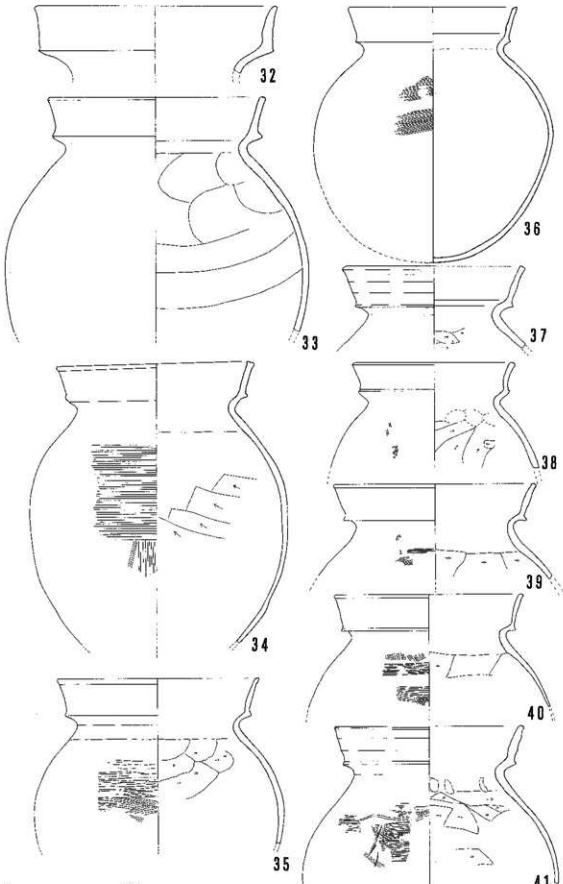


図28　SD・02出土遺物（5）

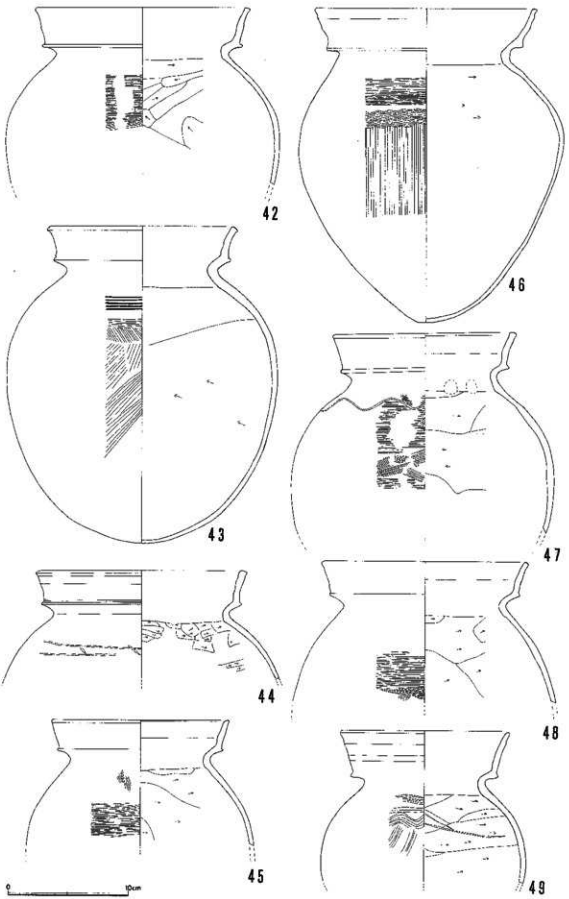


図29　SD・02出土遺物（6）

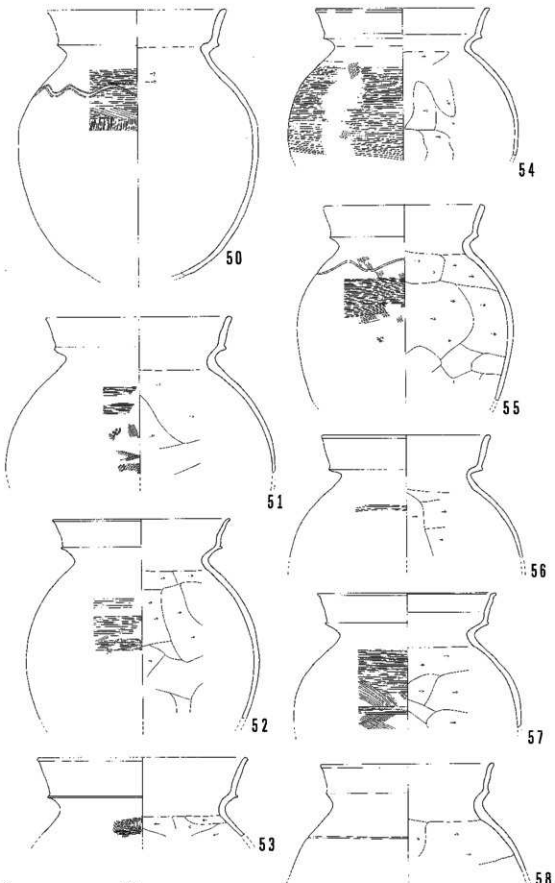


図30　SD・02出土遺物（7）

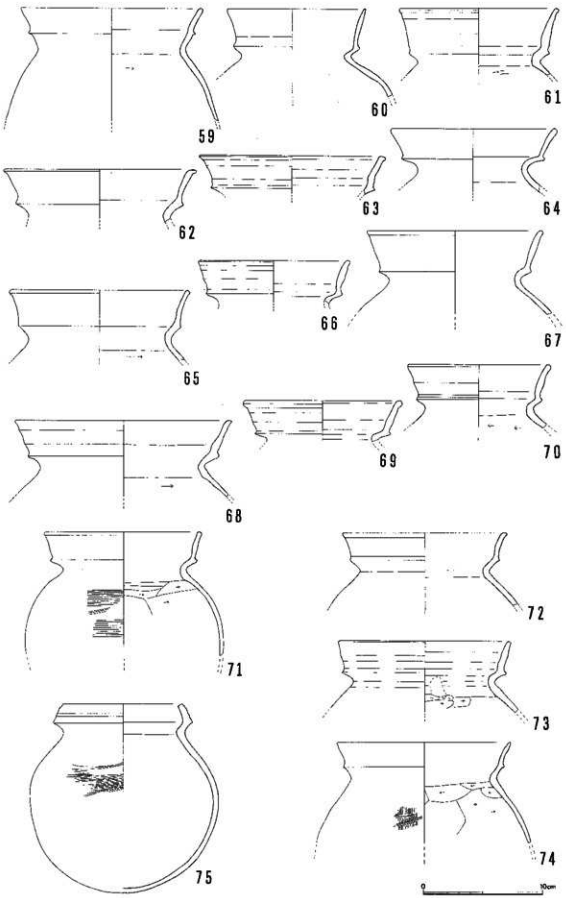


図31　SD・02出土遺物（8）

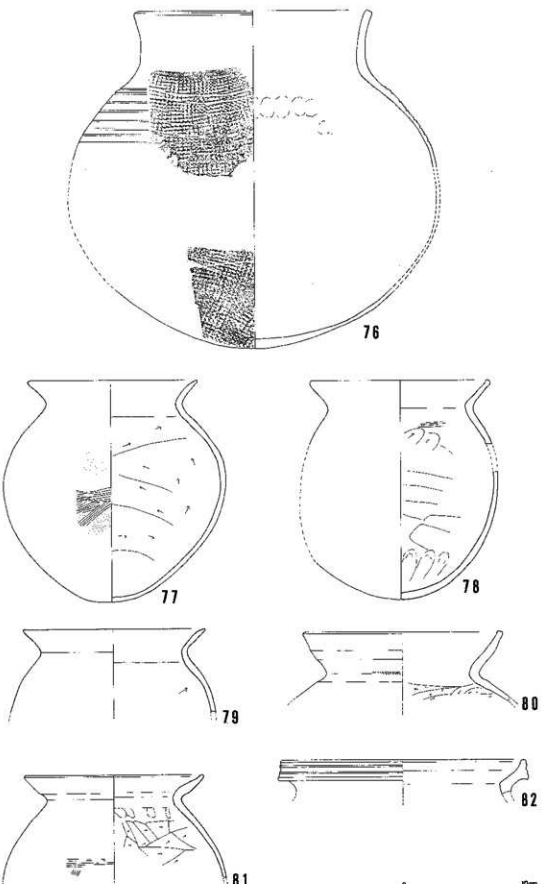


図32　SD・02出土遺物（9）

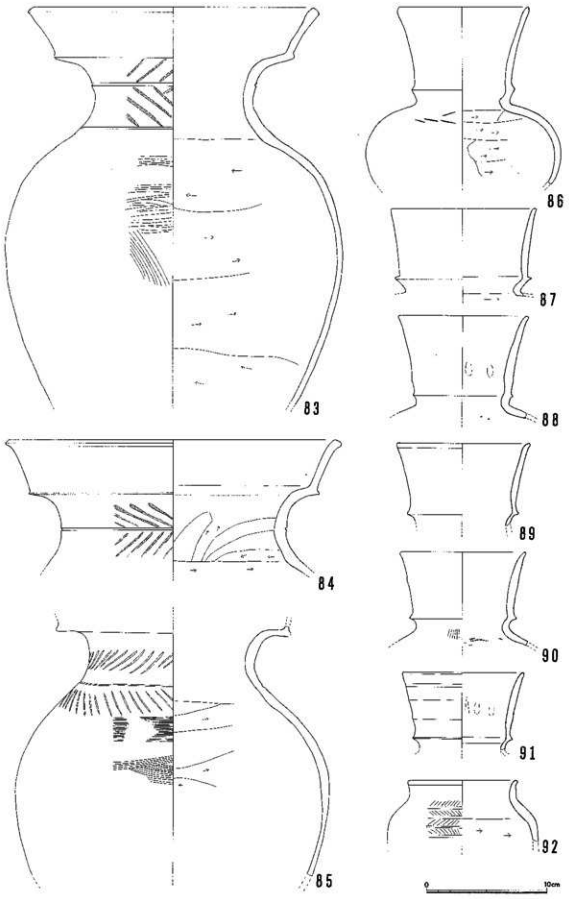


図33　SD・02出土遺物（10）

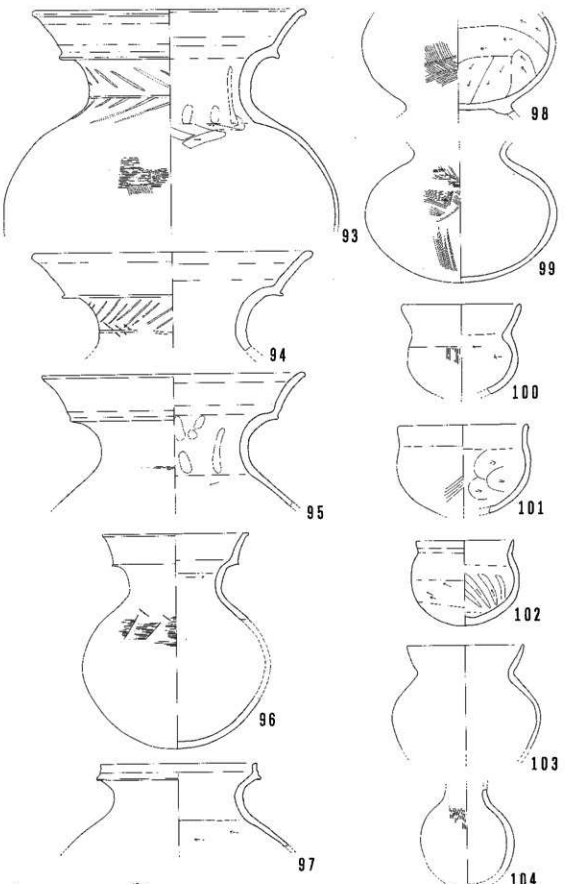


図34　SD・02出土遺物（11）

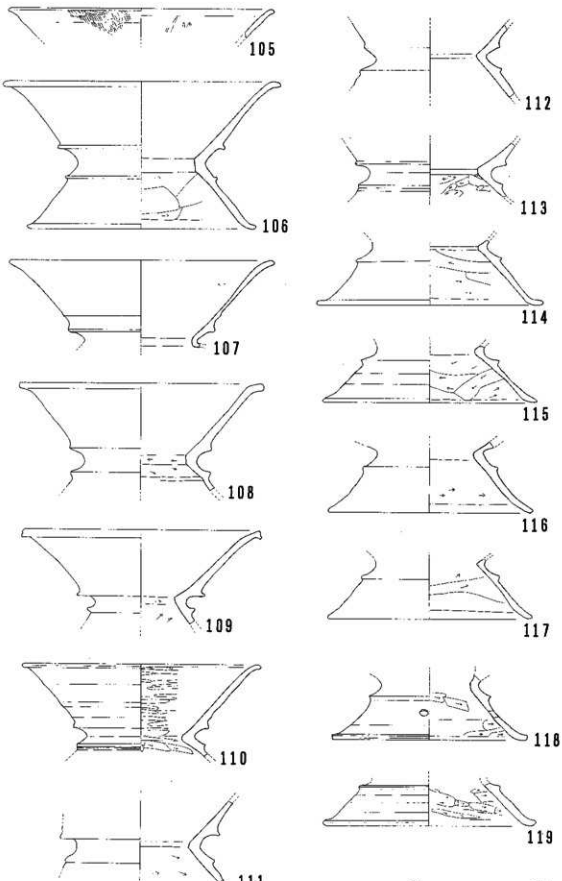


図35　SD・02出土遺物（12）

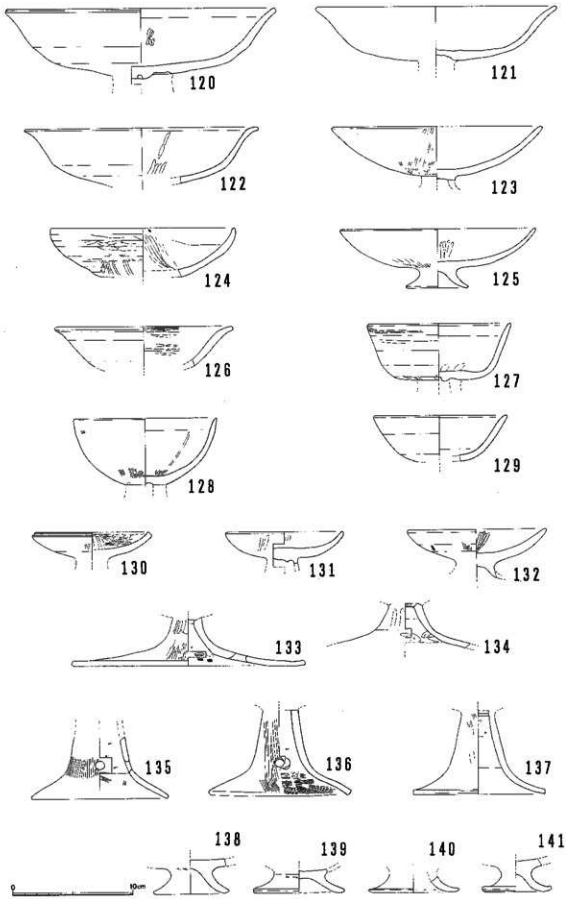


図36　SD・02出土遺物（13）

土器から古墳時代のものと考えた。また、ＳＫ100（図38）は径１m、深さ10cmの浅い土壙であるが弥生土器が一点出土している（図44－144）。土層は中世のものに似る。ＳＫ88からは古墳時代前期の土師器の小破片数片と石錘が出土した。石錘は20.2×9.5×４cmの自然石で、中央の両端・両面を打ち欠いている。1.5kgある大型のもので舟の碇と考えられる。Ⅶ章で考察した。

〔中世の土壙〕ＳＫ101（図37）、02、54（図38）、30、60、102、105、191（図44）、91（図43）は中世の土壙と判断した。平面が円形のもの（02、30、54、101）と不正形のもの（91、105、191）、長楕円形のもの（30）がある。このうち、02からは外面に格子状の叩き痕のある瓦質土器片が出土した（図38－145）。13～14世紀頃の甕であろう。遺物が出土した土壙のうち、30、60、102、105は完形の土師質土器を出土しており墓と考えられる。土師質土器はいずれも坏で、102出土の図44－191、91出土の図43－176は器高が高く、体部があまりひらかない碗型で、比較的古い様相をみせている。これに対し、60出土の図44－188、189、105の図44－190、30の図44－192は、器高が低く、体部が開くという特徴があり、中世の中では後出的な器形であろう。従って、中世の墓には前半期と後半期の二時期のものがあることになる。ＳＫ101（図37）は調査区のほぼ中央に検出された径４m、深さ40cmの浅い土壙である。この土壙の上面には拳大の自然石が南北方向に雑然と置かれており、その中と周辺から遺物が出土した。図47－211、212、213は古墳時代の土師器の高坏の脚部で、石を置いたときに周辺から混入したものと思われる。214～219は中世の陶磁器でこの土壙の時期を示すものである。214は備前系の擂鉢、216は美濃瀬戸系のおろし皿、217、218、219は中国製青磁である。また、この土壙の付近に石塔の一部があった（図47－210）。

〔近世の土壙〕以上の、古墳時代の土壙、中世の土壙以外はすべて近世以降の土壙である（図37～49）。これらの多くは調査区の北側、特に北西部に集中している。ほとんどは不正形で、大きさも様々あり、互いに複合しあっている。土壙の中の覆土は自然堆積ではなく、細かな焼土が混入しているので、火災住居を後始末した土壙群と考えられる。このことは、土壙の覆土を取り除くと柱が残っている例（図37－46、40、図38－19、93、13、29、図43－33、）もあることからも推定される。土壙の遺物には、近世陶磁器（91東図43－179、24図43－181）の他、下駄（07図42－171、122図42－172、173）や箸（07図42－170、122図42－174、175）、あるいは櫛（06図37－142）といった木製品がある。ＳＫ33図43－180の土師器は、古墳時代のものの混入である。ＳＫ117、118、119（図44）、112、113、114、115、116、Ｐ130、342、343、ＳＸ01、02は墓である。いずれも径１m前後の円形の墓坑で、ＳＸ119、112、ＳＸ01、02には木製の桶状棺が残っていた。桶状棺は底径より上径が大きいいわゆる桶状をしていて、竹の箍で締め、底板と上蓋がある。これら以外のものにも土層の観察から同様な棺があったと推定される。桶状棺はＳＸ01を除くと、底径が33～45cm、上径42～60cm、高さ30～50cmの小型のもので、子供か、あるいは火葬骨を埋葬したものと思われる。遺物は古銭とカワラケ、陶器があるが、古銭のみのもの（112、117）、カワラケや陶器のもの（ＳＸ113～116、119、Ｐ130、342、343）、それらの両方を副葬するもの（ＳＫ118）、遺物のないもの（ＳＸ02）がある。このうち、ＳＫ112は14枚もの古銭を出土した。うち１枚は渡来古銭（判読不明）、他は寛永通宝である。また、Ｐ343は肥前唐津の陶器とカワラケを出土した。唐津焼きは内面底部に四か所の砂目がのこる皿で、17世紀前半の時期のものである。共伴したカワラケは、他の墓から出土したそれらと、サイズや器形はあまり変わらないので、これらの墓のほとんどがおよそ17世紀前半のものであることを推定させる。ＳＸ01は大きな棺桶なので大人の墓と思われる。

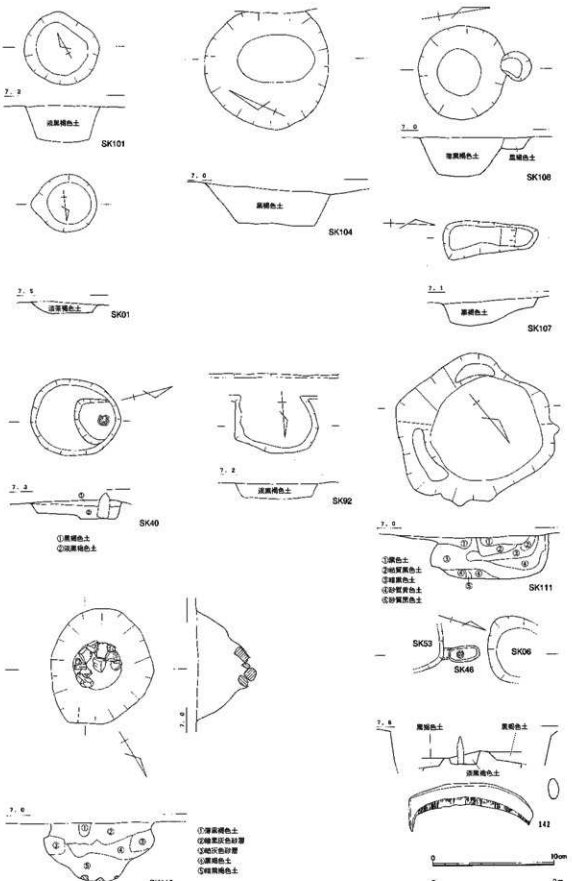


図37　1区遺構・遺物実測図（1）

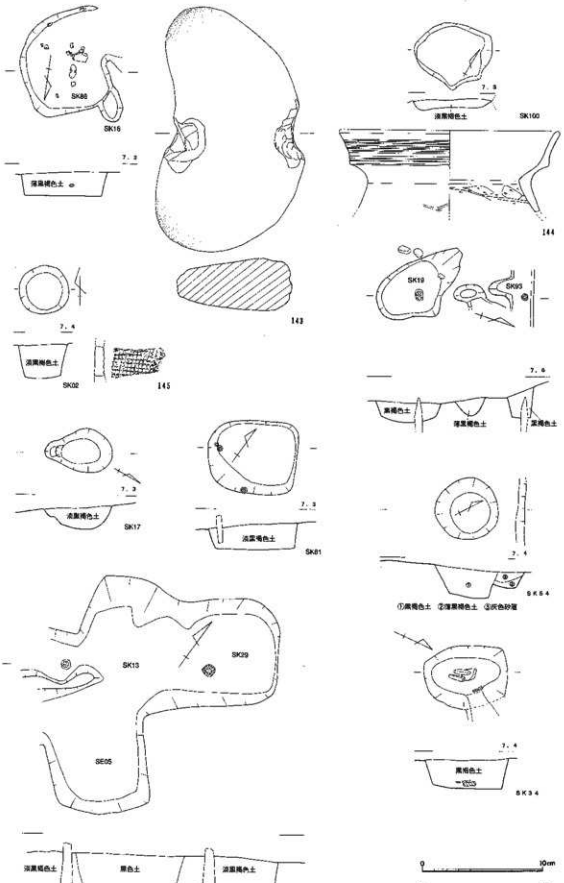


図38　Ⅰ区遺構・遺物実測図（2）

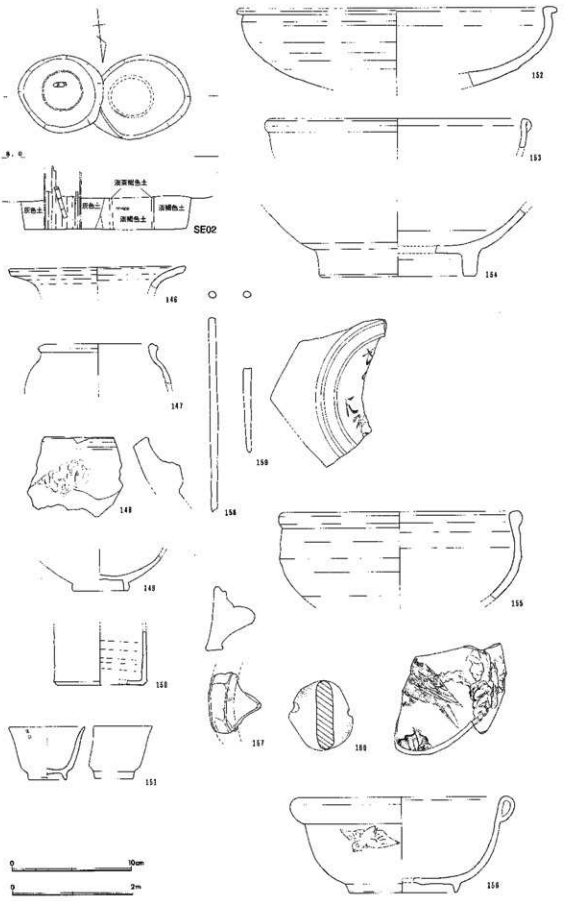


図39　Ⅰ区遺構・遺物実測図（3）

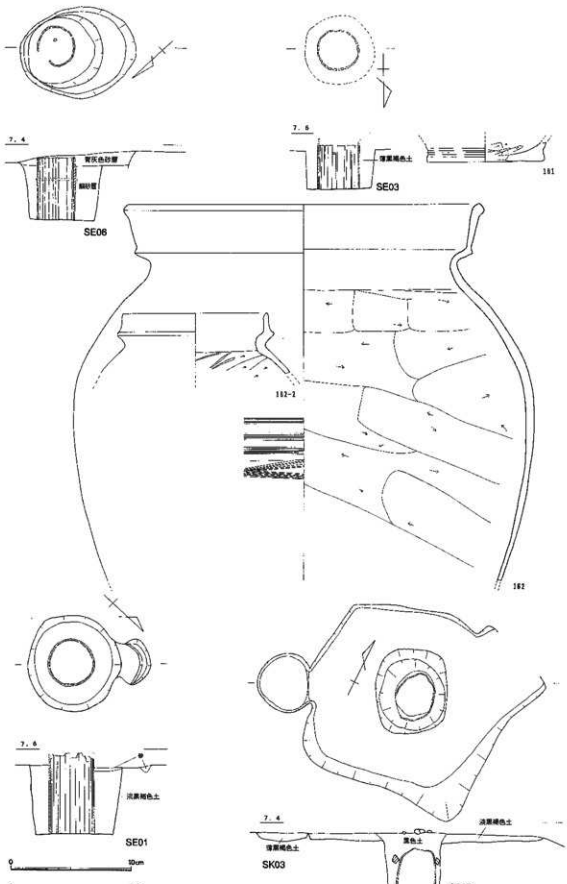


図40　Ⅰ区遺構・遺物実測図（4）

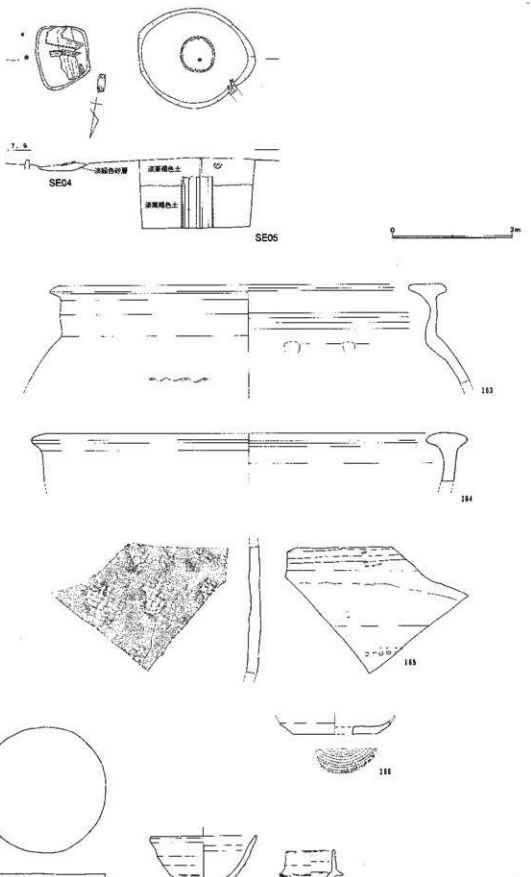


図41　Ⅰ区遺構・遺物実測図（5）

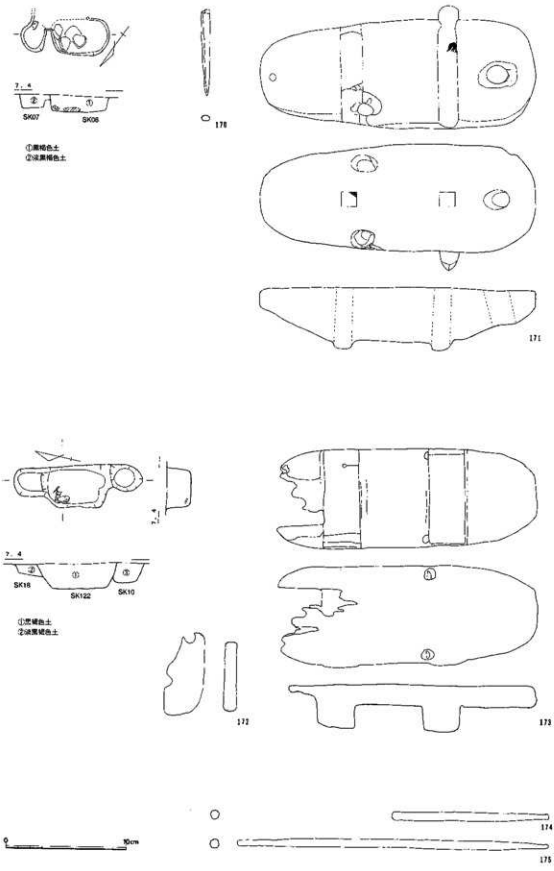


図42　Ⅰ区遺構・遺物実測図（6）

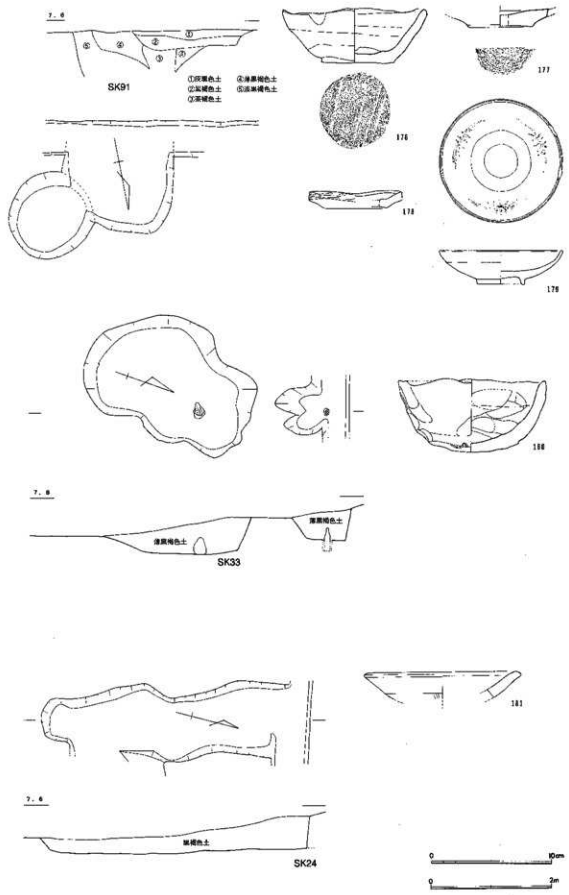


図43　Ⅰ区遺構・遺物実測図（7）

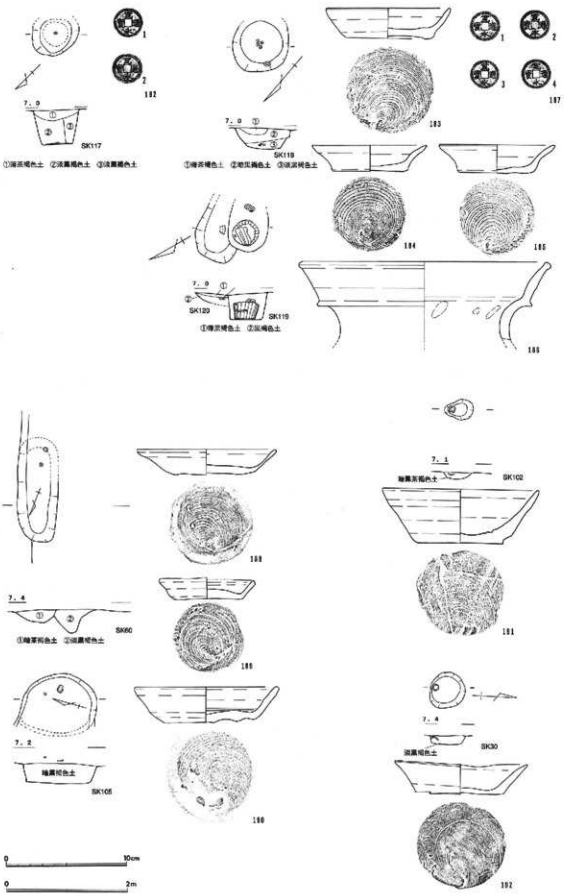


図44　Ⅰ区遺構・遺物実測図（8）

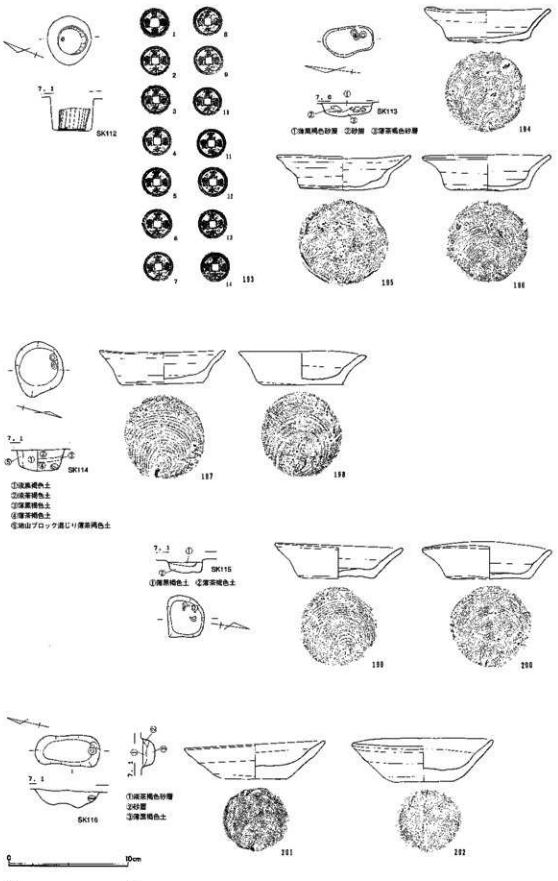


図45　Ⅰ区遺構・遺物実測図（9）

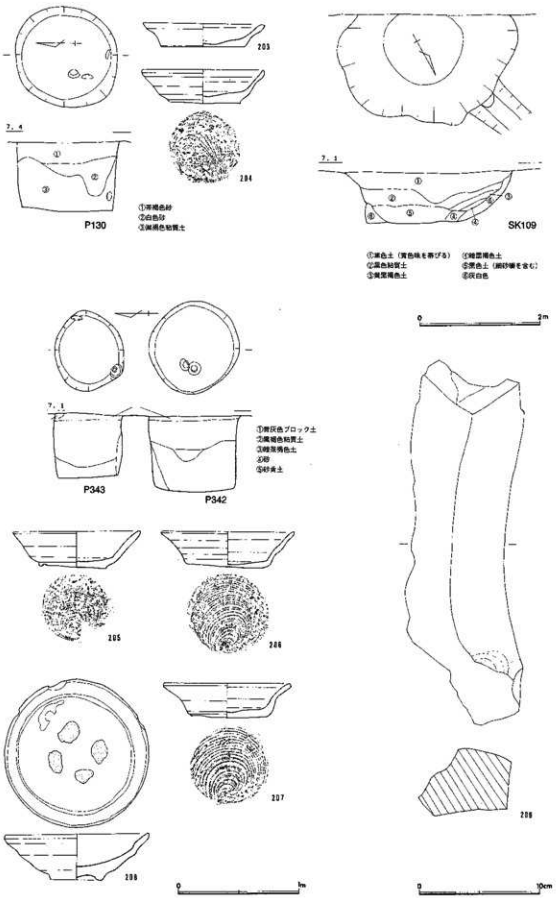


図46　Ⅰ区遺構・遺物実測図（10）

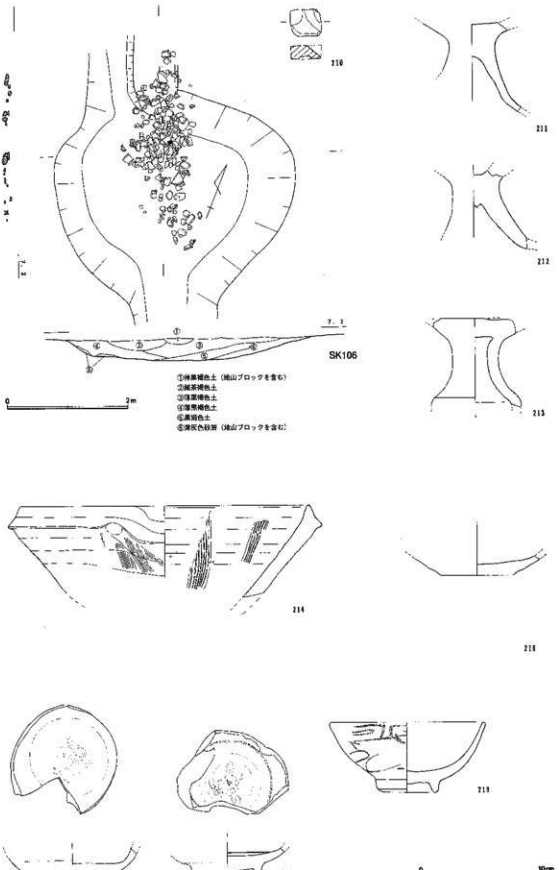


図47　Ⅰ区遺構・遺物実測図（11）

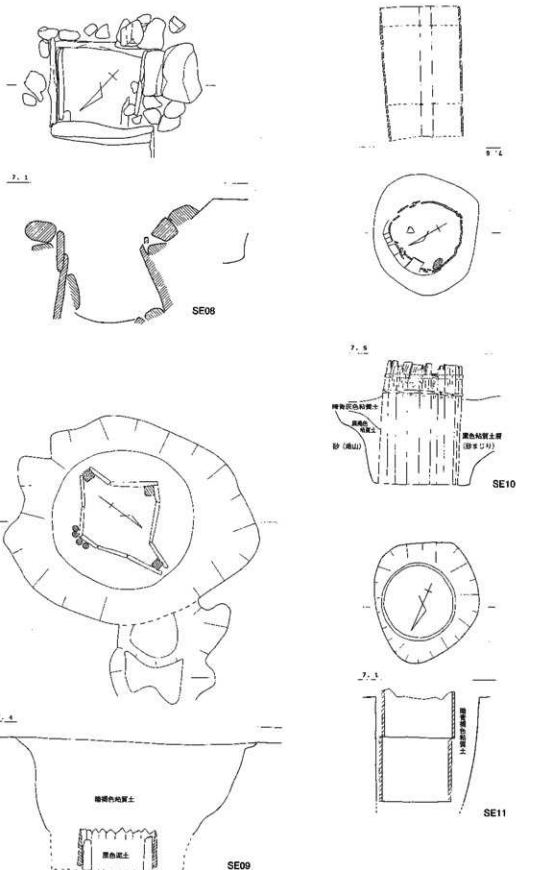


図48　Ⅰ区遺構・遺物実測図（12）

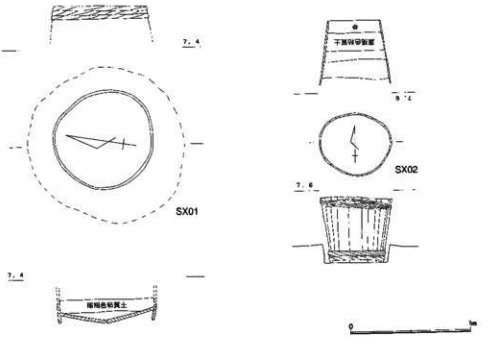


図49　Ⅰ区遺構・遺物実測図（13）

【井戸】

井戸には、木製枠のものと陶器製のものがある。木製枠のものには、くりぬき枠のもの、井桁状枠、桶状枠の三種がある。桶状枠の井戸には埋めるときに魂抜きをした竹筒が中央で検出された。陶器製のもの（図48）は桶状木製枠の井戸を陶器で作ったものであろう。また、土壙に分類したＳＫ104・108・110・111（図37）、109（図46）は素掘りの井戸の可能性があるが確定する根拠に乏しい。109で出土した礪石が唯一の遺物である（図46－209）。さらに、110は人頭大の石群が埋まっており、石組の井戸枠であった可能性も捨てきれない。

〔くりぬき枠の井戸〕ＳＥ１７は径65cmの一木をくりぬき井戸枠としたもので、調査区の西側の近世の土壙群の近くに検出された。東西南北がそれぞれ３ｍの方形の浅い落ちこみの中央に1.4×1.2ｍ、深さ80cmの土壙を掘り込んで木枠を設置している。遺物は須恵器の小破片が一片あるが井戸の時期を示しているかは不明。古志本郷遺跡に隣接する下古志遺跡でも同様な井戸が調査され、中世と考えられている。

〔桶状木製枠の井戸〕ＳＥ０１、０２、０３、０５、０６、１０が桶状木製枠の井戸である。桶状といっても桶のように径が上と下で違わない。桶状木製枠はいずれも径70cm前後、竹製の箍で締めている。このうちＳＥ０２（図39）は作りかえがみられた。埋め土のなかから肥前系染付（156）をはじめ、当地方の陶器（149、152～155）、美濃瀬戸系（151）、瓦質（148、157）の他、土師器（146）、石錘（160－縄文時代後・晩期か）、木製の箸（158、159）が出土した。このうち、図39－154には外面底部に墨書がある。ＳＥ０５（図41）からは美濃瀬戸系陶磁器を中心に、土師質土器や曲げ物の底等が出土した。いずれも陶磁器の年代は19世紀代であり、井戸の埋められた時期を示唆する。ＳＥ０３や０６からは（図40）土師器が出土したがこれらはＳＤ０２に関係するものであろう。

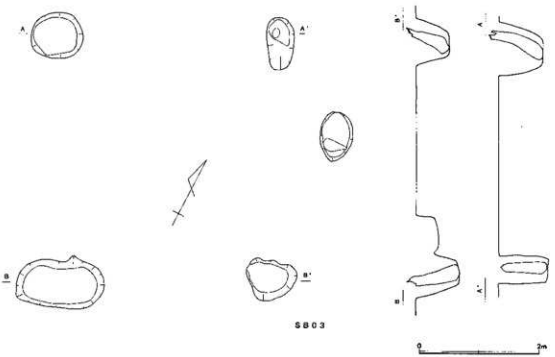


図50　Ⅰ区遺構・遺物実測図（14）

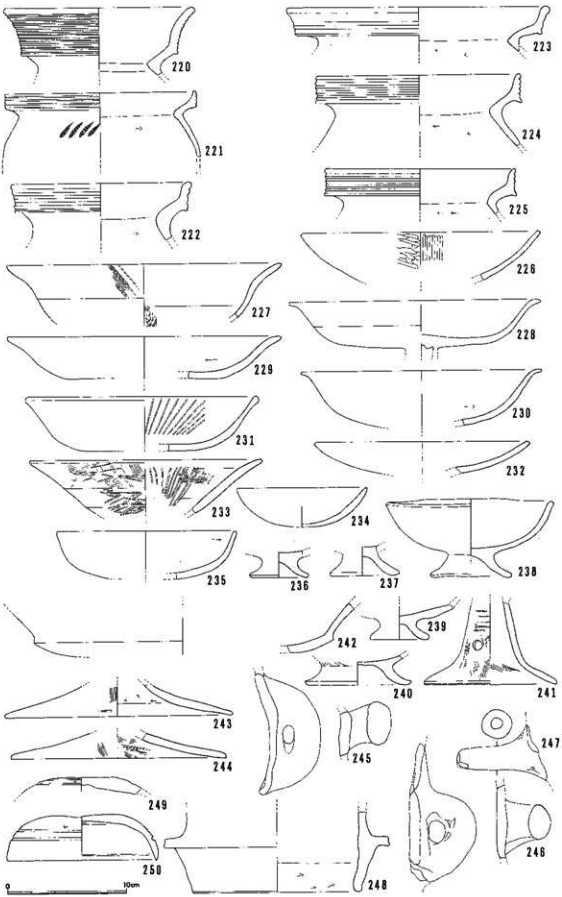


図51　Ⅰ区遺構に伴わない遺物（1）

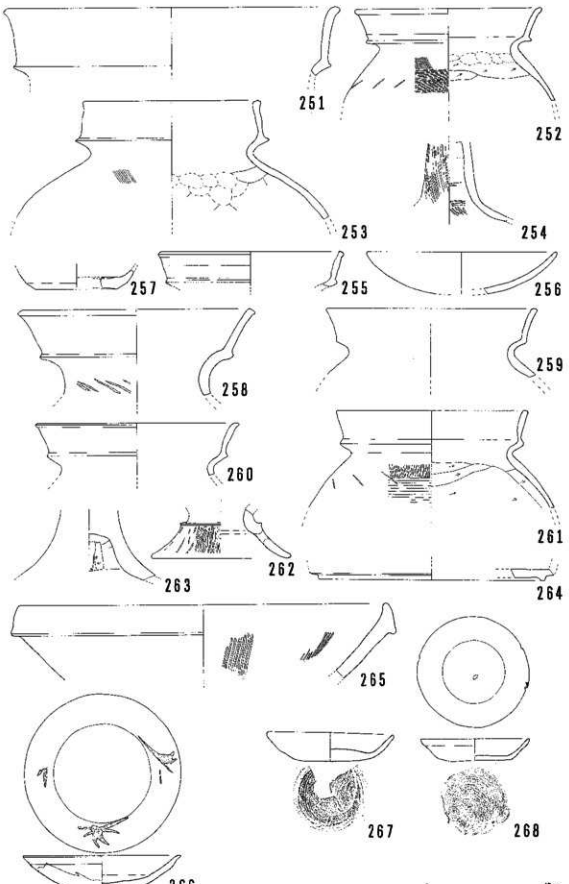


図52　Ⅰ区遺構に伴わない遺物（2）

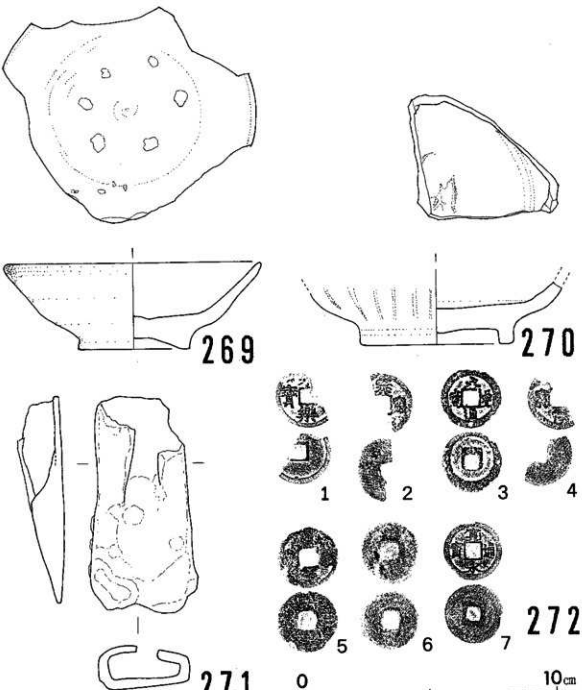


図53　Ⅰ区遺構に伴わない遺物（3）

〔井桁状木製枠の井戸〕ＳＥ０８、０９は井桁状木製枠の井戸である（図48）。０９の平面プランが歪んでいるのは土圧によるものか。遺物の出土がなくはっきりとしないが、桶状木製枠の井戸に先行する構造の井戸と考えられる。

【掘立柱建物跡】

掘立柱建物跡は、古代と近世の時代のものがある。近世の土壙で焼失住居の整理用のものの覆土を取り除くと柱が残っている場合があり、それらは調査区の北側に集中している。調査区の北側は現在の県道となっており、近世には街道沿いに家並みがあったと推定される。

〔ＳＢ０１〕調査区のほぼ中央に検出された３×３間の総柱構造の倉庫と考えられる掘立柱建物跡。

近世の小土壙で切られているため正確な柱穴の径は不明であるが、平均すると１mほどになると考えられる。深さは遺構検出面から50cmである。１尺≒30cmとすると、柱間距離が21尺×18尺となり、平面プランは正方形にならない。古志本郷遺跡の他の調査区の例と、柱穴から出土した須恵器の小破片から古代のものと判断した。

〔ＳＢ０２〕調査区の中央北側に検出された近世の掘立柱建物跡。柱の残る５穴を検出し、そのうち４穴は規則的に配置されているので、建物が二棟複合した遺構であるか、あるいは東側に飛び出した位置にある柱は補助柱と考えられる。１尺≒33cmとすると、柱間距離が25尺×22尺の長方形となる。おそらく建物は調査区北側の未調査区に続いているだろう。

【その他の遺物】

図51～53は遺構に伴わない遺物である。おおくはＳＤ０２出土遺物のように、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器である。若干、古墳時代後期の須恵器（図51－249、250）や鉄斧（図53－271）がある。他は中近世の遺物であるが、図53－269は15～16世紀の韓半島産、270は中国産青磁、272-1、2、3は渡来古銭である。

Ⅵ. 出雲市大津町来原地区の古環境復元

—「止屋淵」伝承の地質的検討—

中村唯史
渡辺正巳
沢井祐希

はじめに

出雲市大津町来原地区（図54）は，日本書紀に「止屋淵」，出雲國風土記に「止屋池」の名で記述されている湖沼の伝承地である。斐伊川放水路事業で伝承地の開発が行われることになり，それに先立つ埋蔵文化財調査の一環として伝承地の地質調査を行った。ボーリング調査の結果，来原地区の地下には，かつて水域が存在したことを示す軟弱な泥層が厚く分布していることが明らかになった。ボーリングコアから得られた試料について，^{14}C年代測定，火山灰分析，有機元素分析，珪藻分析，花粉分析を実施し，古環境の復元を行った。

地形・地質概要

来原地区は斐伊川が出雲平野へ流れ出る地点の左岸側支谷にある。斐伊川に面した谷の出口部分に自然堤防が発達し，支谷内は水はけの悪い後背低地になっている。支谷内には完新統が厚く分布し，下部が軟弱な泥質堆積層，上部が砂質堆積層である。支谷の後背地は，新第三系の堆積岩類または更新統の段丘堆積物からなる丘陵である。斐伊川の流域には白亜系～古第三系の花崗岩類が広く分布し，斐伊川が供給する砕屑物は大部分が花崗岩質である。江戸時代に支谷と斐伊川の間の尾根を開削して水門（来原岩樋）が設置されている。来原岩樋を経た水流は支谷内の水路からトンネル水路（只谷間歩）を経て，出雲平野を涵養する間歩川を流れている。

調査方法

本調査ではシンウォールサンプリングとサンドサンプリングを併用して，不撹乱試料の連続採取を行い，2本のボーリングコア（OT-1，OT-2）を採取した（図55）。このボーリングコアについて，層序・層相の観察と^{14}C年代測定，火山灰分析，炭素・窒素・イオウ分析，珪藻分析，花粉分析を実施した。

層序と層相

2本のボーリングコアの観察に基づき，既存のボーリング資料と併せて作成した地質断面図を図56に示す。

本調査地の完新統は4層（上位から順にA～E層）に大別可能であり，各層の特徴を以下に述べる。

A層

細礫～粗粒砂を主体とする花崗岩質の砂層である。厚さ数cm～数10cm間隔で層理が認められ，単層内に級化構造や斜交ラミナが認められる。本層の上部は砂層と砂質泥層が互層し，最上部は水田耕作土壌である。

B層

砂混じり泥層と有機質泥層が互層する。

有機質泥層は未分解の植物片を多量に含む地層で，葉や茎とともに比較的大きな木片も含まれる。OT-1では深さ7.3m付近に，この層準が地表で乾燥を受けたことを示す干裂痕が認められる。

C層

泥層を主体とし，所々に砂質泥層や砂薄層が挟まれる。砂分に富む層準では黒雲母が多く含まれることがある。淡水域の還元的底質で自生する鉱物のビビアナイト（藍青石）が点在する。OT-1では深さ17.6mを境に，上部では若干砂分に富み，下部では均質な泥を主体とする。OT-2では粒度はほとんど変わらないが，深さ16m以深で若干有機質に富む。

OT-1，OT-2において，C層に2層ずつの火山灰層が挟まれている。層位および鉱物組成からそれぞれの火山灰層が対比可能で，後述のように上位のものが三瓶火山灰層，下位のものがアカホヤ火山灰層である。

D層

礫層，砂層，泥層が互層する地層である。古土壌が複数挟まれる。礫は調査地周辺の基盤岩に由来する砂岩礫が主体で，強風化した円礫が多い。花崗岩質の礫・砂は含まれていない。

^{14}C年代測定

^{14}C年代測定はOT-1コアから採取した試料を，島根大学汽水域研究センターおよび地球科学研究所に依頼して，ベンゼン液体シンチレーション法および加速器質量分析計法（AMS）によって測定した（表）。

^{14}C年代測定値およびアカホヤ火山灰層の年代（6300yr.BP）から，各層準間の平均堆積速度を求めると，深度10m付近を境にして上下で値が大きく異なる。OT-1コアは上部で層相変化が大きいことから，堆積の不連続や地層の削剥が予想され，見かけの堆積速度が著しく小さくなっていると考えられる。

アカホヤ火山灰層からC層最下部までは年代値が得られていないので，この区間の堆積速度に最も近いと思われる0.52cm/yをもとに年代を外挿すると，層下部の年代はおよそ7600yr.BPとなる。

火山灰層

OT-1，OT-2にはそれぞれ2枚ずつの火山灰層が挟まれている。OT-1の火山灰層を上から1a火山灰層，1b火山灰層，OT-2の火山灰層を上から2a火山灰層，2b火山灰層として，これらの火山灰層の特徴と対比を述べる。

火山灰層の特徴

1a 火山灰層（深さ13.11～13.21m）：層厚10cm。基底部が粗粒砂サイズの粗粒分を主体とし，泥サイズの細粒が重なるユニットが2組重なる。細粒分が主体で，粗粒分は少ない。
下部ユニットは級化構造が明瞭である。上部ユニットはやや淘汰が悪く，植物片等を若干含む。このような層相から，下部ユニットが降下堆積層，上部ユニットは2次堆積層と考えられる。鉱物組成は斜長石＞黒雲母＞角閃石＞石英＞鉄鉱物である。これらの鉱物を包有する岩片も多く，発泡したものも含まれる。

1b 火山灰層（深さ19.90～19.92m）：層厚2cm。細粒砂サイズの粒子を主体とするガラス質火山灰である。大部分が火山ガラスからなり，形状はバブルウオール型＞軽石型（繊維状）である。バブルウオール型火山ガラスの肉厚部は褐色を呈する。斑晶鉱物はシソ輝石＞普通輝石＞斜長石が含まれるが，いずれもごく微量である。

2a 火山灰層（深さ12.96～13.00m）：層厚4cm。基底部が粗粒砂サイズの粗粒分を主体とし，泥サイズの細粒分が重なる1ユニットからなる。細粒分が主体で，粗粒分は少ない。
鉱物組成は斜長石＞黒雲母＞角閃石＞石英＞鉄鉱物である。これらの鉱物を包有する岩片も多く，発泡したものも含まれる。

2b 火山灰層（深さ16.12～16.14m）：層厚2cm以下のパッチ状。細粒砂サイズの粒子を主体とするガラス質火山灰である。大部分が火山ガラスからなり，形状はバブルウオール型＞軽石型（繊維状）である。バブルウオール型火山ガラスの肉厚部は褐色を呈する。斑晶鉱物はシソ輝石＞普通輝石＞斜長石が含まれるが，いずれもごく微量である。

対比

OT-1とOT-2に2枚ずつ挟まれる火山灰層は，1a 火山灰層と2a 火山灰層，1b 火山灰層と2b 火山灰層の層相および鉱物組成が一致しており，それぞれが対比可能である。
1a 火山灰層と2a 火山灰層ではユニット数が異なるが，1a 火山灰層の上部ユニットは2次堆積層と考えられ，2b 火山灰層では2次堆積層が欠如しているとみられる。

1a(2a)火山灰層の鉱物組成は，三瓶火山の完新世の活動によってもたらされた火山灰と一致する。また，粒径の淘汰が悪いことから，供給火山は近距離にあると考えられる。したがって，この火山灰層は三瓶火山起源と考えられる。三瓶火山の完新世の活動期は第Ⅴ期と第Ⅵ期の2回が報告されており（松井・井上，1971），火砕物中の試料から得られた^{14}C年代値として，第Ⅴ期では4310～4780yr.BP，第Ⅵ期では3530～3710yr.BPが報告されている（松井，1998）。両活動期の噴出物は同質といえるもので，鉱物組成からは区別が困難である。そこで年代についてみると，1a火山灰層の下位から5310yr.BP，上位から4140yr.BPの^{14}C年代値が得られており，第Ⅴ期の年代値と重なる。したがって，1a（2a）火山灰層は三瓶火山第Ⅴ期の噴出物に対比される可能性が高い。
1b（2b）火山灰層はバブルウオール型の火山ガラスを多量に含む特徴的な火山灰である。完新世の

火山灰層でこのような特徴を持つものには6300年前に降灰した鬼界アカホヤ火山灰層があり，斑晶鉱物の組成も一致する。また，調査地に近い宍道湖湖底や松江低地で確認されたアカホヤ火山灰層の層厚は概ね2cm以下である。したがって，1b(2b)火山灰層はアカホヤ火山灰層に対比できる。

炭素・窒素・イオウ分析

堆積物の炭素濃度，窒素濃度，イオウ濃度は泥質堆積物が堆積した水域環境を示す指標となる。

堆積物中の有機炭素は主に陸上高等植物およびプランクトンに由来し，有機窒素はおもにプランクトンに由来する。CN比（C/N）をとると，一般的に沿岸部でCN比が大きく，沖合では小さくなる。

イオウ濃度は堆積水域への海水流入の有無を示す指標となる。一般に海成または汽水成の泥質堆積物では数%のイオウが含まれるが，淡水成の堆積物ではほとんど含まれない。

本調査ではガスクロ式の質量分析計（FUSION EAGER200）を用いて，全有機炭素濃度，全窒素濃度，全イオウ濃度を求めた（図57）。

炭素・窒素濃度とCN比

炭素濃度は概ね3%以上の高い値を示し，全体として上方へ増加する傾向が認められる。特に深さ10m付近では10%を超える高い値を示す。深さ9m以浅では急減している。窒素濃度も炭素濃度と調和的な変化傾向を示し，全体として上方へ増加する傾向が認められる。これは，無機砕屑物（土砂）に対して有機物の堆積量が相対的に増加したことを示している。その要因として次の2つが考えられる。(1)水域の縮小に伴って陸地が接近して有機物供給量が増加。(2)富栄養化の進行に伴い，基礎生産が増加。

CN比をみるとよい相関を示し（相関係数0.96），有機物の相対的量の変化に対してCN比はほとんど変化していないことがわかる。陸上からの有機物の供給量が増加すると，それに応じて基礎生産が増加し，その結果，CN比がほぼ一定になったと考えられる。

深さ9m以浅では炭素，窒素ともに急減する。この層準付近は干裂がみられることから，堆積物が酸化分解を受けたことが推定できる。

イオウ濃度

分析層準のうち，深さ22.5m，深さ24.5mの2点では2%を超える高い値を示すが，その他では1%未満である。

深さ22～25m堆積時には間欠的に海水流入があったと考えられる。深さ22.5mはイオウは高い値を示すが，珪藻分析からは淡水環境が推定され，両者が矛盾する。これの解釈として，底層に珪藻などが含まれない無酸素の塩水が流入して塩分躍層が形成され，上層水は淡水のまま維持される状況を考えざるをえない。

その他の層準は淡水環境で堆積したと考えられる。9.5mや13m付近でもTSが若干高い値を示すがCS比は小さいので，炭素濃度が高くなることによってイオウの固定率が高くなったと解釈することが出来，海水流入と判断し得る有意な変化ではない。

珪藻分析

珪藻は珪質の殻を持った藻類で，様々な環境に対応した多様な種が知られている。堆積物中の珪藻遺骸群集は堆積環境を示す指標となる。OT-1の珪藻分析結果を図58・図59に示す。

OT-1は全体に淡水生種が圧倒的に優先しているが，深さ7～9mと深さ25m付近で海水～汽水生種が30～40%出現する。深さ25m付近はイオウ濃度も高い値を示すので海水が流入していたと考えられるが，他の層準は淡水環境で堆積したと考えられる。

深さ7-9mは海水～汽水生種が出現するが，以下の2つの理由から海水流入は否定できる。

（1）この層準ではイオウが若干高い値を示すこともあるが，上記のように炭素濃度が高くなることによってイオウの固定率が高くなったと解釈することが出来，海水流入を推定し得る有意な変化とはいえない。

（2）この層準は標高2.5～4.5mにある。津波のような特殊な条件ならば海水は流入し得るが，ある程度長期間にわたって海水が流入するためには海面が現在より2m以上高くなくてはならない。この層準の堆積時期は2500年前以後であるが，この時期に2m以上の高海面期が存在したことは，出雲平野・宍道湖周辺の遺跡分布から否定できる。

次に珪藻種の生息環境をみると，泥層最下部（深さ27m）から深さ25mでは底生種が優先し，深さ25mから深さ15mでは浮遊生種が優先する。深さ15m以浅では再び底生種が優先する。池が形成された当初は水深が浅いので底生種が優先し，水位の上昇とともに浮遊生種が増加して，堆積により水深が浅くなることで再び底生種が優先するようになったと考えられる。

花粉分析

地層中から検出される花粉化石には，比較的遠方から風あるいは川の流れによって運ばれるものや，移動距離の極短いものがある。水草の花粉生産量は少なく移動距離も短いことから，水草由来花粉化石の出現傾向が堆積環境を示唆すると考えられる。ＯＴ－１の花粉分析結果を第61図に示す。木本花粉の組成変遷を基に下位からⅨ～Ⅰ帯の地域花粉帯を設定し、図61に示してある。

Ⅸ帯期：a亜帯下部ではヒシ属の花粉が認められること、草本花粉の検出量少ないことから調査地近辺は淡水の湖沼の一部であった可能性が指摘できる。

ムクノキ属－エノキ属の出現率が高く、近辺で自然堤防が発達し、ムクノキ、エノキなどが河畔林を形成していたと考えられる。

Ⅷ帯期：ヒシ属は認められなくなるが、草本花粉の検出量は前時期同様に少なく、湖沼の一部であったことが指摘できる。

アカガシ亜属が卓越し遺跡周辺の山々に照葉樹林が分布したと考えられるが、シイノキ属を欠くものであったと考えられる。またムクノキ属－エノキ属の出現率は高く、近辺での自然堤防の発達と、ムクノキ、エノキなどによる河畔林の形成が考えられる。

Ⅶ帯期：草本花粉の検出量は前帯同様に少なく、ヒシ属の検出される試料も少ない。引き続き淡水域ではあるが、水深が深くなった可能性がある。

前帯同様にアカガシ亜属が卓越するが、シイノキ属－マテバシイ属も出現するようになる。遺跡周辺の山々には、今日ふつうに見られるような型の照葉樹林が分布したと考えられる。またムクノキ属－エノキ属の出現率は高いままで、近辺での自然堤防の発達と、ムクノキ、エノキなどによる河畔林の形成が考えられる。

Ⅵ帯期：草本花粉の検出量は前帯同様に少ないが、ヒシ属は断続的に検出され、ハス属も１試料だけであるが検出される。引き続き淡水域ではあるが、前の時期に比べ水深が浅くなった可能性がある。

前帯同様に遺跡周辺の山々には、今日ふつうに見られるような、アカガシ亜属、シイノキ属－マテバシイ属を主要素とする照葉樹林が分布したと考えられる。またムクノキ属－エノキ属の出現率がやや低くなり、ヤナギ属がやや高率になり、河川の影響が示唆される。

Ⅴ帯期：草本花粉の検出量は前帯同様に少ないが、ヒシ属、ハス属が検出される。また下部ではヤナギ属が高率になるほか、ハンノキ属もやや高率になるなど前時期に比べ、水深が浅くなり湿地が付近に広がったことが推定される。

前帯同様に遺跡周辺の山々には、今日普通に見られるような、アカガシ亜属、シイノキ属－マテバシイ属を主要素とする照葉樹林が分布したと考えられる。

Ⅳ帯期：草本花粉の検出量は前帯同様に少ないが、ヒシ属、ハス属は検出されない。また、ハンノキ属が高率になるなど前時期に比べ、水深が浅くなり湿地が付近により広がったことが推定される。

遺跡周辺の山々の様子は前時期とほとんど変わらず、アカガシ亜属、シイノキ属－マテバシイ属を主要素とする照葉樹林が分布したと考えられる。また、前述のように遺跡近辺には、ハンノキ湿地林が生育していたと考えられる。

Ⅲ帯期：草本花粉の検出量が急激に増える。サジオモダカ属、オモダカ属、ガマ属など比較的水深の浅い水域に生育する水草の花粉が認められ、湿地から乾陸にも生育するカヤツリグサ科やイネ科、あるいは主に乾陸に生育するヨモギ属などの花粉も多く検出される。一方ハンノキ属は激減する。前時期に比べ、水深はさらに浅くなり湿原が付近に広がり、草原も付近には広がっていたと考えられる。

遺跡周辺の山々では、アカガシ亜属、シイノキ属－マテバシイ属を主要素とする照葉樹林が若干減少し、アカマツやナラ類を要素とする二次林が拡大し始めたと考えられる。また、スギ属が高率で出現し、付近にスギ林が分布していたと考えられる。

Ⅱ帯期：草本花粉の検出量が引き続き高率であり、栽培種のソバ属の花粉が検出される。また、栽培種の「イネ」を含むと考えられる大型のイネ科花粉（イネ科：40ミクロン以上）も高率になる。調査地付近には水田が広がり、休耕田や畦ではソバが栽培されたと考えられる。

遺跡周辺の山々では、アカマツやナラ類を要素とする二次林が分布していたと考えられる。

Ⅰ帯期：草本花粉の検出量が引き続き高率であり、栽培種のソバ属やワタ属の花粉が検出される。また、栽培種の「イネ」を含むと考えられる大型のイネ科花粉（イネ科：40ミクロン以上）も極めて高率になる。調査地付近には水田が広がり、休耕田や畦ではソバやワタが栽培されたと考えられる。

遺跡周辺の山々では、アカマツやナラ類を要素とする二次林が分布していたと考えられる。またスギ属花粉がやや高率になるが、天然のスギ林あるいはスギ植林による可能性がある。

考　察

古環境変遷

ボーリング調査の結果，来原地区にはかつて湖沼（以下，来原池）が存在したことが明らかになった。

来原池が形成されたのはC層が堆積し始めた7500年前頃と推定される。湖沼の形成は後氷期の海面上昇に起因すると考えられるが，イオウ濃度が低いこと，淡水珪藻化石が高率であることから当初は淡水湖であったことがわかる。また湖沼環境では低率になる草本花粉化石の検出量が少なく，淡水生のヒシ属の花粉化石が検出されることからも，調査地近辺が湖沼の一部で，しかも淡水域であった可能性が指摘され，このことを補完する。

来原池が形成されてまもなく海水が流入するようになり，7000年前頃までには汽水環境になっていた。一時，汽水生珪藻化石がやや高率を示すようになるが，全体としては淡水生珪藻化石の出現率が高い。一方でイオウ濃度は連続して高いことから，池の表層は淡水で，底層が汽水という状態が長く続いていたことが推定される。来原池は斐伊川河口より陸地側にあって，さらに池の入り口を自然堤防で塞がれていたために，高潮時に時折海水が流入する程度であったと思われる。なお，この時期は宍道湖においても外海の影響が最も強くなる時期である（中村・徳岡，1996）。

6000年前頃には海面の高さが現在とほぼ等しくなり，宍道湖周辺で海域が最も拡大した時期である（中村ほか，1996）。しかし，淡水生珪藻化石がほとんどを占めイオウ濃度も低いことから，この時期に来原池には海水が流入せず，淡水湖の状態であったことが明らかである。このことは，草本花粉化石の検出量が少なく，断続的であるがハス属やヒシ属の花粉化石が検出されることからも，補完される。6300年前に降灰したアカホヤ火山灰層が標高-8.4mに挟まれていることから，湖底深度は海面より低かったはずである。にもかかわらず，淡水湖になったのは，斐伊川三角州が前進して河口が遠くなったことと，斐伊川の河床が高くなって河口内への塩水遡上が起こりにくくなったことが考えられる。

4000年前頃になると，堆積の進行によって水深が浅くなり，来原池は湿地へと変化し始める。高率を示す湿性木本のハンノキ属やヤナギ属花粉化石などは，来原池内の湿地化した地域に成育していたと考えられる。

花粉帯のⅣ帯からⅢ帯に変わると，カヤツリグサ科やイネ科など湿地を好む草本の花粉が高率になる。おそらく2000年前頃までは浅い沼の状態であったのが，湿地環境に変化したと考えられる。また干裂痕が認められることから，渇水期には乾ききるような状態だったことがわかる。

岩樋設置後に堆積したと考えられる地層の直下は厚い腐植層である。近世の山地荒廃に伴う斐伊川の天井河川化によって，以前より水はけが悪くなり，沼地化して腐植層が形成された可能性が考えられる。また同時に新田開発が行われる時期でもあり，水深の浅くなった来原池周辺部が開発され，水田となった可能性もある。

来原岩樋が設置され斐伊川の砂が岩樋を通じて流入するようになると来原池は完全に消滅し，現在認められるような一面の水田へと変わった。

来原池は止屋湖か？

来原池は自然堤防によって隔てられ，斐伊川の流水の影響をあまり受けない環境だったと考えられる。それは，現在の「湖」という言葉が意味する，「河川の屈曲部に出来る深み」とはかなり異なった状況である。

来原池は縄文時代早期に形成され，堆積の進行によって縄文時代後期には湿地に変化しはじめた。日本書記や風土記が編纂された7～8世紀にはボーリング地点は完全に埋積されており水域は存在しなかった。

ボーリング地点の北側にも低地が広がっており，その部分の埋積が遅れて7～8世紀まで水域が残っていた可能性もあるが，上記の来原池の残存部にすぎず，「池」あるいは「沼」と呼ぶのがふさわしい状況だったと思われる。

したがって，止屋湾の意味する「湖」が現在と同じであるならば，来原池は「止屋湖」とは関連づけにくい。しかし，風土記にあるように「止屋池」ならば，来原池がそれに当たる可能性があると思われる。

なお，止屋湖の問題とは別に，地形的にみると，来原から約1.5km上流（船津町上ゲ～原付近）で斐伊川が大きく右へ曲流し，その外側は低地になっている。ここにはかつて大きな湖が存在していたかもしれない。

現在の斐伊川は著しい天井河川となっていて，下流域では堤防の間を浅く網状に流れて，渇水期にはすぐに水流が消滅する。天井河川化は，斐伊川流域には深層まで砂状に風化した花崗岩が広く分布しているという地質的要因もあるが，砂鉄採取や踏鞴発に伴う山地荒廃による土砂流出が主原因である。山地が自然林に覆われていた頃の斐伊川の様子は現在とは大きく異なっていたと思われる。止屋湖伝承はその頃の状況をわずかに垣間見せてくれているように思われる。

文　献

中村唯史・徳岡隆夫，1996：宍道湖ボーリングSB1から発見されたアカホヤ火山灰と完新世の古地理変遷についての再検討．島根大学地球資源環境学研究報告，15，35-40.

中村唯史・徳岡隆夫・大西郁夫・三瓶良和・高安克己・竹広文明・会下和宏・西尾克己・渡辺正巳，1996：島根県東部の完新世環境変遷と低湿地遺跡．LAGUNA汽水域研究，3，9-11.

松井整司・井上多津男，1971：三瓶火山の噴出物と層序．地球科学，25，147-163.

^{14}C年代測定結果

試　料	深　度(m)	^{14}C年代(yr.BP)	堆積速度(cm／y)
腐　植	5.76～5.96	190±110	0.14
木	9.15～9.32	2560±130	0.07
木	10.22～10.32	4080±40*	0.35
木	14.35～14.45	5250±113*	0.52
アカホヤ	19.90～19.92	6300	

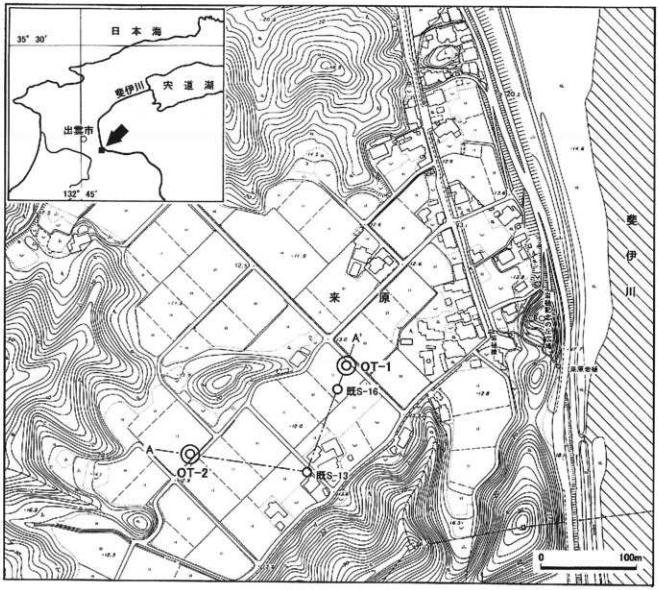


図54　調査地域とボーリング地点

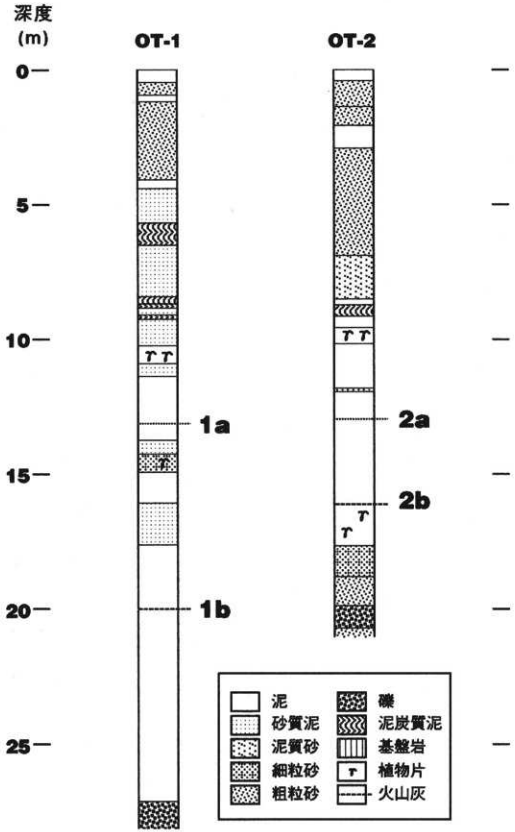


図55　ボーリング柱状図

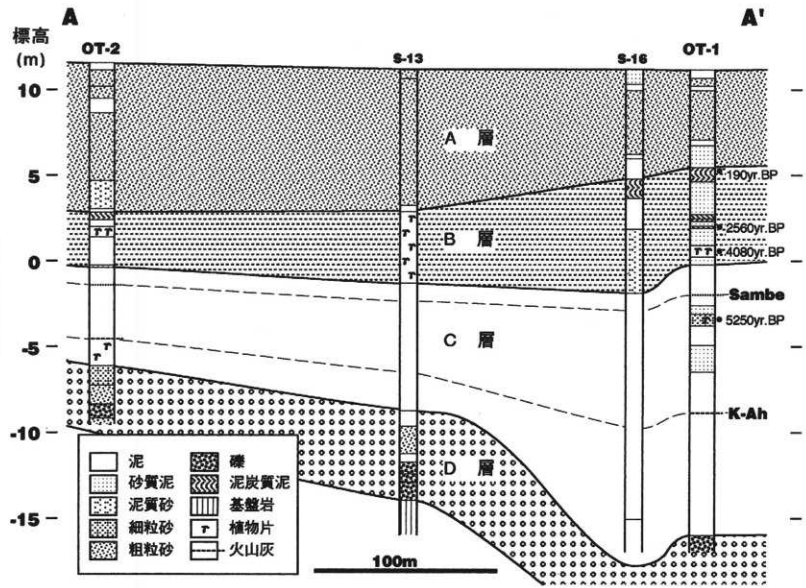

A
A'
標高
(m)
OT-2
S-13
S-16
OT-1
10
5
0
-5
-10
-15
A 層
B 層
C 層
D 層
190yr.BP
2560yr.BP
4080yr.BP
Sambe
5250yr.BP
K-Ah
泥
砂質泥
泥質砂
細粒砂
粗粒砂
礫
泥炭質泥
基盤岩
植物片
火山灰
100m

図56 地下地質断面図

図57　元素分析結果

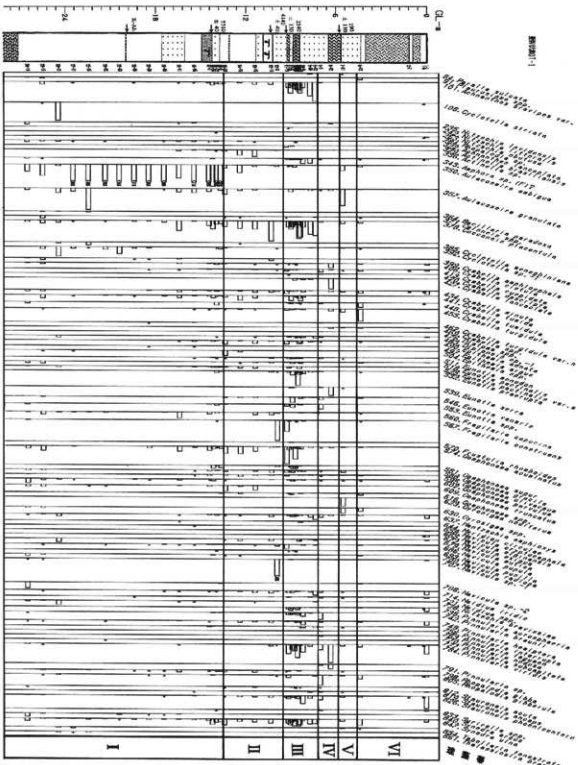


図58　珪藻分析結果

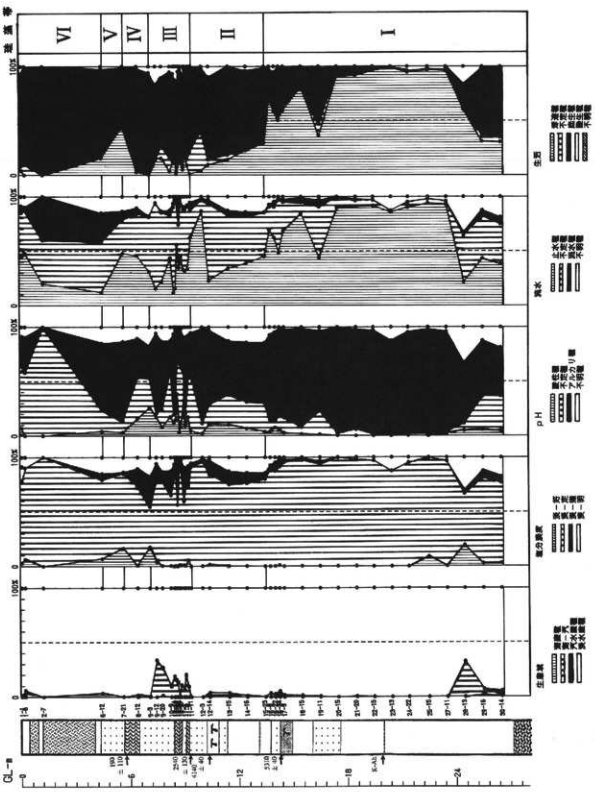


図59　珪藻群集組成

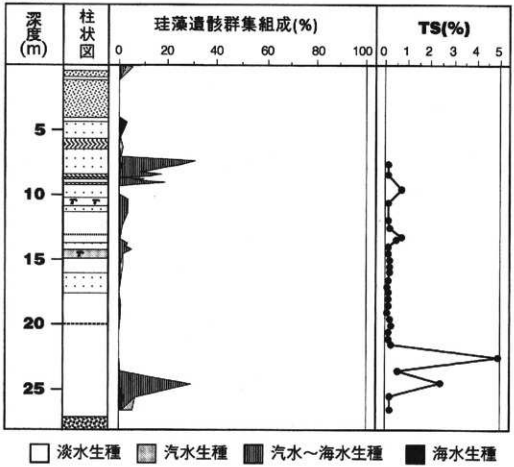


図60　珪藻群集組成とイオウ濃度の関係

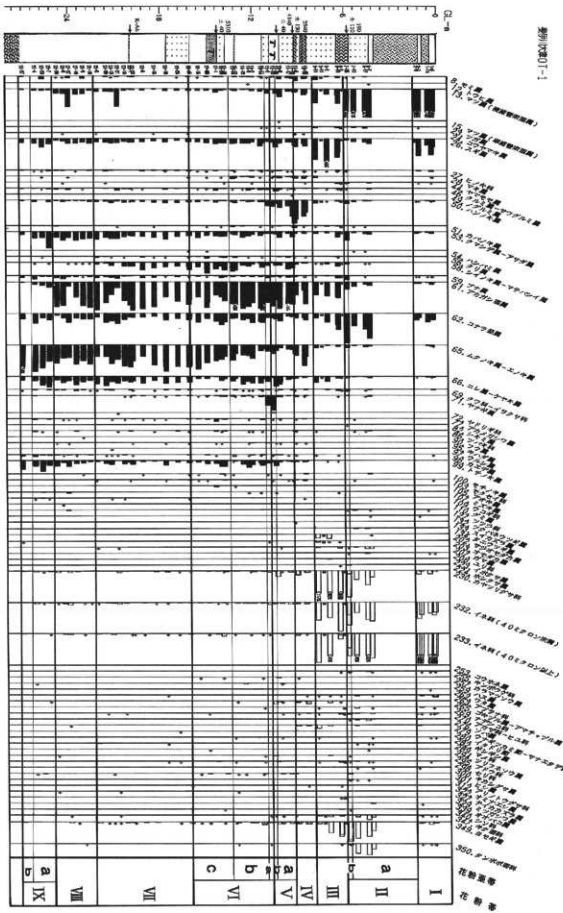


図61　花粉分析結果

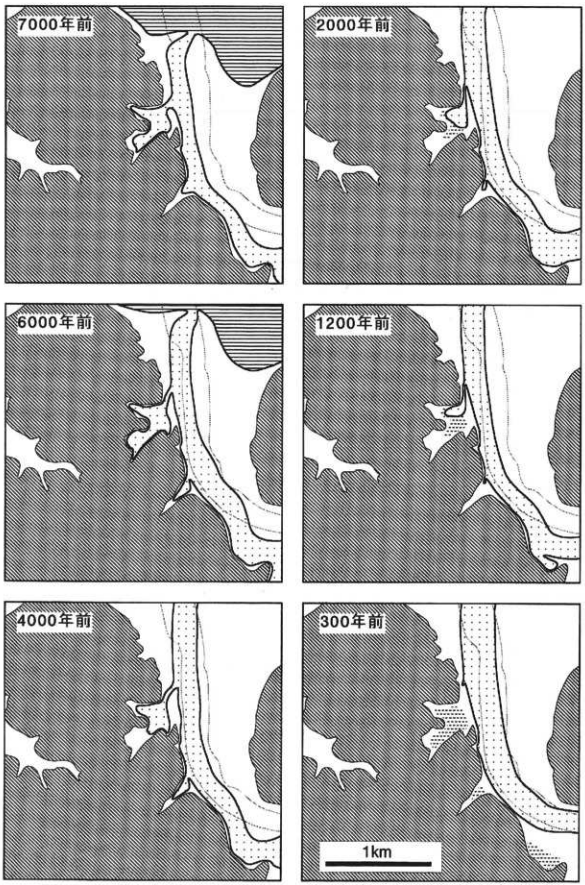


図62　来原地区の古地理変遷

Ⅶ. 出雲・石見・隠岐の朝鮮系土器

―古墳時代資料を中心に―

亀田修一

1．はじめに

出雲・石見・隠岐地域は古くから朝鮮半島との関わりが深い地域として認識されており、朝鮮系資料も近畿地方や九州地方には及ばないものの比較的まとまって出土している。

最近も江津市古八幡付近遺跡で山陰地方で初めての印花文土器が出土し、注目を集めた。そして出雲市古志本郷遺跡においても古墳時代初期の地元の土器に混じって伽耶地域に類例がみられる瓦質土器が出土した。

ここではこれらの新資料を含めて、出雲・石見・隠岐地域の朝鮮系土器を集成し、簡単な整理・検討を行ってみたい。ここで扱う朝鮮系土器は朝鮮半島産のものと、日本産の可能性もあるが、朝鮮半島産のものと区別が付きづらいものも含めている。

対象とする時期は、弥生時代末から奈良時代までの古墳時代を中心とした時期とする。地域は出雲・石見・隠岐とする[1]。

2．資料の概要と若干の検討

出雲・石見・隠岐の古墳時代を中心とした時期の朝鮮系土器は表1のように発掘調査で出土したものが11ヵ所、出土遺跡は確認できるが、発掘資料ではないものが1ヵ所、海揚がりが1ヵ所、出土地などがやや不明なものが3ヵ所、合計16ヵ所である。

表1．出雲・石見・隠岐出土朝鮮系土器一覧表

	遺跡名	所在地	遺構	遺物	時期
1	鹿島町沖海揚がり	八束郡鹿島町	海揚がり	楽浪系瓦質土器	1～3世紀
2	佐太前遺跡	八束郡鹿島町	土壙	陶質土器	5世紀
3	南講武草田遺跡	八束郡鹿島町	土器溜まり	瓦質土器	3世紀
4	伝弥陀が谷	八束郡美保関町		陶質土器	5、6世紀
5	的場遺跡	松江市上本庄町	旧河道	陶質土器？	4、5世紀
6	タテチョウ遺跡	松江市西川津町	旧河道・包含層	瓦質土器、軟質系土器	3～5世紀
7	石台遺跡	松江市東津田町	包含層	陶質土器	6世紀
8	下黒田遺跡	松江市大庭町	包含層	陶質土器	6世紀
9	夫婦遺跡	八束郡東出雲町	旧河道	軟質系土器	5世紀
10	長尾古墳	能義郡伯太町		陶質土器	5世紀
11	古志本郷遺跡	出雲市古志町	溝	瓦質土器	3世紀
12	上長浜貝塚	出雲市西園町	包含層	陶質土器	4世紀
13	古八幡付近遺跡	江津市敬川町	段状遺構	印花文土器	8世紀
14	森ヶ曽根古墳	浜田市周布町	横穴式石室	陶質土器	5、6世紀
15	伝津和野	津和野市		陶質土器	5、6世紀
16	伝珍崎	隠岐郡西の島町		陶質土器	5世紀

(1) 鹿島町沖海揚がり[2]（図64－1）

八束郡鹿島町の沖で引き揚げられた完形品である。いわゆる黒色磨研の楽浪系瓦質平底壺である。断面は灰色であるが、表面は黒色で、胴部にはヨコ方向の研磨がなされている。底部は平底で、糸切り痕跡は確認できなかった。胴中央部に最大径があり、その最大径の部分から少し下がったところに沈線が施されている。頸部は直線的に外反し、口唇部は角をもちながらやや丸くおさめられている。

日本国内では完形品の楽浪系瓦質平底壺は壱岐カラカミ遺跡[3]のものしかなく、極めて貴重品である。そっくりではないが、類例は楽浪郡の石巌里205号墓出土品（図64－2）[4]などにみることができ、楽浪郡の楽浪土器がこの鹿島町沖までもたらされた可能性も考えられる。時期ははっきりしないが、ひとまず楽浪郡の例などから1～3世紀ころと考えておきたい。

(2) 佐太前遺跡[5]（図64－3、4）

八束郡鹿島町の東西に長い小平野の中央部、南寄りの山裾の平地部に位置する遺跡で、陶質土器は土壙39から小型丸底壺（図64－4）とともに出土している。

土器は陶質であり、口径が胴部最大径よりも大きく、底部は平底である。頸部は胴部から3cmほど外反して上にのび、そこで一度折れて、直立気味に2cmほどのびる。

この陶質土器の平底壺は武末純一氏が検討しているように[6]、日本の土師器の小型丸底壺が朝鮮半島南部に受け入れられ、それが陶質化したものと考えられる。朝鮮半島ではおもに伽耶地域にみることができ、日本でも少ないながら出土している。

佐太前遺跡例と類似する伽耶の例としては、慶尚南道陜川玉田36号墳[7]（図64－5）、釜山東萊福泉洞6号墳[8]などにみることができる。時期は4世紀末ころから5世紀前半ころを中心にみられるようである。佐太前遺跡例は共伴土器が図64－4のような土師器の小型丸底壺であり、5世紀前半ころと考えておきたい。

(3) 南講武草田遺跡[9]（図64－6～8）

佐太前遺跡の北東約2kmの山裾の平地部に位置する遺跡で、弥生時代後期を中心とする住居や墓が確認されている。この遺跡ではここで述べる朝鮮系土器のほかに河内産の第五様式や庄内式期の土器が出土している。

朝鮮系土器（図64－6）は、上から見た形が方形の把手が付いたもので、質は瓦質である。肩部から上がなく、どのような形になるのかはっきりしないが、鍋のようなものが考えられる。外面は細かな斜格子タタキを施し、把手付近の胴中央部に沈線が巡らされている。方形の把手の中央には上下に貫通する円孔があけられている。内面は無文の当て具の痕跡が残っている。

朝鮮半島での類例はうまく見いだせなかった。ただ上下に円孔を開けた方形の把手は、赤褐色軟質土器ではあるが、慶尚南道金海府院洞遺跡出土例の中にみることができた[10]（図64－9）。時期は地元の弥生時代末の土器や畿内系の庄内式期の土器が共伴しており、3世紀ころのものと考えられる。

また、これ以外に丁寧に面取りした瓦質の把手（図64－8）も出土している。端部は切り落とされており、面をもつ。

(4) 伝弥陀が谷[11]（図64－10）

島根県の北東端、八束郡美保関町大字美保関の龍海山仏谷寺の奥の弥陀が谷で出土したと伝えら

れているものである。脚台付きの壷の下半部と推測されるものである。口縁部がなく、全貌はわからないが、胴部はほぼ球形を呈している。脚台部は直線的にハの字形に広がり、その上部に一辺2cm弱の方形の透かし孔が4個あけられている。その上部、胴部と脚台部の変化する部分に1本の凸線、方形透かし孔の下に2本の凸線を施っている。脚台部の端部はなんらの装飾もなく、そのまま面をもって終わっている。胴部最大径は20.4cm、脚台部径15.2cm、同高6.0cmである。

このような直線的な脚台部をもち、方形透かし孔をもつ例を筆者は十分捜すことができなかったが、比較的近いものとして伽耶北部の慶尚北道義城長林洞古墳群Ⅲ地区13号墳出土例（図64－11）をあげておく[12]。透かし孔の下の凸線の数が1本であり、脚台端部の処理のしかたもやや異なるが、一応類例としてあげておく。時期は5世紀後半から6世紀前半ころと考えておきたい[13]。

(5) 的場遺跡[14]（図64－12）

南講武草田遺跡から南の山を越えて東南東約8kmの松江市上本庄町に位置する。中海にほど近い本庄川流域の山裾の低地部の遺跡である。川幅約17mの旧河道の上層で大東式土器を中心とする時期の土師器とともに出土している。

口径17.3cm、胴部最大径24.2cm、高さ25.8cmの壷で、胴部は内外面無文で、頸部から口縁部にかけてはやや大きく外反する。口縁部直下に断面三角形の小さな凸帯がつき、頸部との境目と頸部中央に小さくやや弱い凸帯がそれぞれつく。

このような頸部から口縁部にかけての特徴を持つものは日本では日本最古の須恵器窯の一つである大庭寺窯（TG231）などで見ることができる[15]が、あまり例はない。朝鮮半島では口縁端部から少し下がったところに小さくに凸帯をもち、さらに頸部に2本の凸帯をもつものは金海礼安里130号墳[16]などにみることができる。ただ頸部の突帯は1本であるが比較的類似した形のものは慶州月城路古墳群カ－8号墳などで出土している[17]（図64－13）。胎土分析などの結果を待たなければよくわからないが、国産の可能性も考えつつ、ひとまず舶載品の可能性を考えておきたい。時期は朝鮮半島での類例、日本での類例、そして共伴する土師器などから、5世紀前半でよさそうである。

(6) タテチョウ遺跡[18]（図65－1～9）

鹿島町から南に山を越えた松江市西川津町の、宍道湖と中海をつなぐ大橋川の北側、朝酌川河口近くの低位部に位置する。時期はさかのぼるが、縄文時代から弥生時代の孔列土器や松菊里型土器なども出土しており、古くから朝鮮半島との関わりが深い遺跡である。

古墳時代の朝鮮系土器は瓦質土器の壷と軟質土器の平底深鉢形土器、甑、甕、両耳付壺などが出土している。前者は旧河道4の堆積土の中から古墳時代前期を下限とする土器とともに出土している。後者の一群は包含層の出土で時期は明確ではない。

瓦質土器の壷かと思われるもの（図65－1）は、底部に平行タタキが残っている。時期ははっきりしないが、共伴土器（図65－2）から3～4世紀ころと考えられる。

軟質土器の平底深鉢形土器（図65－7）はやや胴部が張る形態のもので、タタキは粗い格子目である。甑（図65－9）は平底で、直径3.5cmほどの円孔が1個確認でき、中央に1個大きな穴があり、その周りに直径3cmほどの円孔がいくつか並ぶものか、全体に直径3cmほどの円孔が配される形のものと考えられる。タタキははっきりしないが、小さな格子タタキのようである。また小さな格子タタキを施した把手付きの破片（図65－6）がある。把手の端部が切り落とされた形で、上

面には溝はないようである。このような形態の底部をもつ甕は百済から伽耶西部にみられる[19]（図65－12）。そのほか縄席文（図65－３）や格子目文（図65－４、５）のタタキの破片があり、甕がありそうである。さらに端部に面をもち、上下に貫通する穴をあけた平面台形の把手がついた両耳付壺（図65－８）がある。胴径約14cmの小型のもので、百済から全羅道地域に多くみられる両耳付壺と考えられる[20]（図65－11）。これらの軟質土器の時期は日本での他の出土例からは５世紀前半を前後する時期に多く見られるので、これらもひとまずそのころと考えておきたい。

(7) 石台遺跡[21]（図65－13）

石台遺跡は大橋川を挟んでタテチョウ遺跡の南東約４kmほどの、大橋川に南から注ぐ馬橋川の河口近くの沖積地、松江市東津田町に位置する。遺跡の詳細はあまりよくわかっておらず、朝鮮系土器は包含層から出土している。共伴遺物などははっきりしない。

口径8.3cm、高さ5.3cmの鉢形の陶質土器である。陶質土器としてはあまり見かけない器形である。ただ新羅や伽耶地域などでみられる赤褐色軟質土器の有蓋鉢、たとえば慶尚北道慶徳槐市里16号墳出土例[22]（図65－14）と比較的類似している。陶質土器では忠清南道注山里４号墳[23]や慶尚南道金海池永邑出土例[24]などが比較的類似している。ただ口縁部の立ち上がりは槐市里16号墳例が最も高く、次いで石台遺跡例、そして注山里４号墳例などの順である。この立ち上がりの高さが時期を示しているならば、槐市里16号墳が５世紀後半で、注山里４号墳が６世紀後半～７世紀前半ころと考えられるので、石台遺跡は６世紀前半を前後する時期のものと考えておきたい。また系譜としては注山里古墳群は忠清南道であるので一般的には百済であるが、他の出土遺物は伽耶系というか、新羅真興王が勢力を伸ばし始めた６世紀後半以降の伽耶を含めた新羅系遺物[25]であり、ひとまずこの石台遺跡例は伽耶・新羅系の遺物と考えておきたい。

(8) 下黒田遺跡[26]（図65－15）

石台遺跡がある東津田町から南のやや内陸部の松江市大庭町の団原丘陵上に位置する。この地域は古代出雲の中枢部であり、「額田部臣」銘鉄刀を出土した岡田山１号墳[27]なども比較的近く、この遺跡自体山代郷の役所などに関わるものと考えられている。

朝鮮系土器は遺構とは関係なく出土しており、共伴土器などは確定できない。陶質土器で、やや小型の台付き壺などの下半部である。上半部がないためよくわからないが、台付き把手付き壺や台付き椀などの可能性もある。脚台径は約９cm、脚台高は2.7cm、胴部最大径は復元すると11.5cmほどになりそうである。台部には台形の透かし穴が１段３個あけられており、台の端部は鈍くふくらんでいる。

類例は下半部だけであるのでやや不安であるが、類似した脚台は慶尚南道昌寧桂城Ｂ地区35-1号墳の台付き把手付き椀[28]（図65－16）にみられる。脚台径8.8cm、同高2cm、胴部最大径12cmとほぼ似た大きさであり、脚端部の形は比較的類似し、透かし穴の形も台形で類似している。桂城例は６世紀前半と考えられており、下黒田遺跡のものの時期は６世紀前半前後と考えておきたい。系譜はこのような形のものは伽耶や新羅地域に多く見ることができるので、伽耶・新羅系のものと考えておく。

(9) 夫敷遺跡[29]（図66－１～４、６、７）

下黒田遺跡から東に中海に向かって東西に長い意宇平野が広がるが、その中央やや東寄りの八束郡東出雲町出雲郷に位置する。古墳時代には中海がもう少し入り込んでいて、比較的海が近かった

と考えられている。この意宇平野は古くからの穀倉地帯であったようで、夫敷遺跡においても弥生時代後期の水田が確認されている。

土器は5世紀前半～中葉前後の土師器と共伴して旧河道内の包含層から出土している。朝鮮系土器としては軟質土器の鍋、甕、ハケ調整の甑などがある。鍋（図66－1）の把手上面には溝が施されている。鍋以外は器種を明確にはできないが、いずれも細かな格子目タタキ（図66－2、3）が施されている。ただ厚さは4mmから1.6cmと幅があり、鉢などもあるかもしれない。

またハケ調整の甑（図66－6、7）は平底、または平底気味の底部の中央にやや大きめの円孔をあけ、その周りにそれと同じ、またはやや小さめの円孔を配したもので、穴の開け方では全羅道から伽耶地域に見られるものである。ハケ調整である点で日本産の可能性もあるが、朝鮮半島南部でもハケ調整のものは見られる[30]（図66－8）ので、持ち込み、または渡来人一、二世の作ったものの両方の可能性を考えておきたい。

これら以外では、初期須恵器かと推測されている把手付き椀（図66－4）などが出土しているが、胎土分析では陶邑産の可能性はないとされている。頸部の波状文や形態的にそっくりなものは捜せなかったが、慶尚南道陜川玉田31号墳例[31]（図66－5）などが形は比較的類似している。時期は4世紀後半から5世紀前半の伽耶地域を中心に見ることができる。

(10) 長尾古墳[32]（図66－9）

出雲東端の能義郡伯太町安田中の谷底平野に面した丘陵上に位置していた。正式な調査がなされないまま破壊され、内部主体など詳細は不明であるが、陶質土器かと考えられている器台と埴輪が採集されている。

土器は高杯形器台の破片で、杯部底部外面にコンパスを用いた2本線の波状文、脚部には一般的なハケ状工具による波状文が描かれている。杯部の上部はないが、脚部は曲線を描き、脚端部はやや薄くなりながらその端部上面に凸線をもつ。透かし穴は長方形で交互に配されている。コンパス波状文をもつ高杯形器台は慶州地域を中心に比較的見られ、慶州皇南大塚南墳例[33]（図66－10）などを類例としてあげることができる。また高杯形器台ではないが、同様の2本線によるコンパス波状文は慶尚南道金海大成洞2号墳の炉形土器[34]（図66－11）にみられる。このような類例と、長尾古墳出土例の特徴から新羅・伽耶系の5世紀前半ころのものと推測される。

(11) 古志本郷遺跡[35]（図67－1）

出雲市古志町の神戸川南岸の平地部に位置する。この遺跡は弥生時代前期に始まり、7、8世紀には神門郡衙と考えられる建物群も築かれている。

朝鮮系土器は瓦質土器の壺1点で、地元の古墳時代初頭の土器を多量に出土する溝の中から出土した。口縁部は直立気味に外反し、端部は多少面をもって終わる。肩部には細かな格子目タタキが施され、その上に沈線が巡らされている。表面は灰黒色で、断面はオレンジ色や灰色である。

形態的には慶尚南道金海良洞里235墓の瓦質土器の壺[36]（図67－2）が最も近いようである。この土器は3世紀ころのものと推測されており、古志本郷遺跡の共伴する土師器の年代とも合致するので、古志本郷遺跡の瓦質土器は3世紀ころのものと考えておきたい。

(12) 上長浜貝塚[37]（図67－3）

古志本郷遺跡の西北西約6km、神戸川西岸の出雲砂丘東縁に位置している。貝塚は奈良時代後半から平安時代末にかけて形成されたもので、それ以前は縄文時代早期末から前期初頭、弥生時代

後期から古墳時代の包含層がある。朝鮮系土器は弥生時代後期から古墳時代の包含層で出土した。

朝鮮系土器は陶質土器の壺1点である。口縁部は直線的に外反しており、端部は少しくぼむ。胴部は球形に近く、外面には縄席文が施されている。内面は無文当て具を使用し、その上をヨコナデしている。類例としては慶尚南道金海礼安里138号墳出土例（図67－4）や慶尚南道陜川玉田36号墳出土例[38]などをあげることができる。時期は4世紀後半ころと考えられている。

(13) 古八幡付近遺跡[39]（図67－5、6）

石見中部の江津市敬川町の敬川の東岸、丘陵上に位置する。現在の海までの距離は約1.5kmで、さして遠くない。遺跡は縄文時代後期の遺物が少し確認され、弥生時代では中期の環濠集落が検出され、分銅形土製品も出土している。古墳時代には横穴式石室を内部主体とする古墳が2基営まれている。奈良時代になると、掘立柱建物や段状遺構が営まれるようになり、日常の土器以外に瓦、土製権、ミニチュア土製品、移動式カマド、土錘などが出土し、これらに混じって統一新羅時代の印花文土器が出土している。

印花文土器は長頸壺の肩から頸にかけての破片（図67－5）と瓶の肩から胴部にかけての破片（図67－6）と考えられており、前者は頸部に凸帯をもち、菱形文と縦長連続文が施され、後者は多弁花文と縦長連続文が施されている。両者ともに宮川禎一氏のロッキング手法のC手法によるもので文様とあわせて、8世紀後半前後のもののようである[40]。

(14) 森ヶ曽根古墳[41]（図67－8）

石見中部の浜田市治和町、周布川西岸の見晴らしの良い標高40mの丘陵状にあり、海までは1km弱である。

墳丘はかなり削られていたが、直径約12mの周溝をもつ円墳と推測された。内部主体は東に開口する横穴式石室で、残存長4.40m、奥壁幅1.55mの無袖の横穴式石室と推測されている。

遺物は入口付近を中心に、須恵器、土師器、鉄鏃、鉄刀、鉄斧、耳環、メノウ勾玉などが出土し、その中に陶質土器が1点含まれていた。小型の器台で、形は体部上半が大きく外反し、その変化部の直下に直径7mmの円孔が7個あけられていたようである。口径12.9cm、底径14.9cm、高さ6.25cmである。この器台は典型的な高霊タイプのものであり、類例としては慶尚北道高霊池山洞33号墳（図67－9）や慶尚南道陜川三嘉1号墳A遺構などで出土したものをあげることができる[42]。

時期は、共伴須恵器は6世紀後半から7世紀末ころまであるが、伽耶での例を参考にすれば、6世紀前半以前のものと考えておきたい[43]。

(15) 伝津和野[44]（図68－1）

出土地、入手経路などは全く不明であるが、伝津和野町出土とされて、現在津和野町立郷土館に所蔵されているものである。

台付き長頸壺で、頸部にコンパス円文を飾る特徴を持つ。胴部はやや扁平気味の球形をなし、頸部は曲線を描きながら外反する。口縁部は頸部との境に受け部状の凹帯をもち、直線的にやや内傾する。脚台部は欠けている。

新羅や伽耶地域で多く見られるもので、コンパス円文や口縁部の特徴などから類例を捜すと、慶州天馬塚古墳（図68－2）、慶州月城路カ-1号墳、同カ-18号墳、大邱伏賢洞古墳群Ⅰ-50-2号墳、呂寧桂城古墳群B地区35-1号墳などで出土している[45]。これらをもとに時期を推測すると、5世紀末から6世紀前半を前後する時期ではないかと考えられる。

(16) 伝珍崎[46]（図68－3）

隠岐郡西の島町珍崎で出土したとされる土器である。陶質土器の高杯の蓋である。口径12.5cm、高さ6.5cmで、高さ2.3cmのつまみがついている。つまみの上部は外に小さく折れ曲がり、つまみの体部には1.1×1.6cmの長方形の透かし孔が4個あけられている。蓋の天井部は沈線で2分され、その上下に刺突文が施されている。口縁部はまっすぐであるが、天井部との境に断面三角形の凸帯を貼り付け、口唇部は丸くおさめている。

このようなつまみをもち、天井部に二重の刺突文を施す例は、慶尚南道昌寧校洞1号墳[47]（図68－4）などに見られ、5世紀代のものと考えられる。

3．整理

(1) 時期

以上、出雲・石見・隠岐で出土している、または出土したと伝えられている古墳時代前後の朝鮮系土器を見てきたが、まず時期的には弥生時代末段階の3世紀から、7世紀代のものははっきりしないが、8世紀まで継続的に見ることができる。このような継続的な流入は北部九州や近畿地方を除けば極めて珍しい。特に3世紀、4世紀のものは全国的にもあまり多くないので重要である。なかでも鹿島町沖の海揚がりの完形品の楽浪土器は極めて重要である。

5世紀代の資料は今回取りあげた16遺跡中約半数近くを占め、最も多く、全国的な傾向と合致している。なかでもタテチョウ遺跡や夫敷遺跡では後述するように器種・数ともに多く、これも全国的な傾向と合致している。

6世紀代の資料は全国的にはあまり多くないが、今回扱った4例ほどの資料は全体の1／4を占めており、比較的多い方である。これも一つの特徴といえよう。

一方、古八幡付近遺跡の8世紀後半の印花文土器は、これまで山陰地方では統一新羅時代の印花文土器が出土していなかったので、注目したい。江浦洋氏が指摘するように[48]新羅印花文土器は国家に関わる役所や工房などの遺跡で出土することが多く、この遺跡の性格も含めて検討する必要があるであろう。また印花文はないが、8世紀後半代の新羅土器の蓋と考えられるものがとなりの鳥取県倉吉市大原廃寺で出土している[49]。

いわゆる統一新羅様式の土器は7世紀から8世紀中葉ころまでのものが多いようであり[50]、これらの古八幡付近遺跡と大原廃寺出土の8世紀後半かと考えられる時期の統一新羅時代の土器は白井克也氏も述べているように日本の外交のあり方がかわったことを反映している可能性はあるであろう[51]。ただ出雲国分寺など山陰の古代寺院においては他地域であまり見られない新羅系瓦など朝鮮系瓦が多く使用されており[52]、この山陰地域が国家レベルの交渉だけでなく、いつも朝鮮半島と関わりを持っていたことを教えてくれているといえよう。

(2) 系譜

系譜に関しては、ほとんどが朝鮮半島南東部の伽耶地域や新羅地域に類例が見られる。6世紀半ばころに伽耶は新羅に併合されていくので、6世紀代になるとその明確な識別は難しくなるが、類例を捜すことができたおもな地域名をあげると、慶州、義城、星州、高霊、陜川、昌寧、金海、東萊など、慶尚北道と慶尚南道の各地域である。

ただタテチョウ遺跡の両耳付壺は一般的に百済の忠清道から全羅道地域に見られるものであり、

またタテチョウ遺跡や夫敷遺跡の平底であまり大きくない円孔をあけた甑は全羅道から伽耶西部に見られるものである。これらの遺跡の資料に注目すると、主体は朝鮮半島南東部の伽耶・新羅地域ではあるが、一部百済を含む朝鮮半島南西部も含めた、朝鮮半島南部全域の広い範囲と出雲・石見などの地域が関わっていたことがわかる。

(3) 質と量と器種

次に土器の質、量、器種について整理したい。

まず質であるが、瓦質土器、陶質土器、軟質土器いずれも出土している。瓦質土器は朝鮮半島では紀元前後に出現し、4世紀ころまで使用されている。陶質土器は3世紀後半代には出現しているようであるが、はじめはあまり見られず、徐々に陶質土器が多くなっていく[55]。3世紀後半から4世紀代はそのような変化の時期であり、出雲の瓦質土器はちょうど瓦質土器から陶質土器へ変化する時期のものが多くみられるようである。

陶質土器は古くから朝鮮系土器として最も認識されやすく、各地で多く確認されている。実際に今回確認した16遺跡のうち11遺跡で出土しており、最も多い。ただほとんどが1点だけである。また日本の土器と出土する例が多く、森ヶ曽根古墳の場合は時期的にも陶質土器のほうが古く、特別な意味を持って石室に納められた可能性も考えられる。

軟質土器も一部では古くから注目されていたが、近年植野浩三氏や今津啓子氏などを中心に整理され、渡来人の存在を伺うことができる資料として注目されている[56]。この出雲・石見地域ではタテチョウ遺跡と大敷遺跡で比較的まとまって出土している。タテチョウ遺跡では平底深鉢形土器、甑、甕、両耳付壺と4種類の器種が出土しており、今津啓子氏が指摘するⅠランクの遺跡となり、「極めて高い確率で渡来人の居住を推定できる集落」となる[55]。このような遺跡は畿内を除けば珍しく、その重要性が認識される。

また夫敷遺跡も鍋、甕の2種類が出土しており、今津氏のⅢランク、つまり「渡来人が居住した可能性もあるが、土器のみか土器の情報だけが移入された可能性も考慮しなければならないランク」の遺跡となる。ただタタキを有する土器は厚さに違いがあり、鍋や甕以外の器種が存在した可能性もある。さらにハケ調整ではあるが、甑が出土している。このハケ調整の甑を軟質系土器と認識すれば、3種類以上となり、今津氏のⅡランク、つまり「Ⅰランクほどではないが、渡来人が居住した可能性が高い集落」となり、やはり渡来人の存在が推測できそうである。

今津氏のランク分けは当時の中央であった畿内地域の資料をおもな対象として分類されたようであり、朝鮮半島からのいろいろな情報が畿内地域よりは明らかに少ないと考えられる地方ではもう少し条件を緩和してもよいのではないかと筆者は考えている。つまり他の朝鮮系資料も含めて総合化することで渡来人の存在を推測できるのではないかと考えている[56]。大敷遺跡の場合は4種類の軟質土器はないが、陶質土器ではないかと考えられている把手付き椀も出土している。また5世紀前半代の甑が10点以上あることなどもあわせ考えると、今津氏のⅠランクに準ずるものとして、タテチョウ遺跡同様に渡来人がいた可能性を十分に推測できるのではないであろうか。

(4) 分布 (図63)

出雲東部の鹿島町から松江市を中心とする地域が最もまとまっており、半数の8遺跡がこの地域である。また八束郡美保関町の伝弥陀が谷や能義郡伯太町の長尾古墳も広い意味でこの地域に含めることは可能であると考えるが、そうすると16遺跡中10遺跡となり、出雲・石見・隠岐全域の約

60%強がこの出雲東部地域にあることになる。これは古墳時代のこの地域の政治的・経済的な繁栄を示しているといえよう。

次いで出雲平野の2遺跡、そして多少離れてはいるが、石見の江津市古八幡付近遺跡と浜田市森ヶ曽根古墳も一つのまとまりと見ることができるかもしれない。

全体の位置を見ると、やはりいずれも海が比較的近いことがわかる。長尾古墳は能義郡伯太町にあり、やや奥まった感はあるが、それでも当時の海までは4、5kmほどしかないようである。

また古志本郷遺跡も現在では約7kmも海から離れているが、733年に編纂された『出雲国風土記』に記された「神門水海」が当時は出雲平野の中に残っていたと考えられる。図63は高安克己氏らの研究成果[57]をもとにおおざっぱに作成したものである。この図の精度は粗いと思われるが、少なくとも古志本郷遺跡は「神門水海」の近くにあったことになり、海はかなり近かったといえよう。

このように現在確認されている朝鮮系土器を出土している遺跡は比較的海が近い場所にあったということができる。

次に各地域ごとの様相を見てみる。まず鹿島町から松江市を中心とする地域である。鹿島町は島根半島のほぼ中央部に位置し、北側と南側を山に挟まれた東西に長い平野が町の中央にある。楽浪系土器は海揚がりであるが、他の2点はこの平野部で出土している。この島根半島自体が、日本海に少し突き出た形をしているが、その中でこの鹿島町付近はさらに海に突き出ており、朝鮮半島から直接渡ってくる場合も、九州や山陰の西部から海岸近くを航行する場合も、ちょうど立ち寄りやすい場所である。鹿島町の平野の西端は海に面し、この砂丘上に松菊里型土器、オオツタノハ製貝輪などを出土した弥生時代前期から中期の有名な古浦砂丘遺跡[58]がある。この人骨の中には渡来系の人骨もあるとのことである。そしてこの平野部の佐太前遺跡の北約600mに位置する佐太講武貝塚[59]では縄文時代晩期前半の層から孔列土器が出土しており、南講武草田遺跡の北側の堀部第1遺跡では松菊里型土器を出土した弥生時代前期の木棺墓群が検出されている[60]。このように鹿島町の地域は古墳時代だけでなく縄文時代、弥生時代から朝鮮半島との関係が深い地域であり、日本でも数少ない楽浪系土器がこの沖の海で引き揚げられていることを含め、朝鮮半島との関わりが深い地域である。

次に松江市を含む地域であるが、そのうちのタテチョウ遺跡と的場遺跡は宍道湖－大橋川－中海の北岸、つまり鹿島町の山を越えた南側に位置する。両遺跡ともに中海などの海からのルートだけでなく、鹿島町からの山越えルートも考えられそうな場所である。的場遺跡は中海まで1kmほどしかなく、当時海が入り込んでいたならば、目の前に海が見える場所になる。そして的場遺跡からタテチョウ遺跡へは平地部を通って約7kmで行くことができる。

タテチョウ遺跡は宍道湖と中海をつなぐ大橋川の北岸、朝酌川の河口近くに位置しているが、前述のように縄文時代から弥生時代にかけては孔列土器や松菊里型土器などの朝鮮系土器を出土しており、すぐ北側の西川津遺跡[61]でも孔列土器や粘土帯土器が出土している。そして北約1kmには金崎古墳群[62]がある。そのなかの金崎1号墳は華麗な装飾須恵器などで有名であるが、石室が朝鮮半島と直結する可能性がある全面割石閉塞の竪穴系横口式石室である可能性が高く[63]、かつ石室内に須恵器を副葬する行為はこの5世紀後半代にはあまり広がっていない朝鮮半島の儀礼行為であり[64]、このようなあり方から朝鮮半島との強い関わりが推測できる古墳である。またこのタテチョウ遺跡自体、「駅」という文字を書いた墨書土器が出土しており、この付近に古代の駅家がある

ことを推測させ、この地域が交通の要衝であったことを教えてくれている。

つまりタテチョウ遺跡およびその周辺では、縄文時代晩期から弥生時代の孔列土器や松菊里型土器、粘土帯土器などの朝鮮系土器がまず見られ、3、4世紀には地方では珍しい瓦質土器がみられ、5世紀代には多くの器種や量の軟質土器などがみられる。そして金崎1号墳など朝鮮半島との関わりを示すほぼ同時期の古墳が存在することなど、この地域に渡来人がいたであろうことを含めて、この地域が朝鮮半島と直接的な関わりが深いことがわかる。それはのちの「駅」銘墨書土器が示すように、古くから交通の要衝、おそらく陸路のみならず水路の要衝であったことと関わるのであろう。実際、タテチョウ遺跡の北側に接する原の前遺跡では3、4世紀の船着き場が検出されている[665]。この原の前遺跡の船着き場もそうであったと推測されるが、タテチョウ遺跡にも朝鮮半島などからの荷物の水揚げなどをする港湾施設があった可能性を考えてよいのではないであろうか。

次に宍道湖と中海の南側の地域を見てみる。石台遺跡、下黒田遺跡、夫敷遺跡がある。

石台遺跡はタテチョウ遺跡から大橋川を挟んで南東約4kmの沖積地に位置するが、遺跡の全体的な様子はよくわかっていない。下黒田遺跡はそこからさらに南に約2.5kmほど内陸に入ったところに位置する。この遺跡は古代出雲の中枢部にあり、有名な「額田部臣」銘の鉄刀を出土した6世紀後半の前方後方墳の岡田山1号墳や獅噛環頭大刀を出土した6世紀後半の前方後方墳の御崎山古墳[666]は南東約1kmに位置し、この遺跡自体出雲郷の役所に関わるものと考えられている。ただこの遺跡の朝鮮系土器は石台遺跡同様1点のみが遺構とは無関係に出土しており、検討がしづらい。ただ、古代出雲の中枢部で出土していることは注意しておきたい。

夫敷遺跡では旧河道内の包含層ではあるが、いま述べた2つの遺跡に比べると量種、量ともに多く出土している。弥生時代のものであるが、北西側に隣接する布田遺跡で粘土帯土器と推測されるものが出土しており[667]、8世紀には出雲国分寺や国府などの主要遺跡が西側に控えている。夫敷遺跡の朝鮮系土器が持ち込まれ、かつ生産されたと考えられる5世紀も、意宇川の支流が鳥の足状に広がり、その間の微高地や山裾に集落があり、沖積地の微高地周囲などに水田が広がっていた状況が推測される。出雲を代表する穀倉地帯である意宇平野の河口側にあり、中海からの玄関口のような場所であることなどが重要な意味を持つと考えられる。

この夫敷遺跡の朝鮮系土器は鍋、甕、甑などの軟質系土器と把手付き鉢などの陶質土器が比較的多くの在地の土師器とともにまとまって出土していることが大きな特徴の一つである。甑の調整がタタキではなく、ハケであることは朝鮮半島南部地域にもハケ調整の例があることから朝鮮半島産ではないといえないことを示してはいても、日本産である可能性も示している。しかし甑が10個体以上あることは、5世紀代のカマド付きの住居が出雲などで確認されていない現状を考えると、新しい煮炊きの道具である鍋や甑をカマドにかけて使用する生活様式を使用した人々は朝鮮半島からの渡来人たち、およびかれらの子孫たちであると考えられる。そしてこの地でそれなりの期間生活していたことを示していると考えられる。つまりいずれこの夫敷遺跡の周辺ではカマドを付設した住居が発見されるであろうが、その住居群のあり方はこの出雲地域への渡来系の人々の入り方、そして在地の人々の渡来人の受け入れ方を教えてくれることであろう。タテチョウ遺跡周辺とともに楽しみな地域である。

次に出雲平野地域では古志本郷遺跡と上長浜貝塚が確認されている。両者は約6km離れているが、かつてその地域にあったと考えられている神門水海を復元すると、その水海の周囲に面した2

つの遺跡といえそうである。朝鮮系土器はいずれも1点ずつで、出雲東部のあり方と比べるとやや弱いが、この周辺では縄文時代晩期の出雲市三田谷Ⅰ遺跡の孔列土器[68]、弥生時代の大社町原山遺跡[69]や出雲市矢野遺跡の粘土帯土器[70]などが出土している。そして土器ではないが、出雲市塩冶西遺跡では弥生時代後期の大陸系の篳ではないかと推測される木製品や三稜形の木鏃も出土している[71]。

この地域は古代出雲を代表する地域であり、3世紀の古志本郷遺跡例、4世紀の上長浜貝塚例以後もつながっていると考えられる。今後5、6世紀代の朝鮮系土器が出土すると思われる。

また土器ではないが、古志本郷遺跡の東約2kmに位置する上塩冶横穴墓群の21支群10号横穴と22支群9号横穴の金糸は注目される[72]。いずれも7世紀前半のものであるが、一般に金糸は首長級の古墳などで出土するものであり、このような横穴墓では極めて異例である。金糸を使った工芸品をこの地域で作っており、それにこの被葬者が関わっていて墓まで持ち込めたのか、それとも何らかの特殊なルートで横穴墓の被葬者が入手したのであろうか。いずれにせよ金糸を用いた工芸に全く関係ない一般の人が貴重な金糸を入手することは極めて考えづらい。それも近接する横穴墓で2例も出ているのである。渡来系の金糸に関わる工芸に携わった工人が被葬者であるならば、比較的考えやすいのであるが。ちなみに22支群9号墳では金糸のほか金製の指輪も出土している。このほか朝鮮系資料としては出雲市馬木町刈山5号墳のトンボ玉と鉄鋲[73]、下古志町妙蓮寺山古墳の金銅製鉾鋲[74]、今市町大念寺山古墳の金銅製飾履[75]、上塩冶町上塩冶築山古墳の金銅製冠[76]などがある。金銅製の飾履や冠は単純には朝鮮系資料とはいえないが、これらを含めてこの出雲平野地域を見ると、この地域はやはり朝鮮半島との関わりの深さが推測でき、今後上記の2例以外に朝鮮系土器は出土すると推測される。

その他の地域では江津市古八幡付近遺跡と浜田市森ヶ曽根古墳は多少近いとはいえ、やはり点的である。しかしこれら点的な分布も、個々に見ると、それぞれの地域の中枢部や平野などがある地域である。8世紀の新羅印花文土器を出土した古八幡付近遺跡では珍しい土製権や少数ではあるが、瓦も出土しており、石見国分寺跡[77]とは6kmほどしか離れていない。6世紀の高霊系の器台を出土した森ヶ曽根古墳も周布平野が見渡せる低丘陵上にあり、5世紀代の全長67mの前方後円墳である周布古墳[78]や6世紀前半の九州の肥後型石室をもつめんぐろ古墳[79]などが南約1kmの場所にある。

以上のような分布のあり方をみると、やはり渡来人たちが渡って来る地域、そして定着する地域にはそれなりの平野があり、在地の人々がそれなりに生活している場所が近くにあることがわかる。そのなかには朝鮮半島との交流が確認できる範囲で縄文時代晩期から継続している地域もある。古墳時代に朝鮮半島から渡ってくる人々は偶然漂着する場合もあったであろうが、それまでの歴史的なつながりを知りつつ意図的にこの地域に渡来する場合もあったと思われる。そして朝鮮半島からやってくる彼らの意図とともに、受け入れ側の在地の人々の意識をも反映した結果がこれらの土器として残っているものと思われる。その両者の意識が重要である。これまで述べてきた朝鮮系土器はそれらの両者の関わりの結果を示しているのである[80]。

出雲東部の鹿島町や松江市周辺や出雲市周辺に朝鮮系土器の分布の中心があることは当時の出雲・石見地域の政治的、経済的な状況を反映していると考えざるを得ない。そしてこのような分布のあり方は日本海側全体で見てもやはり同様であろう。出雲地域が当時の日本海側の政治・経済の

中心地であったことが朝鮮系土器のまとまり、器種や量の多さ、つまり渡来人の動きなどによって理解できるのである。

4．朝鮮半島の山陰系土器

これまで出雲・石見・隠岐で出土している朝鮮系土器をあつかったが、ここでは逆に朝鮮半島で出土している山陰系土器についてふれたい。古墳時代の山陰地域の資料には土師器、須恵器、玉類など比較的個性的なものが多く、日本国内でも山陰系資料として識別できるものがある。そしてそのような山陰系資料は少ないながら朝鮮半島でも確認されている。

最もまとまっている遺跡が釜山広域市東萊貝塚[81]である。朝鮮半島の南東部の韓国第２の都市である釜山広域市の東部を南流する水営江の支流温泉川の北岸に位置する貝塚である。多量の遺物が出土しているが、瓦質土器に混じって日本の庄内式土器や山陰系の土器が出土している（図69－１～７）[82]。正確な点数はわからないが、少なくとも数点はあるようである。器種は壷、甕である。これだけ山陰系土器がまとまって出土している遺跡は初めてである。またこの東萊貝塚の北約1.5kmの東萊福泉洞萊城遺跡[83]で北部九州の弥生時代中期初めから前半の城ノ越式土器や須玖Ⅰ式土器が一つの住居からまとまって出土し、弥生人が生活していたと考えられている。さらに東萊温泉洞遺跡でも九州の弥生時代中期前半の土器が出土している[84]。そして４、５世紀には東萊福泉洞古墳群[85]が築かれ、福泉洞42・45・57・71号墳などでは日本の土師器に類するものが出土している[86]。このようにこの東萊地域は日本との関係が深い地域であり、温泉川・水営江を使って山陰地域とも関わっていたことが東萊貝塚の二重口縁の壷や甕で知ることができる。東萊貝塚の山陰系土器の時期は共伴する庄内式土器などを含めて３世紀前半ころと考えられる。

次に図面は出されていないが、東萊貝塚から西へ約20kmの洛東江西岸の金海水佳里貝塚で東萊貝塚出土例と類似した二重口縁の甕の口縁部が出土している[87]（図69－８）。小さな写真のみでよくわからないが、口唇部が外に曲がっているようであり、小稿で扱った南講武草田遺跡の瓦質土器に共伴した図64－７のような形になるのであろうか。その土器の時期は水佳里貝塚での共伴遺物はわからないが、山陰での南講武草田遺跡例などからやはり３世紀ころと考えておきたい。

以上、山陰系土器を出土した２遺跡をあげたが、慶尚南道地域ではほかに北部九州や近畿地方と関わる資料が多く出土しており、単に朝鮮半島から倭という一方通行でなく、当時の両地域の人々のいろいろな動きを反映していることがすでに指摘されている[88]。ただ山陰系資料はこれまであまり明確ではなかった。当然今回取り扱った２遺跡以外にもあるであろうが、ひとまず山陰と朝鮮半島との関係は、「朝鮮半島→山陰」という一方的な流れだけでなく、「山陰→朝鮮半島」という流れもあることが確認できることは重要である。そしてその「山陰→朝鮮半島」の時期が少ない資料ではあるが、いずれも３世紀である。３世紀は朝鮮半島でも日本でも古代国家への動きが活発になり始める時期である。このような日本国内だけでなく、東アジアの大きな動きの中に山陰地域も一緒に入り、動いていたのであろう。

5．おわりに

以上、出雲、石見、隠岐の朝鮮系土器を概観し、簡単な整理と検討を行い、最後に朝鮮半島で出土している山陰系土器をみてみた。

この島根県地域は古くから朝鮮半島と関わりがあり、縄文時代晩期から弥生時代の朝鮮系土器も比較的多く確認され、関係の深さが認識されているが、弥生時代末ころ以降の資料も徐々に多くなってきていることがまず指摘できそうである。次いで古墳時代の資料としては、3世紀の古墳時代初頭の古志本郷遺跡例、3～4世紀のタテチョウ遺跡例、4世紀の上長浜貝塚例と前期にも比較的まとまっていることも指摘できる。そして中期の5世紀になると、タテチョウ遺跡や夫敷遺跡のような1遺跡で多くの朝鮮系土器を出土する遺跡を含め7遺跡という数になる。後期の6世紀ももや不確実な例を含めて4遺跡前後と比較的多い。しかし7世紀は確認例がない。そしてやや離れて8世紀後半に1遺跡見られる。

以上のような朝鮮系土器の出土遺跡の数とその動きは、畿内や北部九州に比べれば確かに少ないかもしれないが、当時の地方では多い方であり、朝鮮半島と島根県地域との継続的な関わり、関わりの深さ、そしてその時代ごとの関わりのあり方を見せているといってもよいであろう。5世紀の遺跡数と1遺跡内の出土点数が多いことは全国的な動きと同じである。その前後の3、4世紀や6世紀は他の地方と比べると比較的多い方であろう。しかし7世紀が全くないことは少し気になる。ただ8世紀後半の印花文土器は山陰地域初めてのもので興味深く、今後の方向性を考える上で注目したい。

次に、個々の地域の中で注目されるものとして、5世紀代のタテチョウ遺跡や夫敷遺跡のあり方は、渡来人との関わりを説明できそうである。特にタテチョウ遺跡はその立地などから港湾施設などとの関わりも推測でき、今後の展開が楽しみである。さらに金崎1号墳の伽耶的な竪穴系横口式石室、須恵器を石室内に納める儀礼のあり方などは朝鮮半島との関わりの深さを示しており、タテチョウ遺跡と金崎1号墳などを含めたこの地域の今後の検討が必要である。

大敷遺跡周辺では朝鮮半島との関わりを示す資料はあまり多くなく、明確ではないが、出雲中枢部であり、今後の調査に期待したい。

また、出雲平野地域では朝鮮系土器は3世紀の古志本郷遺跡例と4世紀の上長浜貝塚例しかないが、周辺の朝鮮系資料を出土する遺跡をあわせ考えると、今後5世紀以降の朝鮮系土器が出土する可能性は高いように思われた。特に上塩冶横穴墓群の7世紀前半の金糸や金製指輪の存在は、渡来系の工人の存在を推測させる。

今回は基本的に古墳時代を中心とした時期の朝鮮系土器のみで検討したが、その前後の時代の土器、同時期のほかの遺構や遺物も総合的に検討しなければならない。そして一方で九州や畿内との関わりも意識しながら朝鮮半島を見る視点も当然忘れてはならない。このようなより広い視野から総合的に資料を検討すれば、より具体的な朝鮮半島との関わりが見えてくるであろう。

今回の小稿は不十分な点が多々あるが、少なくとも朝鮮半島との縄文時代以来のつながりの継続性は改めて確認できたと思う。中央である畿内や直接朝鮮半島と向かい合う九州とは異なる、山陰地域ならではの朝鮮半島との関係も多少見えたのではないであろうか。今後もこの地域の個性に注目しながら広い視野で見ていきたい。

最後になったが、小稿をなすにあたり、内田律雄氏と角田徳幸氏には山陰地方の常識的なことから、細かな資料まで多くのことをご教示・ご指導いただいた。またその他にも多くの方々にお世話になった。末筆ながら記して謝意を表します。

赤澤秀則、足立克己、内田律雄、小田富士雄、角田徳幸、勝部昭、川上稔、川原和人、定森秀夫、瀬古琢子、高久健二、武末純一、樽真治、西谷正、丹羽野裕、林健亮、平野芳英、松尾充晶、松本岩雄、柳浦俊一、渡辺貞幸、姜秉楾、申敬澈、宋桂鉉、安在晧、張允禎（敬称は省略させていただきました。）
（2001.1.14稿了）

[註]

（1）島根県出土の朝鮮系資料は、平野芳英編『'92特別展古代の出雲と朝鮮半島』島根県立八雲立つ風土記の丘、1992、日韓交渉考古学研究会編「[共同研究] 古墳時代日韓交渉の考古学的研究（上）」『古文化談叢』39、1997などにまとめられており、これらをおもに参照した。後者の島根県の資料は角田徳幸、平野芳英、川原和人、北浦弘人各氏がまとめられたものである。また最近白井克也氏が「日本出土の朝鮮産土器・陶器－新石器時代から統一新羅時代まで－」『日本出土の舶載陶磁－朝鮮・渤海・ベトナム・タイ・イスラム－』東京国立博物館、2000で、日本全国で出土している新石器時代から統一新羅時代までの朝鮮系土器をまとめており、便利である。本稿はこれも参照している。なお最初にあげた平野文献に伝津和野出土の印花文土器の椀があげられているが、山口県の別地点で出土したとも考えられており、今回ははずした。

（2）赤澤秀則「墓と海と－島根の弥生文化の一側面－」『神々の源流』大阪府立弥生文化博物館、2000

（3）水野清一・岡崎敬「壱岐原の辻弥生式遺蹟調査概報」『対馬の自然と文化』1954。小田富士雄・韓炳三編『日韓交渉の考古学－弥生時代編』六興出版、1991、p.193第97図16、17。

（4）原田淑人・田澤金吾『楽浪－五官掾王旰の墳墓－』東京帝国大学文学部、刀江書院、1930、図版84

（5）赤澤秀則『佐太前遺跡』鹿島町教育委員会、1987

（6）武末純一「小形丸底壺の軌跡－考古学から見た日朝交流の一断面－」『古文化談叢』20（下）、1989

（7）趙栄済ほか『陜川玉田古墳群Ⅰ』慶尚大学校博物館、1988、p.117図面59③

（8）金東鎬「東萊福泉洞古墳発掘調査報告」東亜大学校博物館『上老大島 附：東萊福泉洞古墳・国城東外洞貝塚』1984、p.307図面11②

（9）赤澤秀則『講武地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書５－南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会、1992

（10）沈奉謹『金海府院洞遺跡』東亜大学校博物館、1981、p.184図面66③

（11）松本岩雄「美保関町の考古資料」『美保関町誌』下巻、美保関町、1986

（12）尹容鎭『義城長林洞廃古墳群』慶北大学校博物館、1981、p.86挿図43②

（13）定森秀夫「韓国慶尚北道義城地域出土陶質土器について」『永井昌文教授退官記念論文集　日本民族・文化の生成』六興出版、1988。同「日本出土の陶質土器－新羅系陶質土器を中心に－」『MUSEUM』503、1993

（14）飯塚康行ほか『松江北東部遺跡発掘調査概報－本庄川流域条里制遺跡・的場遺跡－』松江市教育委員会、1990

(15) 岡戸哲紀『陶邑・大庭寺遺跡Ⅴ』大阪府教育委員会、1996、p.269第184図1334など

(16) 鄭澄元・安在晧ほか『金海礼安里古墳群Ⅱ』釜山大学校博物館、1993、p.140図面103-2

(17) 宋義政ほか『慶州市月城路古墳群』国立慶州博物館、1990、p.100図面45②

(18) タテチョウ遺跡全体に関しては、島根県教育委員会『朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書』Ⅰ～Ⅳ、1980～1992。今回取り上げた朝鮮系土器は同『同Ⅲ』1990と同『同Ⅳ』1992に報告されている。

(19) 李海蓮「嶺南地域の甑に関して」『博物館研究論集』2、釜山直轄市立博物館、1993。酒井清治「日韓の甑の系譜から見た波来人」『楯崎彰一先生古希記念論文集』真陽社、1998。杉井健「甑形土器の基礎的研究」『待兼山論叢』28、1994年。以下、甑の地域性に関してはこれらを参照。

(20) 金鍾萬「馬韓圏域出土両耳付壺小考」『考古学誌』10、韓国考古美術研究所、1999

(21) 片岡詩子ほか『石台遺跡』島根県教育委員会、1986

(22) 崔鍾圭・朴方龍ほか『盤徳槐市里16号墳』国立慶州博物館、1999、p.66図面21⑨

(23) 尹武炳『大清ダム水没地区遺蹟発掘調査報告書（忠清南道篇）』忠南大学校博物館、1978、図面18

(24) 金元龍・岡崎敬・韓炳三編『世界陶磁全集17韓国古代』小学館、1979、p.198図版169

(25) 金鍾萬『短脚高杯の歴史性に対する研究』忠南大学校修士論文、1990

(26) 昌子寛光『下黒田遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会、1988

(27) 松本岩雄ほか『出雲岡田山古墳』島根県教育委員会、1987

(28) 鄭澄元・金玉年ほか『昌寧桂城古墳群』釜山大学校博物館、1995、p.160図面99-10

(29) 板垣旭・広江耕史・桑原真治『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ（夫敷遺跡）』島根県教育委員会、1989

(30) 註10沈文献、p.140図面43④

(31) 註７趙ほか文献、p.97図面48④

(32) 川原和人『島根県発見の朝鮮系陶質土器』『古文化談叢』５、1978

(33) 大韓民国文化財管理局文化財研究所『皇南大塚（南墳）発掘調査報告書』1993、図面189④。日本では大阪府一須賀２号窯跡、福岡県有田遺跡などでみられるが、有田遺跡例は１本線で表現されており、一須賀２号窯跡例は波状文の表現がぎこちなく、直線的な部分をもつなど異なる（堀江門也・中村浩「一須賀古窯跡出土遺物について」『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会、1978、山崎純男「福岡市有田遺跡出土の陶質土器と古式土師器」『古文化談叢』６、1979）。

(34) 申敬澈・金宰佑『金海大成洞古墳群Ⅰ』慶星大学校博物館、2000、p.103図面21-9

(35) 本報告書（内田律雄ほか『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告ⅩⅡ』島根県教育委員会、2001）

(36) 林孝澤・郭東哲『金海良洞里古墳文化』東義大学校博物館、2000、p.150図面27-2

(37) 川上稔ほか『上長浜貝塚』出雲市教育委員会、1996

(38) 註16鄭・安ほか文献、p.155図面116-3、註７趙ほか文献、p.117図面59①

(39) 東森晋・池田哲也『一般国道９号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』島根県教育委員会、2000

(40) 宮川禎一「文様からみた新羅印花文陶器の変遷」『歴史と考古学』高井悌三郎先生喜寿記念論集、1988

(41) 浜田市教育委員会『周布小建設予定地内埋蔵文化財（森ヶ曽根古墳）発掘調査報告書』1986

(42) 金鍾徹『高霊池山洞古墳群』啓明大学校博物館、1981、p.55第24図⑨、沈奉謹『陜川三嘉古墳群』東亜大学校博物館、1982、p.86図面16①

(43) 定森秀夫「韓国慶尚北道高霊地域出土陶質土器の検討」『岡崎敬先生退官記念論集東アジアの歴史と考古』上、同朋舎出版、1987。禹枝南（定森秀夫訳）「大伽耶古墳の編年－土器を中心として－」西谷正編『古代朝鮮と日本』古代史論集４、名著出版、1990。

(44) 註１平野文献、角田徳幸氏にご教示いただいた。記して謝意を表したい。

(45) 金正基ほか『天馬塚』大韓民国文化財管理局文化財研究所、1975、p.143挿図128⑤、註17宋ほか文献、p.38図面10②、p.198図面99⑧、尹容鎭・李浩官「大邱伐賢洞古墳群Ⅰ」慶北大学校博物館、1989、p.321図面65-3、註28鄭・全ほか文献、p.164図面101-1など

(46) 註32川原文献

(47) 沈奉謹ほか『昌寧校洞古墳群』東亜大学校博物館、1992、p.59図面25②

(48) 江浦洋「日本出土の統一新羅系土器とその背景」『考古学雑誌』74-2、1988

(49) 眞田廣幸ほか『史跡大原廃寺発掘調査報告書』倉吉市教育委員会、1999

(50) 註48江浦文献、註１白井文献など

(51) 註１白井文献

(52) 亀田修一「朝鮮半島から見た出雲・石見の瓦」「八雲立つ風土記の丘」118･119合併号、島根県立八雲立つ風土記の丘、1993。鳥取県大原廃寺では統一新羅時代の土器のほか、統一新羅様式の外区外縁に唐草文を飾った軒丸瓦も新たに出土している（註49眞田ほか文献）。

(53) 申敬澈「加耶成立前後の諸問題－最近の発掘調査から－」『伽耶と古代東アジア』新人物往来社、1993、崔鍾圭「陶質土器の起源」『考古学報』1994など

(54) 植野浩三「韓式系土器についての予察」『奈良大学紀要』12、1983、今津啓子「大阪湾沿岸地域出土の朝鮮系軟質土器」『岡崎敬先生退官記念論集　東アジアの考古と歴史』同朋舎出版、1987、同「渡来人の土器－朝鮮系軟質土器を中心として－」『古代王権と交流５　ヤマト王権と交流の諸相』名著出版、1994、田中清美「５世紀における摂津・河内の開発と渡来人」『ヒストリア』145、1989など。筆者も「考古学から見た渡来人」『古文化談叢』30（中）、1993において軟質土器と渡来人の関わりについて述べた。特に平底深鉢形土器の重要性を指摘した。

(55) 註54今津後者文献

(56) 註54亀田文献、亀田修一「考古学から見た吉備の渡来人」武田幸男編『朝鮮社会の史的展開と東アジア』山川出版社、1997

(57) 高安克己・竹広文明「『風土記』時代の出雲の自然環境」山本清編『風土記の考古学３　出雲風土記の巻』同成社、1995、図１

(58) 註２赤澤文献。弥生時代の朝鮮系土器に関しては、片岡宏二『弥生時代渡来人と土器・青銅器』雄山閣、1999にまとめられている。小稿の弥生時代の朝鮮系土器についてはは赤澤氏註２文献と片岡氏文献を全般的に参照している。

(59) 註２赤澤文献

(60) 鹿島町歴史民俗資料館『開拓者の眠るところ　速報！堀部第１遺跡木棺墓群』1999
(61) 島根県教育委員会『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書』Ⅰ～Ⅶ、1980～2000
(62) 岡崎雄二郎ほか『史跡金崎古墳群』松江市教育委員会、1978
(63) 土生田純之「二基の「竪穴式石室」－横穴式石室の伝播に関連して－」『史泉』55、1981。柳沢一男「竪穴系横口式石室再考－初期横穴式石室の系譜」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』下巻、森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会、1982。林日佐子「日本と朝鮮における竪穴系横口式石室」森浩一編『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズⅠ、1982。亀田修一「朝鮮半島南部地域における竪穴系横口式石室」『城二号墳』宇土市教育委員会、1981。
(64) 土生田純之「古墳出土の須恵器（1）」『末永先生米寿記念献呈論文集』1985
(65) 西尾克己ほか『朝酌川中小河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　原の前遺跡』島根県教育委員会、1995
(66) 大谷晃二ほか『御崎山古墳の研究』八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅲ、島根県教育委員会・島根県立八雲立つ風土記の丘、1996
(67) 八幡賢一・萩雅人『一般国道９号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ（布田遺跡）』島根県教育委員会、1991
(68) 鳥谷芳雄ほか『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ　三田谷Ⅰ遺跡Vol.３』島根県教育委員会、2000
(69) 村上勇・川原和人『出雲・原山遺跡の再検討－前期弥生土器を中心にして－』『島根県立博物館調査報告』２、1979
(70) 田中義昭『古代出雲文化の展開に関する総合的研究－斐伊川下流を中心として－』1989
(71) 足立克己・池淵俊一『弩？ジョッキ・腰掛…続々出土』文化庁編『発掘された日本列島　'99新発見考古速報』朝日新聞社、1999
(72) 林健亮ほか『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　上塩冶横穴第20・21支群』島根県教育委員会、1995、守岡正司『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ　上沢Ⅱ遺跡・狐廻谷古墳・大井谷城跡・上塩冶横穴（第7・12・22・23・33・35・36・37支群）』島根県教育委員会、1998
(73) 西尾良一「大社造と横穴式石室」『山本清先生喜寿記念論集　山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会、1986
(74) 島根県教育委員会『妙蓮寺山古墳調査報告』1964
(75) 島根県教育委員会『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』1980
(76) 松本岩雄ほか『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター、1999
(77) 内田律雄氏は、「石見国分寺瓦について」『山本清先生喜寿記念論集　山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会、1986において、平安時代の第Ⅲ期の造営においては朝鮮半島系の瓦を使用していることを述べている。平安時代のどの時期に限定できるのかよくわからないが、８世紀後半の新羅印花文土器とともに、奈良時代後半以降の朝鮮半島との関わりを示すものとして注目できる。
(78) 島根県教育委員会『島根の文化財』３、1963

(79) 山本清「浜田市めんぐろ古墳遺物について」「山陰古墳文化の研究』山本清先生退官記念論集刊行会、1971。土生田純之「突起をもつ横穴式石室の系譜－本州における事例の検討－」『考古学雑誌』66-3、1980

(80) 註54亀田文献

(81) 釜山広域市立博物館福泉分館『釜山の三韓時代遺跡と遺物』1997

(82) 米田敏幸「畿内の韓式系土器研究の課題について」『考古学フォーラム』11、1999

(83) 釜山直轄市立博物館「東萊福泉洞萊城遺跡』、1990。朝鮮半島南部の弥生土器関係資料については、片岡宏二「朝鮮半島へ渡った弥生人」『弥生時代渡来人と土器・青銅器』雄山閣、1999や安在晧・洪潽植「三韓時代嶺南地方と北九州地方の交渉史研究－並行関係を中心に－」『韓国民族文化』12、釜山大学校韓国民族文化研究所、1998などを全般的に参照している。

(84) 申敬澈「釜山東温泉洞出土無文土器」『伽耶通信』10、1984

(85) 釜山大学校博物館『東萊福泉洞古墳群Ⅰ～Ⅲ』1982～1996など

(86) 安在晧「土師器系軟質土器考」『伽耶と古代東アジア』新人物往来社、1993

(87) 申敬澈「伽耶地域における4世紀の陶質土器と墓制」『古代を考える』34、1983、p.51㉕

(88) 朝鮮半島南部地域で出土している倭系遺物は、註1日韓交渉考古学研究会文献の中で、武末純一氏が集成している。また柳田康雄「朝鮮半島における日本系遺物」『九州における古墳文化と朝鮮半島』学生社、1989、武末純一『土器からみた日韓交渉』学生社、1991、門田誠一『海からみた日本の古代』新人物往来社、1992、註86安文献などがそのあり方について述べている。

[引用挿図]（いずれも一部改変引用）

図64－１：註２文献、図64－２：註４文献、図64－３、４：註５文献、図64－５：註７文献、図64－６～８：註９文献、図64－９：註10文献、図64－10：註11文献、図64－11：註12文献、図64－12：註14文献、図64－13：註17文献、図65－１～３：註18－Ⅳ文献、図65－４～９：註18－Ⅲ文献、図65－10：沈奉謹「陜川鳳溪里古墳群」東亜大学校博物館、1986、p.243図面189②、図65－11：鄭聖喜「公州南山里・松鶴里出土遺物」『松菊里Ⅳ』国立中央博物館、1991、p.208図面８②、図65－12：林孝澤ほか『大也里住居址Ⅱ』東義大学校博物館、1989、p.43挿図20④、図65－13：註21文献、図65－14：註22文献、図65－15：註26文献、図65－16：註28文献、図66－１～４、６、７：註29文献、図66－５：註31文献、図66－８：註30文献、図66－９：註32文献、図66－10：註33文化財研究所文献、図66－11：註34文献、図67－１：註35文献、図67－２：註36文献、図67－３：註37文献、図67－４：註38前者文献、図67－５、６：註39文献、図67－７：申敬澈ほか『金海礼安里古墳群Ⅰ』釜山大学校博物館、1985、図面・図版編p.45図面29－２、図67－８：註41文献、図67－９：註42金文献、図68－１：内田律雄氏原図トレース、図68－２：註45ほか金文献、図68－３：註32文献、図68－４：註47文献、図69：註２赤澤文献の地図と註57文献の成果により亀田作成、図69－１～７：註82文献、図69－８：註87文献の写真を亀田がトレース

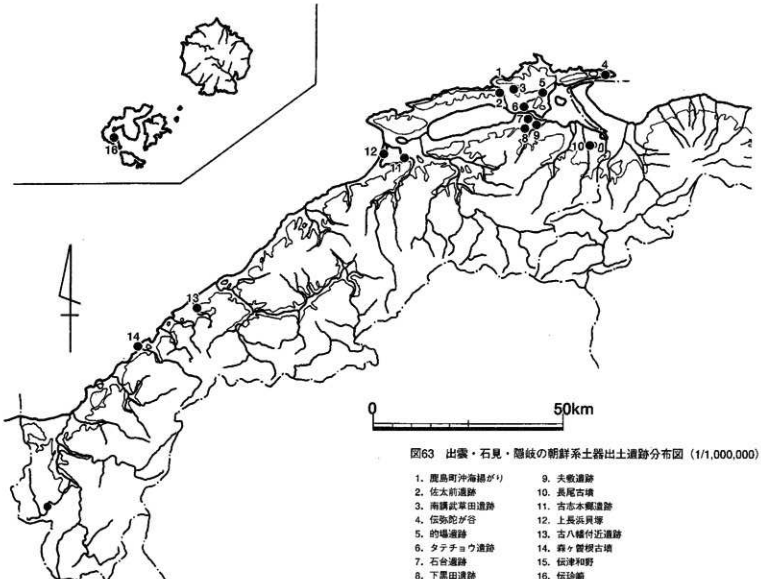


図63　出雲・石見・隠岐の朝鮮系土器出土遺跡分布図（1/1,000,000）

1. 鹿島町沖海揚がり
2. 佐太前遺跡
3. 南講武草田遺跡
4. 伝弥陀ヶ谷
5. 的場遺跡
6. タテチョウ遺跡
7. 石台遺跡
8. 下黒田遺跡
9. 夫敷遺跡
10. 長尾古墳
11. 古志本郷遺跡
12. 上長浜貝塚
13. 古八幡付近遺跡
14. 森ヶ曽根古墳
15. 伝津和野
16. 伝砂崎

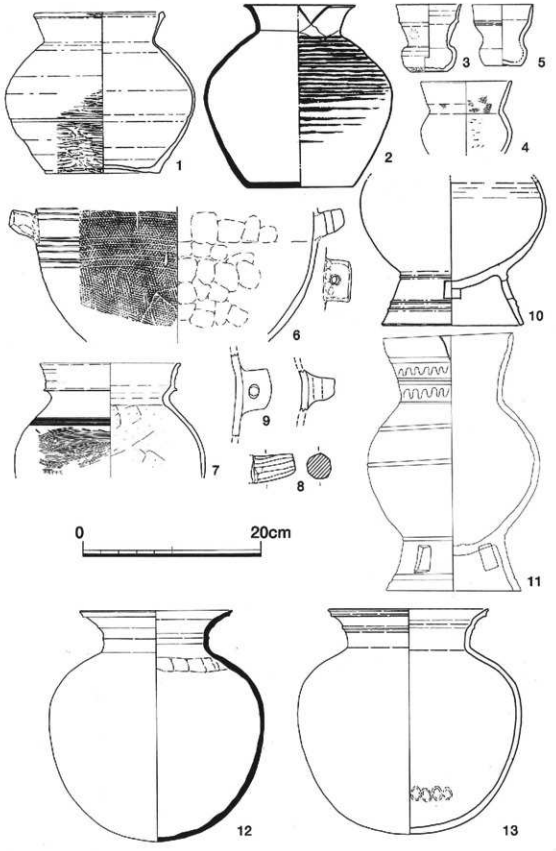


図64　出雲の朝鮮系土器および関連資料（1）（1/4）

1．鹿島町沖海掃がり
2．平塚石厳里205号墓
3．4．佐太前遺跡
5．陝川玉田36号墳
6～8．南講武草田遺跡
9．全海府談洞遺跡
10．伝弥陀が谷
11．義城長林洞Ⅷ地区13号梯
12．的場遺跡
13．慶州月城路カー8号墳

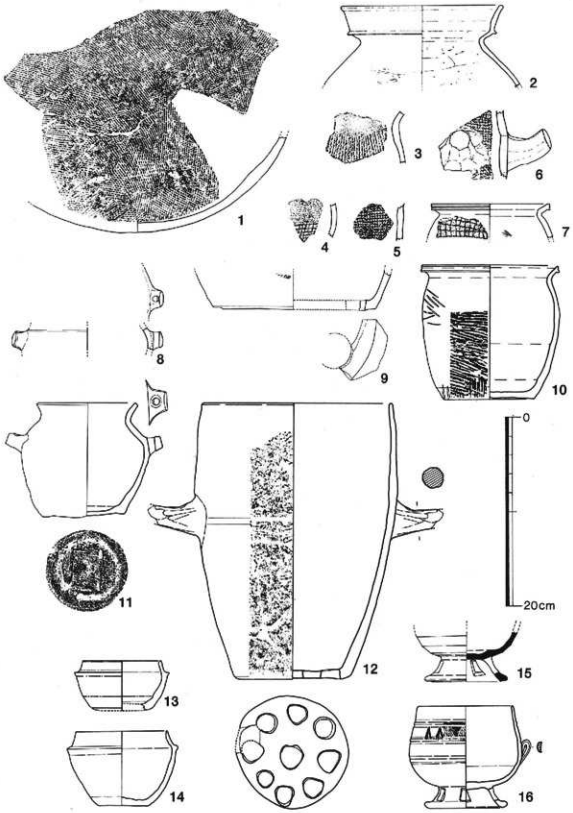


図65　出雲の朝鮮系土器および関連資料（2）（1/4）

1～9．タテチョウ遺跡
10．陝川鳳溪里125号墳
11．公州南山里遺跡
12．屠晶大也里遺跡12号住居跡
13．石台遺跡
14．盈德槐市里16号墳
15．下黒田遺跡
16．晶寧桂城B地区35-1号墳

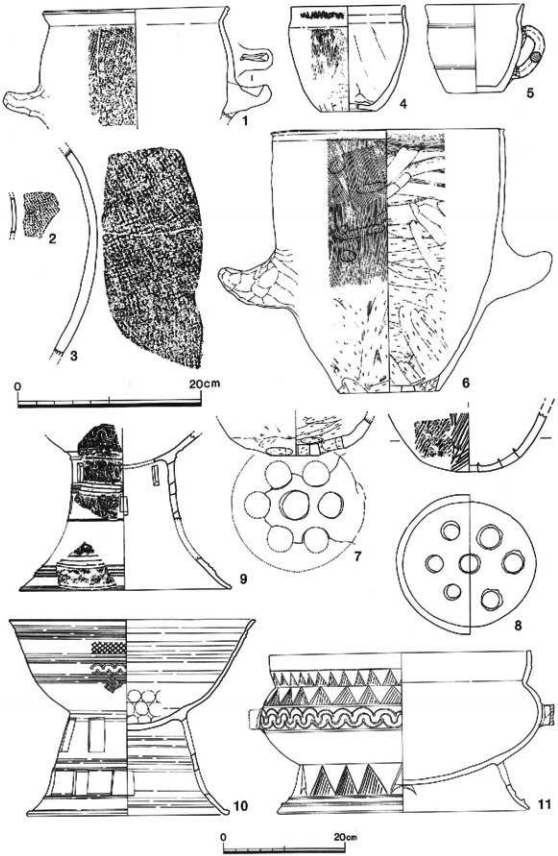


図66　出雲の朝鮮系土器および関連資料（3）（1～8：1/4,9～11：1/6）

1～4, 6, 7. 夫敷遺跡　　9. 長尾古墳
5. 狭川玉田31号墳　　10. 慶州皇南大塚南墳
8. 金海府院洞遺跡　　11. 金海大成洞2号墳

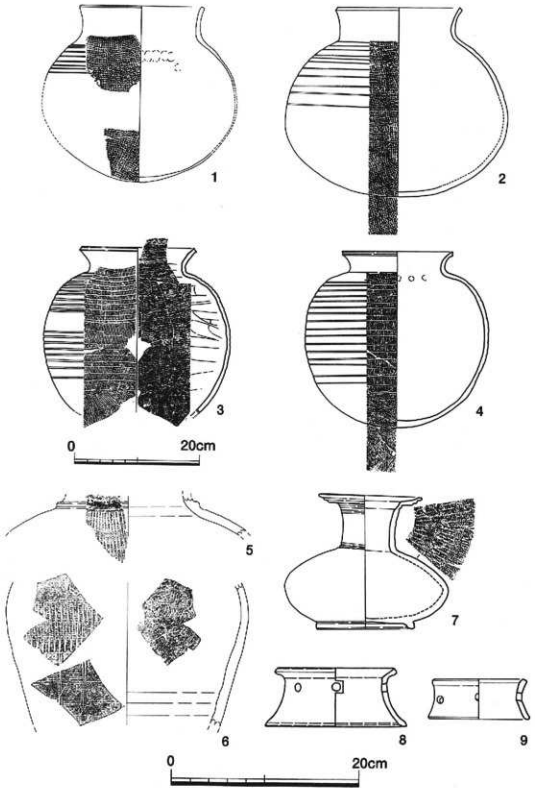


図67　出雲・石見の朝鮮系土器および関連資料（1～4：1/6,5～9：1/4）

1．古志本郷遺跡
2．金海良洞里235号墳
3：上長浜貝塚
4．金海礼安里138号墳
5，6．古八幡付近遺跡
7．金海礼安里30号墳
8．森ヶ曽根古墳
9．高雲池山洞33号墳

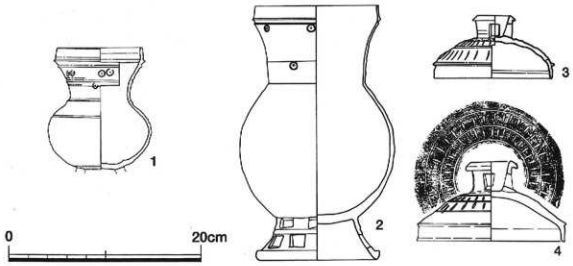


図68　伝石見・隠岐の朝鮮系土器および関連資料（1/4）

1．伝津和野
2．慶州天馬塚
3．伝珍崎
4．昌寧校洞1号墳

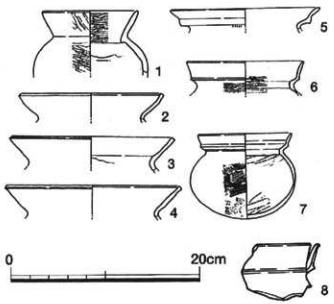


図69　韓国の倭系土器（1/4,8はスケールアウト）

1～7．釜山東萊貝塚
8．金海水佳里貝塚

Ⅷ. まとめ

古志本郷遺跡の調査の成果の一つに、天平５年（733）に編纂された『出雲国風土記』に記載のある、神門郡家・狭結馬駅と推定される遺構が発見されたことをあげることができる。これによって『出雲国風土記』の研究は一段とすすむことが期待される。Ⅲ章で報告した蟹谷遺跡とⅣ章で報告した上沢Ⅲ遺跡は、この時代の遺跡である。

上沢Ⅲ遺跡は、奈良・平安時代の小規模な鍛冶工房であったことが判明したが、そこでは鉄製品と銅製品が製造されたり、修理されたりしていたと推定できる。そればかりか、鍛冶工房であるとともに漆工房でもあり、文字を使用する人もいた。このような多様な側面をみせる上沢Ⅲ遺跡は、蟹谷遺跡のような普通の集落ではなく、当時何らかの社会的な機能を担っていたことであろう。

そこで考えられるのが周辺の官衙・寺院との関係である。『出雲国風土記』には、神門郡家と狭結馬駅が神門郡古志郷にあったと記されているが、軍団や寺院もあった。軍団は

神門郡團　郡家の正東七里なり。

とあり、現在の出雲市大津町、それもかなり斐伊川に接近したところにあったことになる。また、寺院は、

新造院一所　朝山郷の中にあり。郡家の正東二里六十歩なり。厳堂を建立つ。神門臣等が造るところなり。

新造院一所　古志郷の中にあり。郡家の東南一里なり。本厳堂を立つ。刑部臣等が造るところなり。

と二か所の記載がある。神門臣や刑部臣は神門郡条末に郡司氏族としてみえ、神門郡の有力氏族であった。

上沢Ⅲ遺跡はこのような官衙・寺院のいずれにも近く、北側には古代山陰道がはしっていた。この遺跡は神門郡内の官衙・寺院等を末端で支えていた集落ではなかったろうか。

蟹谷遺跡は小規模な谷あいに営まれた奈良・平安時代の一般的な集落であったと考えられる。どちらかといえば平安時代の遺物が中心であり、集落の時期はそのころに求められる。そこには図６－31の須恵器のようにこの地方で作られたのではなく、他国から搬入されたものもみられる。

『出雲風土記』の神門郡条日置郷には、

日置郷　郡家の正東四里なり。志紀嶋の宮に御宇しめしし天皇の御世、日置の伴部等、遣され来て、宿停まりて政爲し所なり。故、日置といふ。

とあり、古志本郷遺跡を神門郡家とするならば、蟹谷遺跡や上沢Ⅲ遺跡はこの日置郷を構成していた集落であったと思われる。

古志本郷遺跡Ⅰ区は弥生時代から近代まで複合した遺跡であった。その中でも、古墳時代前期、中・近世に遺構・遺物が集中していた。

古墳時代前期ではＳＤ０２から一時に廃棄されたと考えられる多くの土師器が出土したことが注目される。中・近世の遺構に大部分を削平されたためか、多くは破片となっていた。これに続く時期の遺構・遺物が皆無にちかいことは、このあたりの土地の利用や開発を考えるうえで重要な資料を提供したといえよう。これらの土師器は古墳時代前期でもおよそ加茂町神原神社古墳と同時期と

見做すことができよう。以下、二三の知見について述べてみよう。

まず、これらの土師器のうち容量が20ℓを超す大型の甕は、胴部外面に煤が付着していたことが観察されるので、通常みられる甕と同様に、煮沸に使用されたことが知られる。この時期には図51－245、248のようないわゆる山陰型の甑型土器の大型のものが出現しているので、そのようなことと関係しているのかもしれない。次に、甕型土器や高坏の中には古留式土器を模倣したと思われるものもあり（図32、36）、神原神社古墳のような前期古墳の出現との関係が浮かび上がってくる。高坏や甕型器台の脚部に小孔がみられるようになるのも（図35－118）畿内地方との関係でとらえるべきかもしれない。さらに、これらの土師器とともに韓半島産の瓦質土器（図32－76）が出土したことがあげられる。これによって、半島とこの地方の土器の年代の並行関係の手がかりが得られるとともに、両地方に交流があったことが推定される。

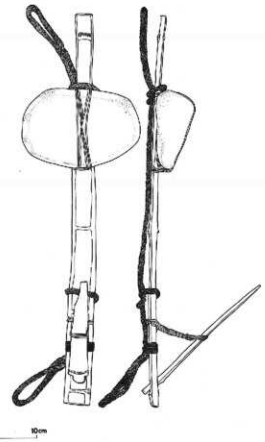


図70　碇の民俗資料（益田市歴史民俗資料館蔵）

また、図38－143で示したＳＫ88から出土した石錘は、漁網錘ではなく舟の碇と考えた。同様な石錘はこの地方では弥生時代の松江市の西川津遺跡でも出土しているが、これに続く資料である。碇と考えたのは通常の漁網錘より大きく重いことと、民俗資料例による。図70は現在益田市歴史民俗資料館に所蔵してある碇である。長さ64.5cm、幅４cmの竹製の台に、19.3×13cm、最大の厚さ6.4cmの石錘が上の端から12.5cmの位置に針金で縛り付けてある。下の端から3.5cmの位置には長さ26.2cmの先端が尖る竹製の針が鋭角に取り付けてある。益田市歴史民俗資料館には同様な碇が４例ある。この碇は１トン未満の漁船で使用されていたもので、河川や海の沿岸で漁が行われていた。古志本郷遺跡出土例は、神戸川や神西湖（かつての神門川と神門水海）での漁が想定される。

奈良・平安時代と考えられる遺構は掘立柱建物跡のＳＢ０１と溝状遺構のＳＤ０５である。Ｇ区で発見された神門郡家・狭結馬駅と推定される場所からは南へ約200mの位置にあり、それらと何らかのつながりのある遺構と思われる。特にＳＤ０５は南西から北東に向かいはした溝状遺構であるが、Ｉ区北側のＨ区の古墳時代後期から奈良時代にかけてのそれと方向を同じくしており、官衙やそれをとりまく建物群を区画する溝であった可能性もある。企画性を持った建物跡は、Ｉ区のさらに南側のＪ区やＫ区でも発見されており、郡家や駅家が想像以上に様々な施設があり、その広がりが大きかったことが推定される。『出雲国風土記』神門郡条には、

古志郷即ち郡家に屠けり。（以下略）

とみえるので、古志郷の「郷家」の存在を仮定するならば、Ｉ区の付近にそうした郷の施設をも考

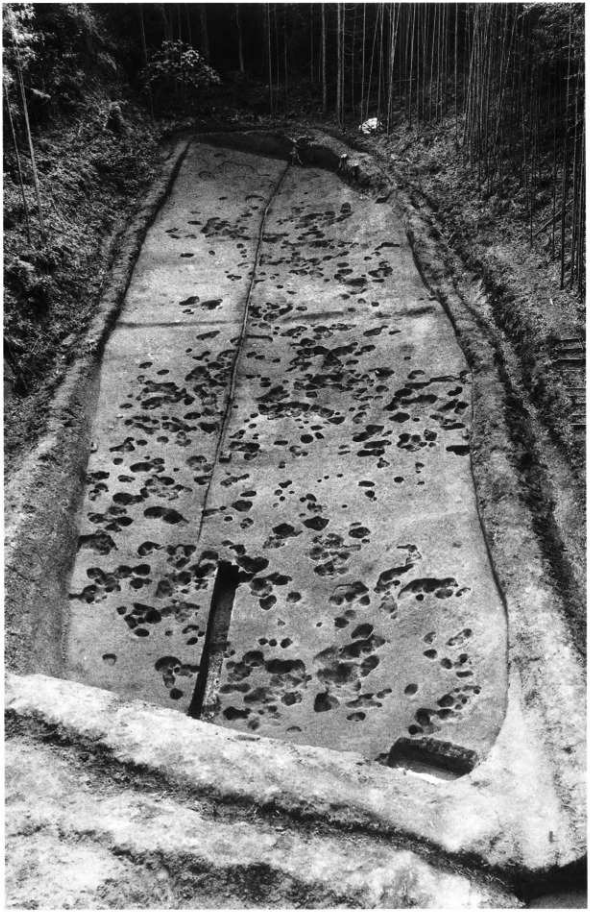
慮にいれておく必要がある。

中世の遺構は土壙と井戸以外ははっきりしないが、遺物には備前の擂鉢、美濃瀬戸系の下ろし皿、中国製青磁、李朝陶器、渡来銭等が出土している。古代末から中世初頭のものは皆無に等しく、官衙や住居の営みは、一旦古代のある時期（平安時代）で終息したようだ。中世の遺構や遺物はこのあたりの再開発を物語るものである。それはこのころこの地域に台頭してきた古志氏と関係するものであろう。

近世には中世の開発を基に、現在の県道沿いが居住地として、その南は墓地として利用されるようになった。住居は原始・古代以来の掘立柱構造の建物で、瓦の使用のないものであった。また、井戸は数軒が共同で使用していたと思われる。井戸は方形の木枠と円形の桶状枠があるが、前者が後者に先行する形態と考えられる。後者の井戸にみられた魂抜きを示す竹筒は、水道が普及した今日でもまれに行われているもので、こうした風習が近世にさかのぼる可能性を示唆している。

近世の墓は円形の土壙に桶状木製棺を埋納したもので、規模が小さいものがほとんどであった。上沢Ⅲ遺跡では、近世墓は方形で規模も大きく深い。副葬品は、古志本郷遺跡Ⅰ区ではカワラケ２～３枚か古銭が主なものである。上沢Ⅲ遺跡では陶磁器のほか玉やその他の日用品がみられた。時期も古志本郷遺跡が近世の初めであるのに対し、上沢Ⅲ遺跡は近世後半である。神戸川の左岸と右岸の地域差とも考えられるが、時期差かもしれない。

以上、盤谷遺跡、上沢Ⅲ遺跡、古志本郷遺跡Ⅰ区の調査結果から得られた知見をまとめた。今後、周辺遺跡との関係を追及することによってさらにこれらの遺跡群の意義が明確になるであろう。



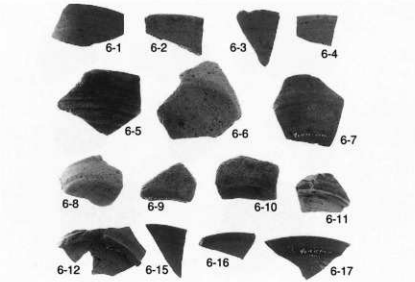
蟹谷遺跡全景

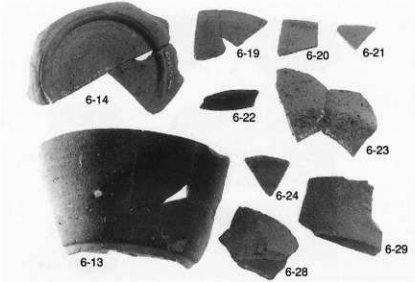
図版2

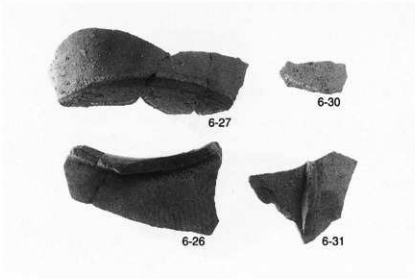
蟹谷遺跡調査前

南から北を見る

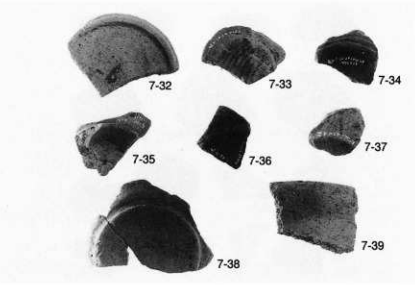
調査区中央部

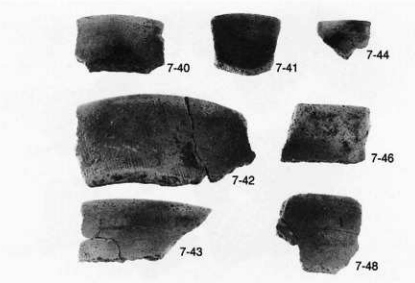

6-1
6-2
6-3
6-4
6-5
6-6
6-7
6-8
6-9
6-10
6-11
6-12
6-15
6-16
6-17

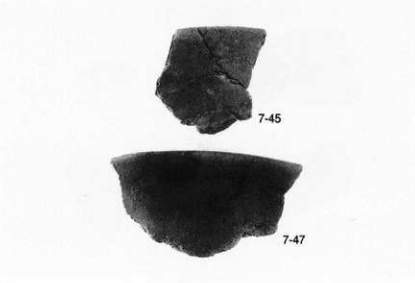

6-14
6-19
6-20
6-21
6-22
6-23
6-24
6-13
6-28
6-29

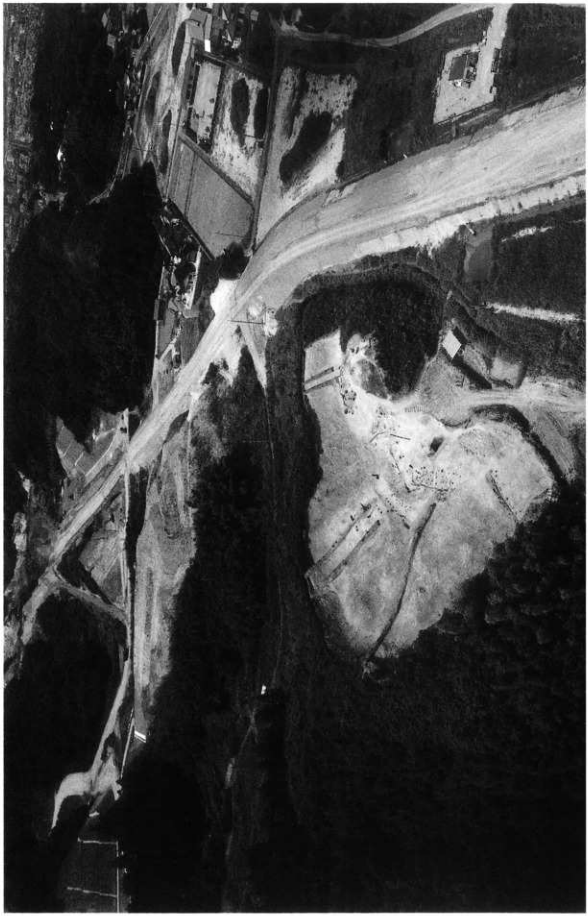

6-27
6-30
6-26
6-31

図版4


7-32
7-33
7-34
7-35
7-36
7-37
7-38
7-39


7-40
7-41
7-44
7-42
7-46
7-43
7-48


7-45
7-47



上沢Ⅲ遺跡

図版6

調査前

調査前

SB・01
SB・02
SB・03

SB01

SB01

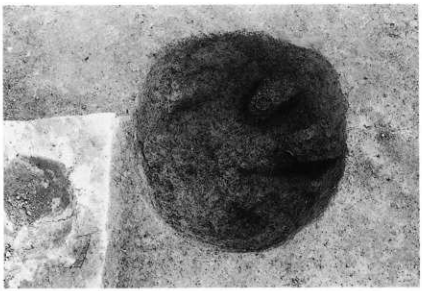
SB03

図版8

SB01周溝

SK01

SK03



SK11

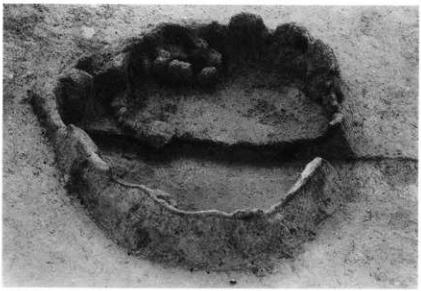
SK12

SK12

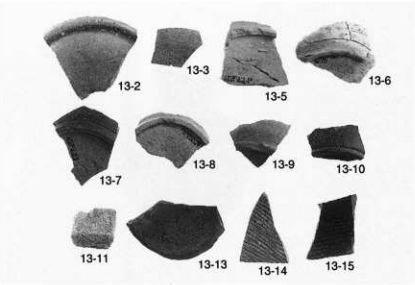
図版10

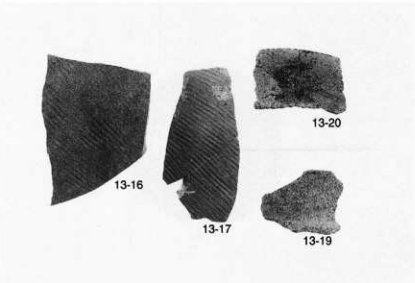
炭焼窯

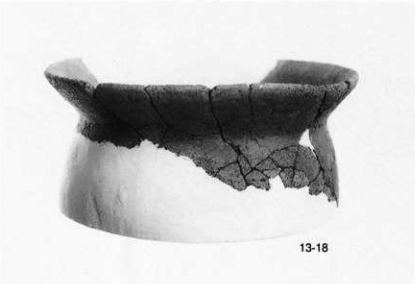
炭焼窯



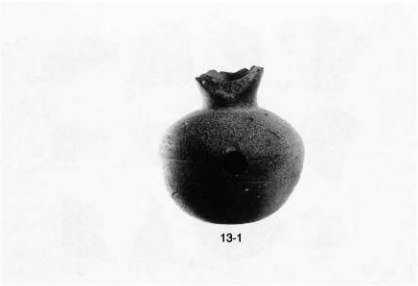
炭焼窯


13-2
13-3
13-5
13-6
13-7
13-8
13-9
13-10
13-11
13-13
13-14
13-15

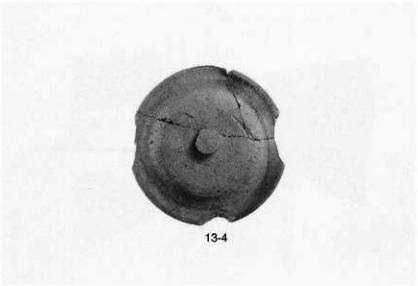

13-16
13-17
13-20
13-19


13-18

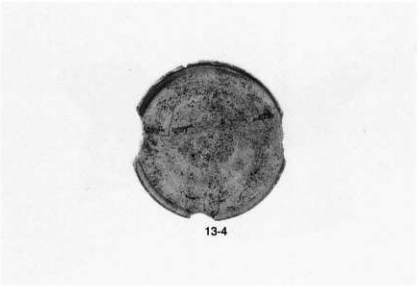
図版12



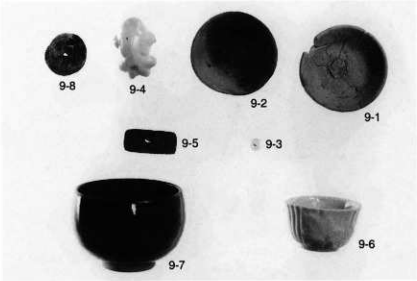
13-1



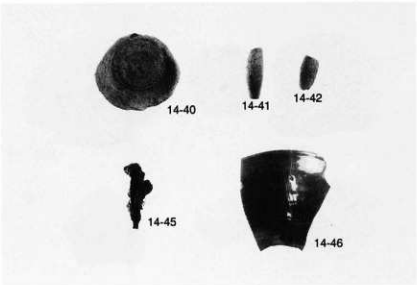
13-4



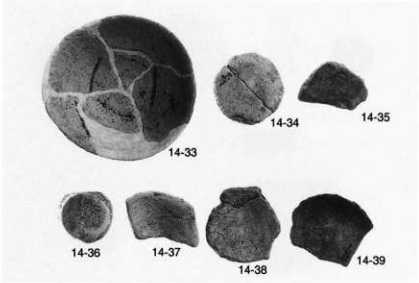
13-4

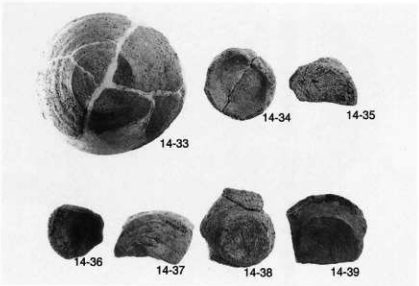


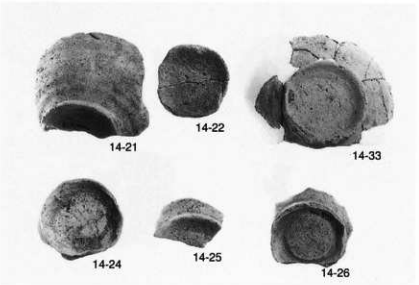
SX01

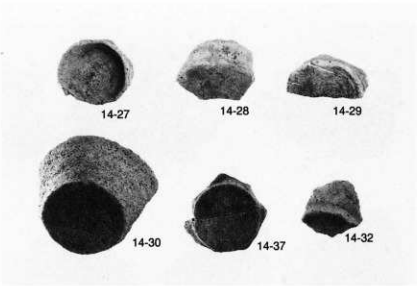


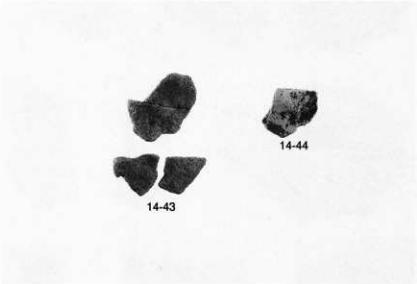
図版14

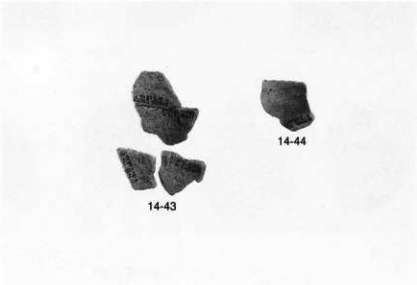

14-33
14-34
14-35
14-36
14-37
14-38
14-39


14-33
14-34
14-35
14-36
14-37
14-38
14-39

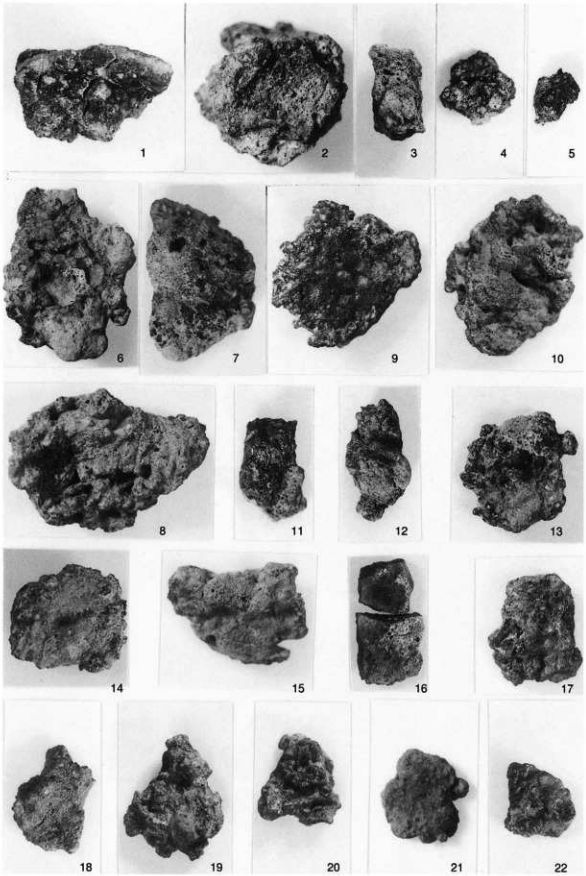

14-21
14-22
14-33
14-24
14-25
14-26

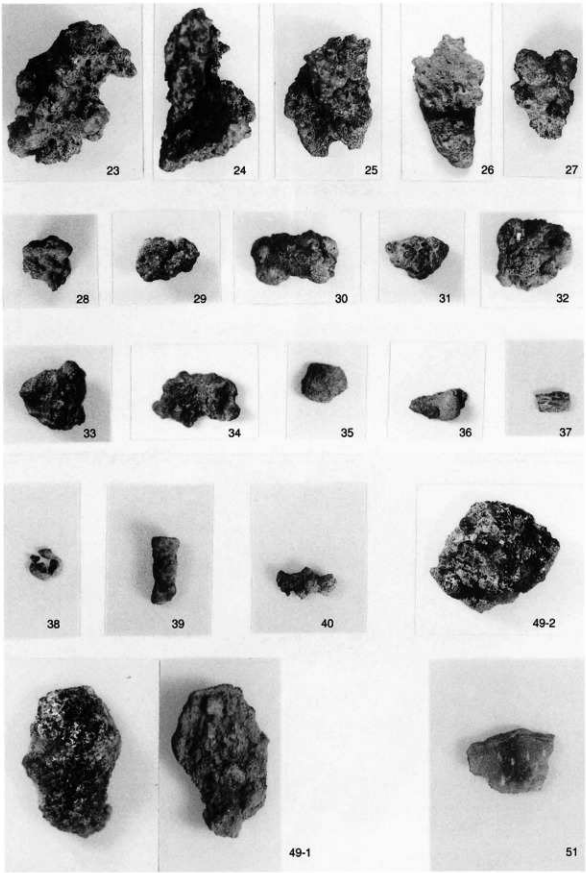

14-27
14-28
14-29
14-30
14-37
14-32


14-44
14-43


14-44
14-43

図版16




23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
49-2
49-1
51

図版18

47

50

鍛冶関係遺物